

図版17

岩陰 A トレンチ土層堆積
状況



岩陰 A トレンチ完掘状況



岩陰 B トレンチ完掘状況

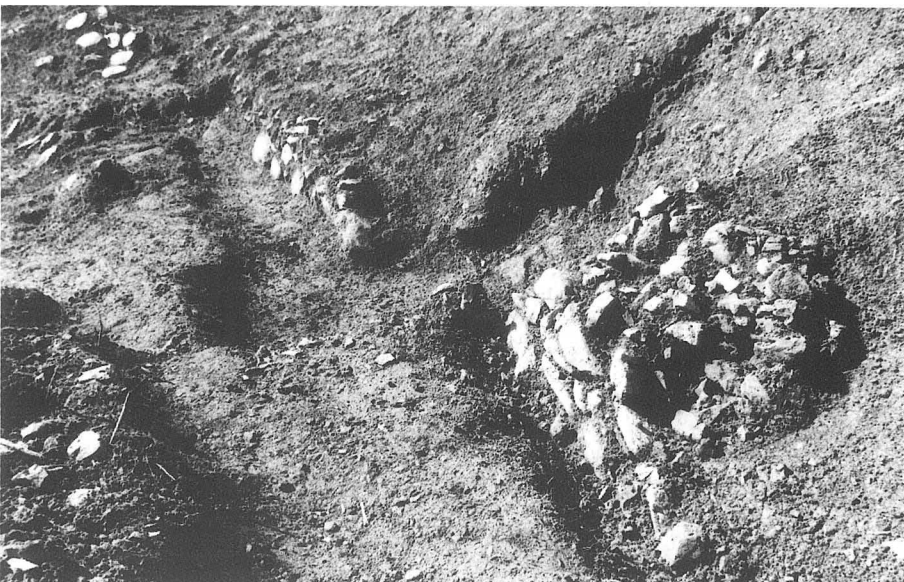




調査前風景（北から）



第15トレンチ遺物出土
状況

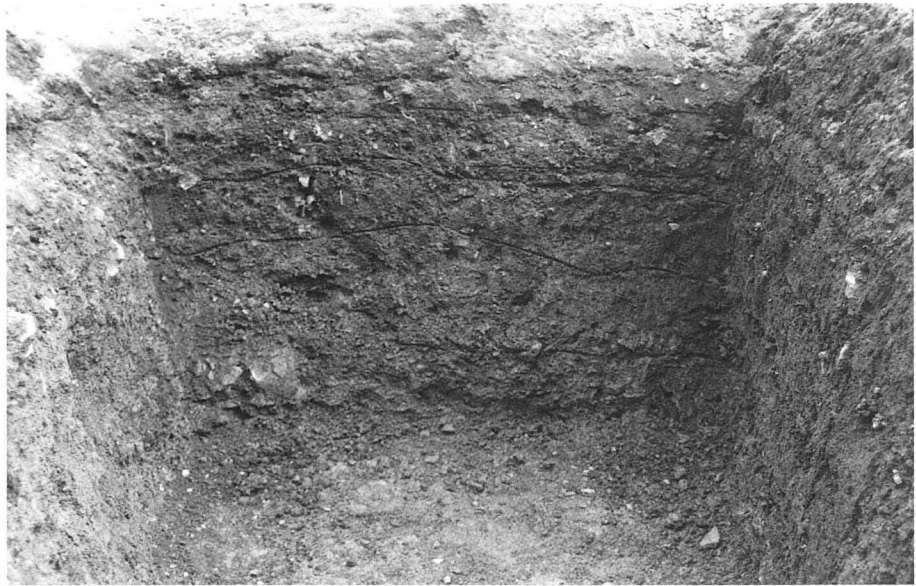


第24トレンチ付近石積
みST（東から）

調査前風景



第3トレンチ土層堆積
状況

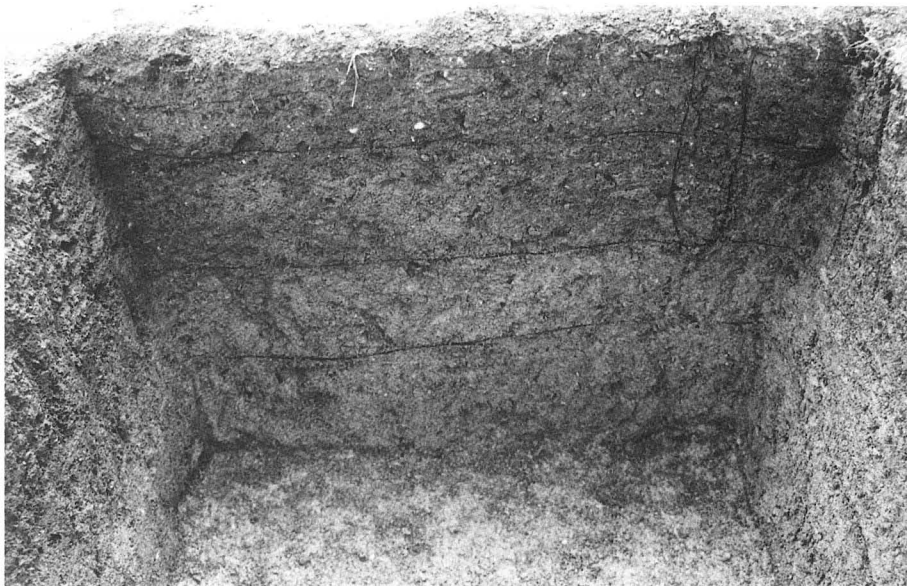


第4トレンチ完掘状況
(西から)





調査前風景



第10トレンチ土層堆積
状況



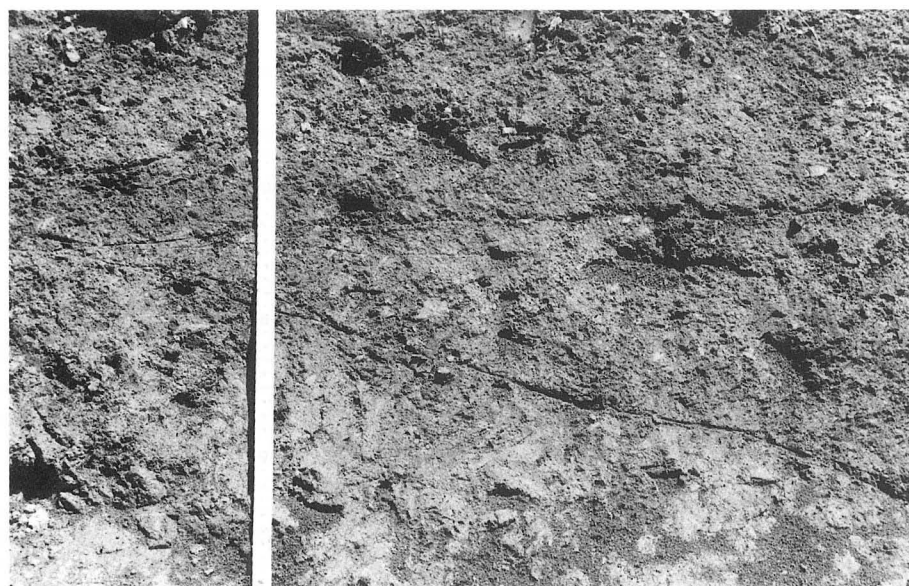
第10トレンチ拡張遺構
完掘状況（北東から）



調査前風景



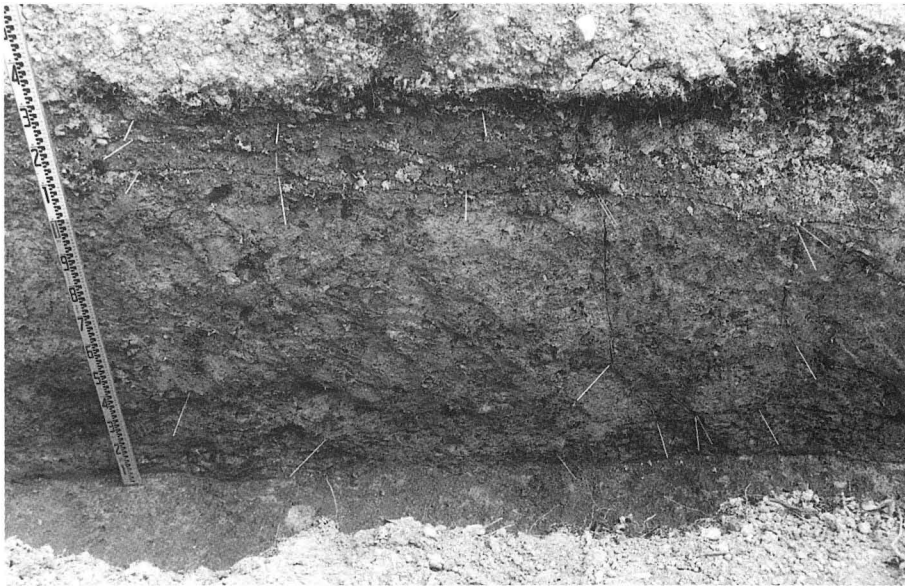
第1トレンチ遺構検出
状況



第11トレンチ土層堆積
状況



調査前風景



第11トレンチ土層堆積
状況



第11トレンチ完掘状況
(北西から)



第2トレンチ土層堆積状況



第3トレンチ土層堆積状況



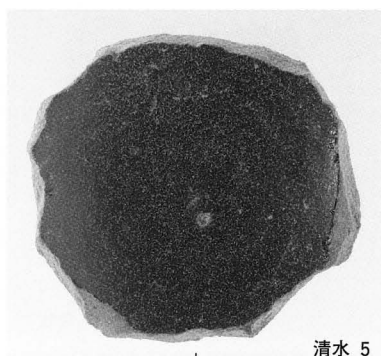
第3トレンチ完掘状況



清水 2



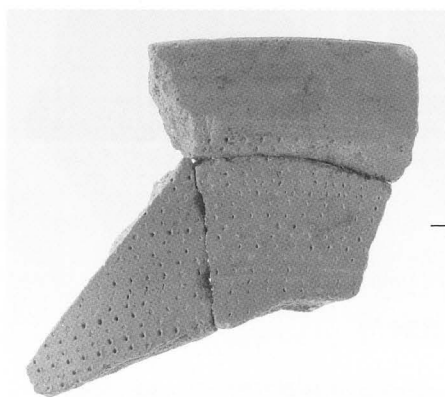
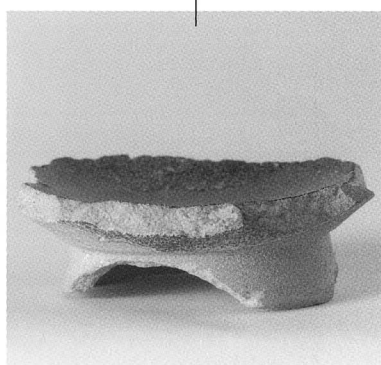
清水 1



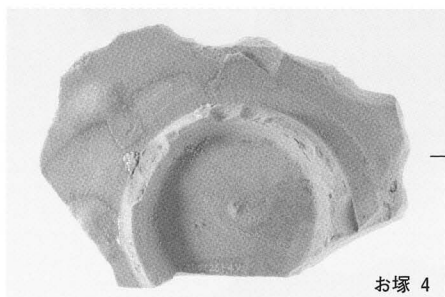
清水 5



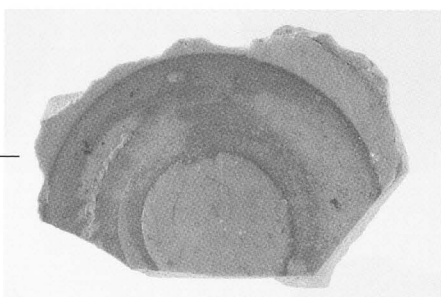
清水 8



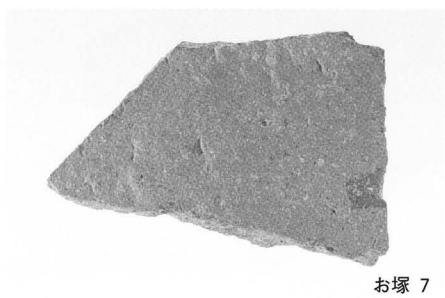
お塚 3



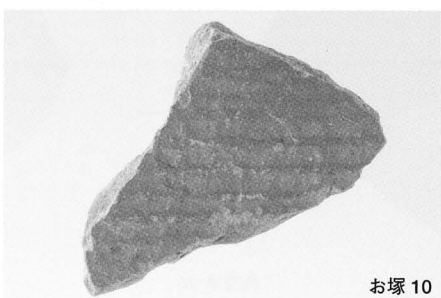
お塚 4



お塚 6



お塚 7



お塚 10

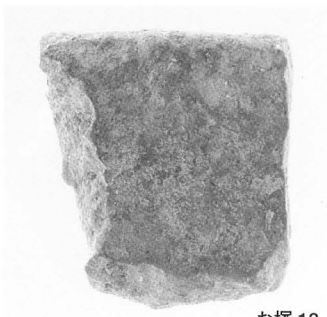


お塚 9

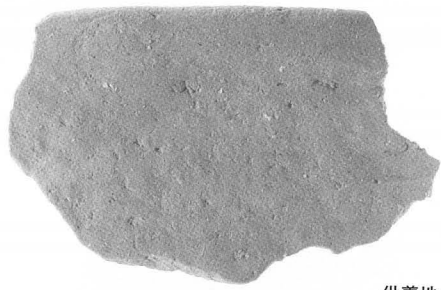
図版25



お塚 11



お塚 12



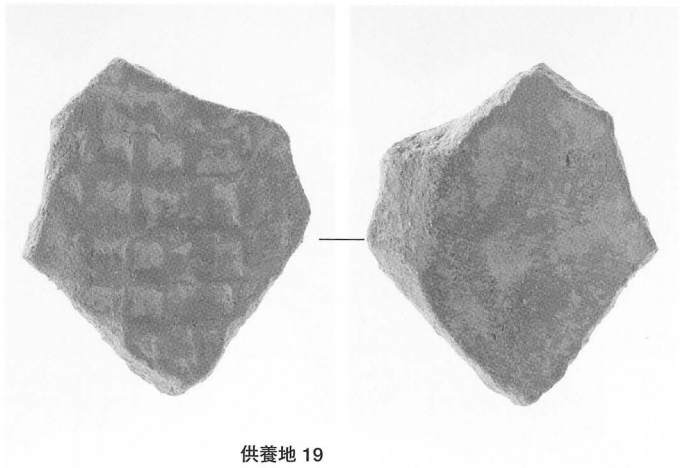
供養地 13



供養地 14



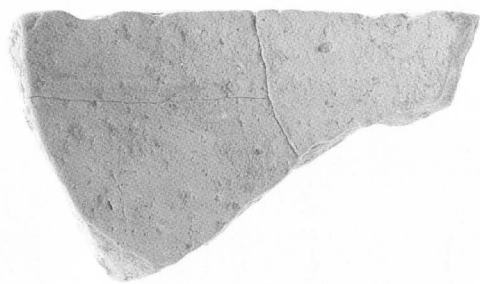
供養地 15



供養地 19

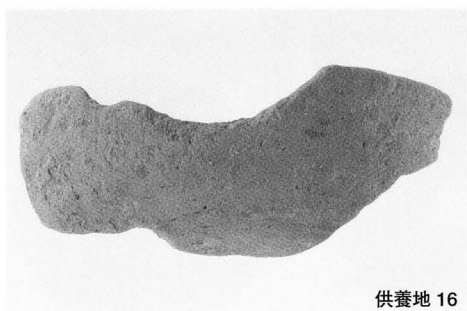


供養地 17



供養地 20





供養地 16



供養地 18



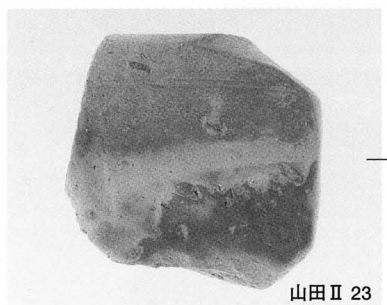
山田 II 21



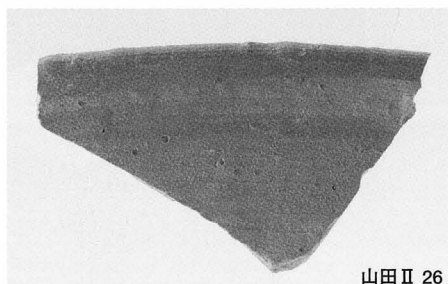
山田 II 24



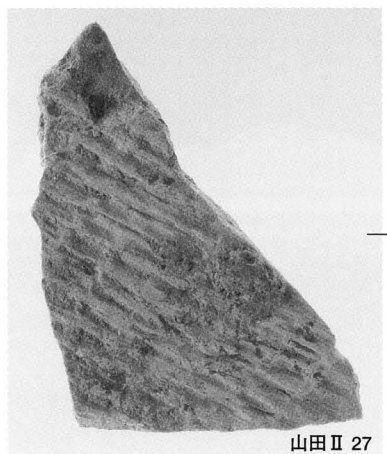
山田 II 25



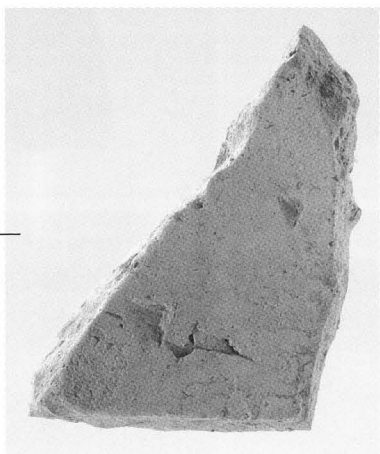
山田 II 23



山田 II 26



山田 II 27



山田 II 22

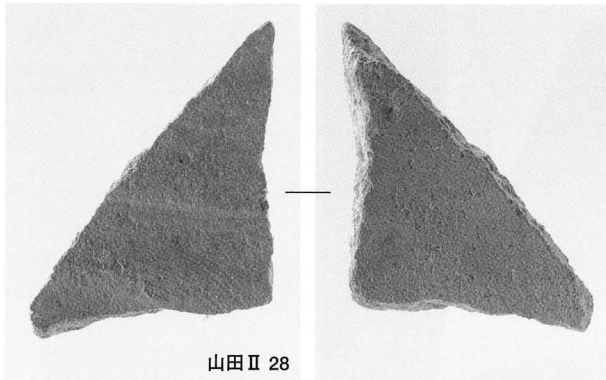


山田 II 33

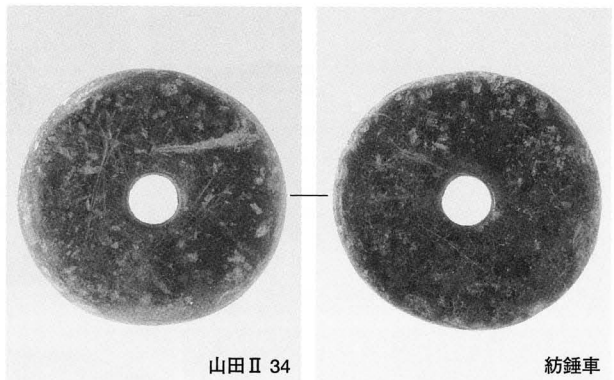


山田 II 29





山田II 28

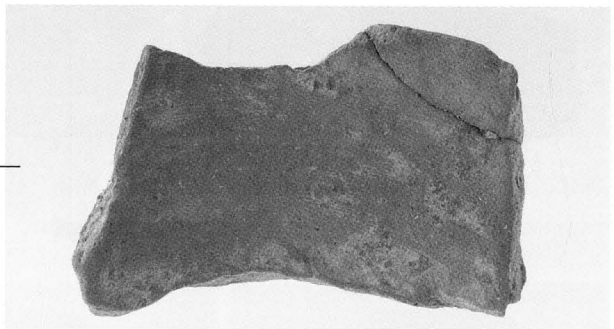


山田II 34

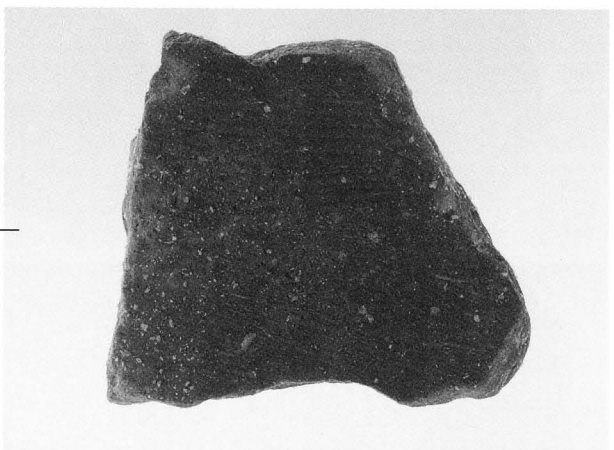
紡錘車



山田II 30



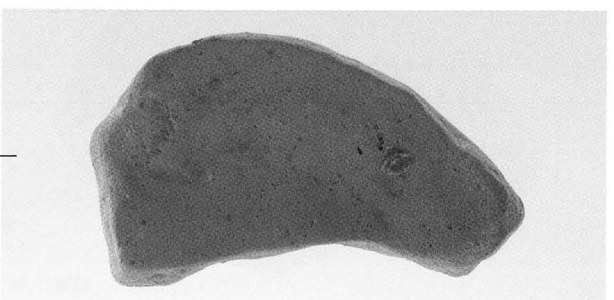
山田II 31

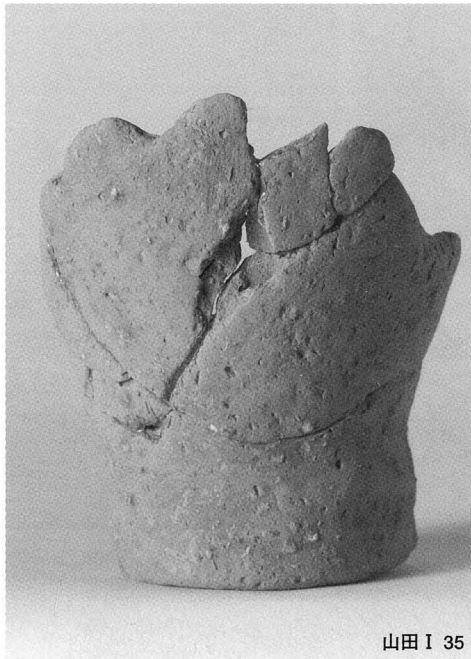


山田II 32

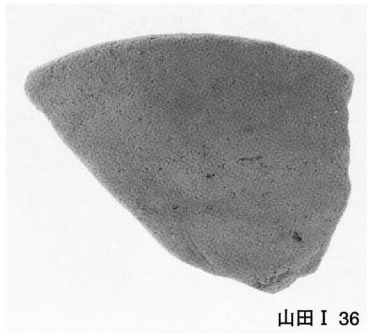


山田I 37

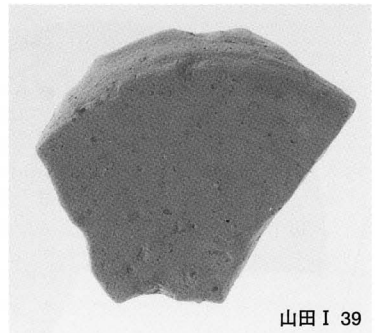




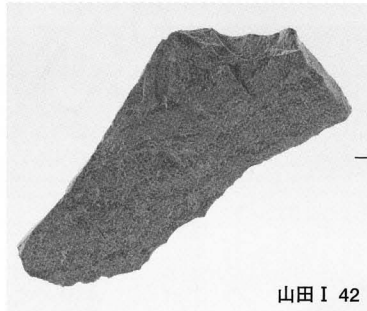
山田 I 35



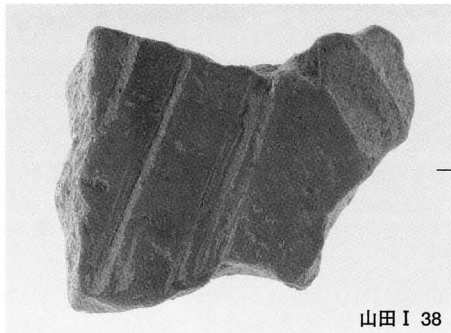
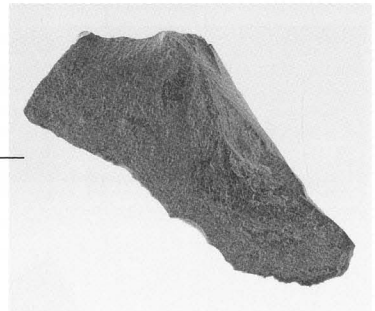
山田 I 36



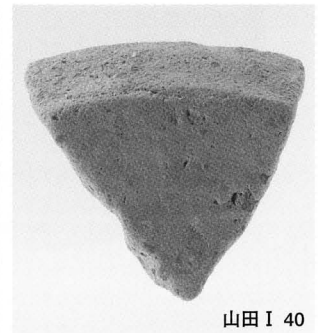
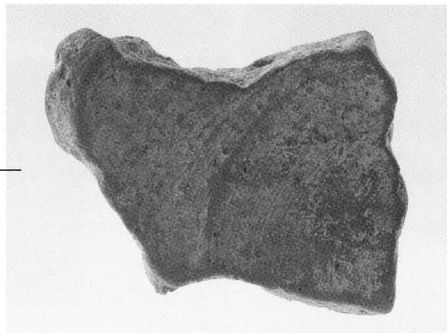
山田 I 39



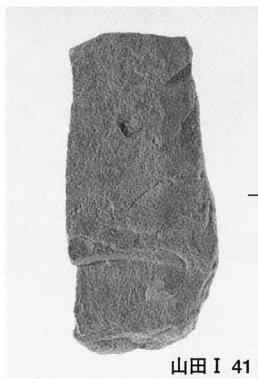
山田 I 42



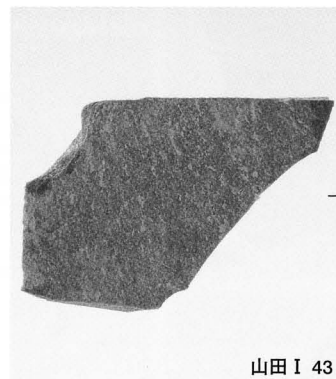
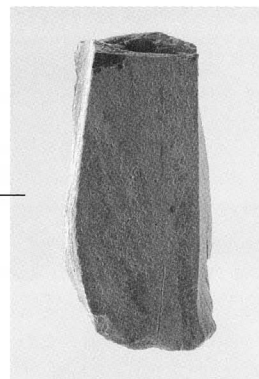
山田 I 38



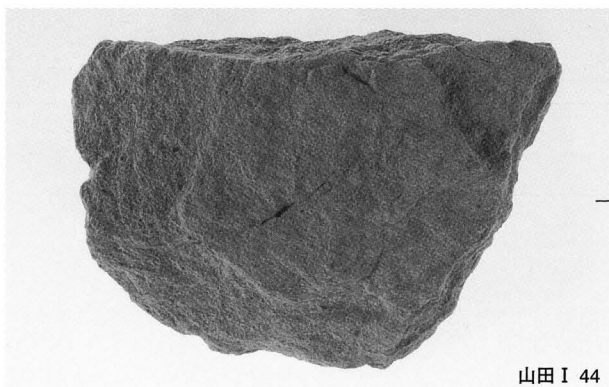
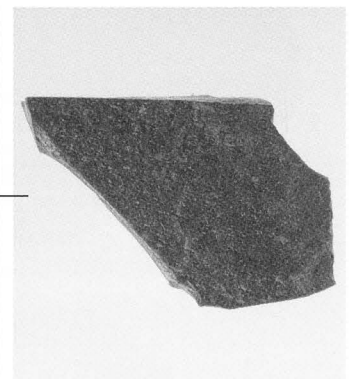
山田 I 40



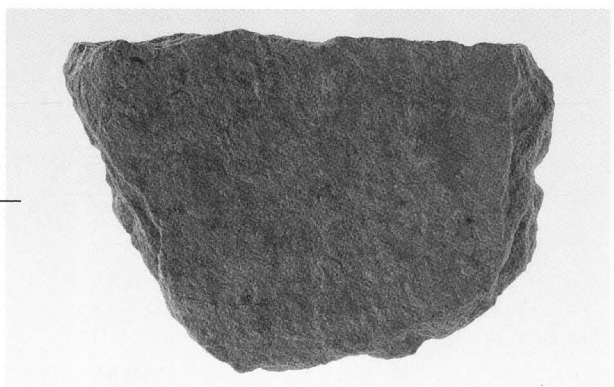
山田 I 41



山田 I 43

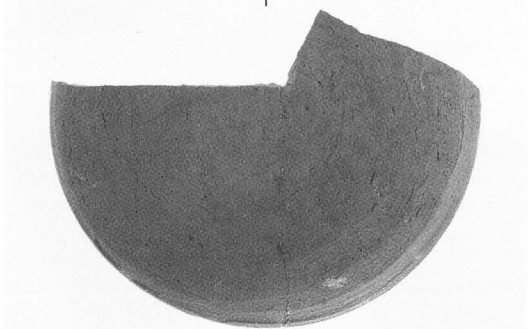
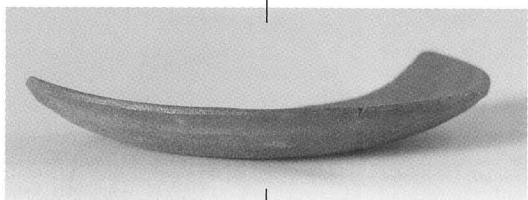


山田 I 44

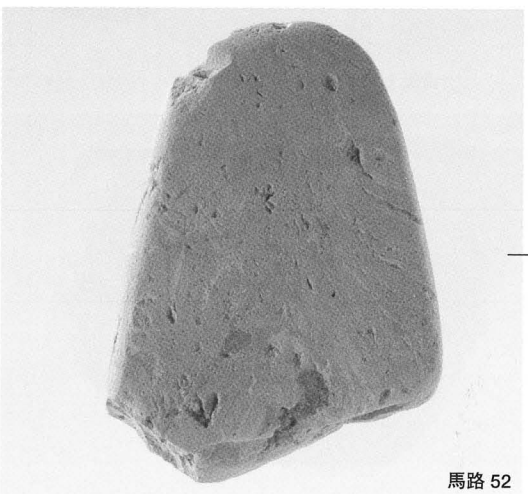




馬路 45



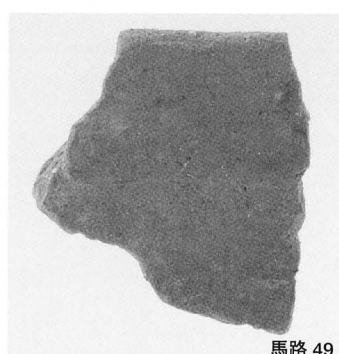
馬路 50



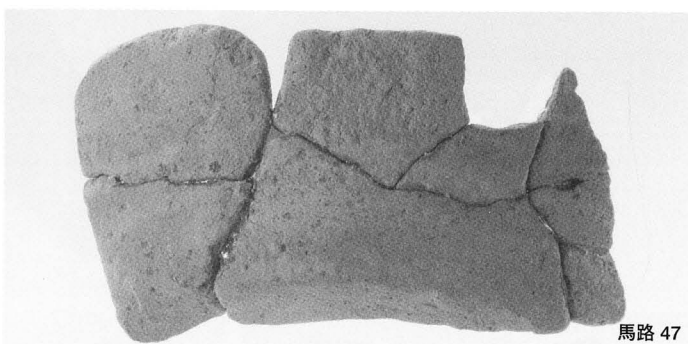
馬路 52



馬路 46



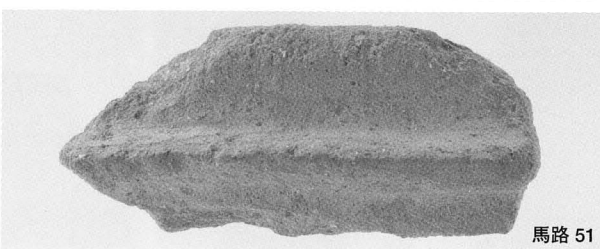
馬路 49



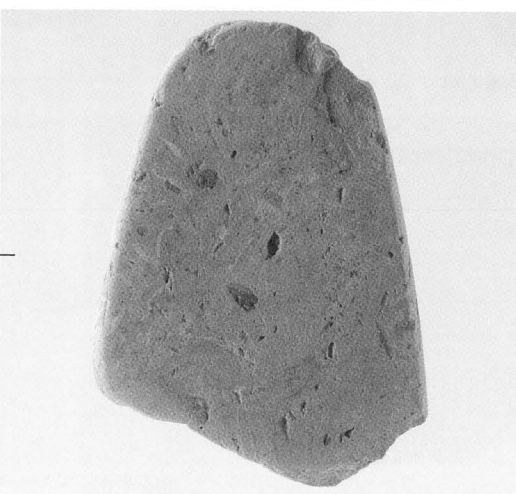
馬路 47



馬路 48

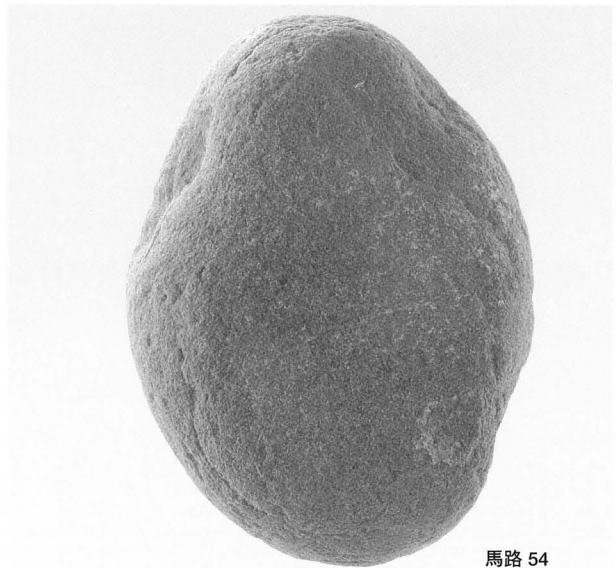


馬路 51

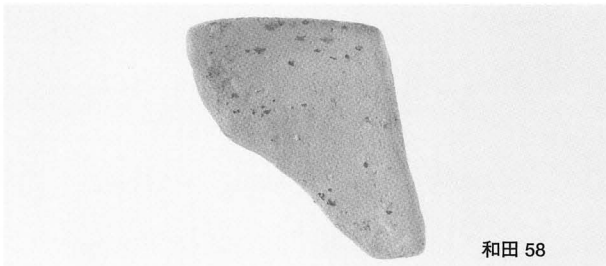




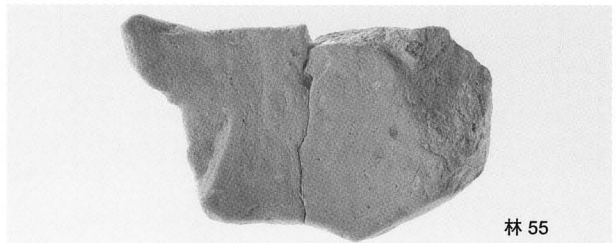
馬路 53



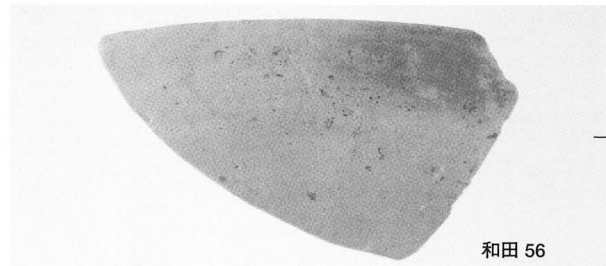
馬路 54



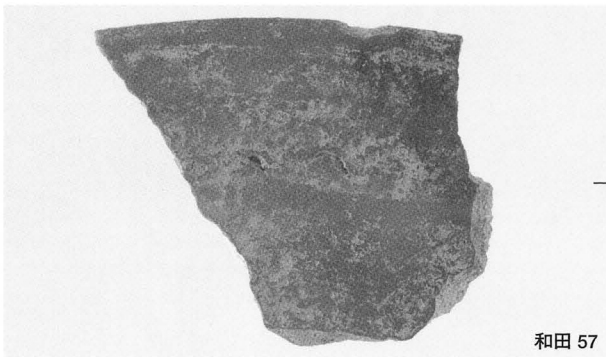
和田 58



林 55



和田 56



和田 57



和田 59





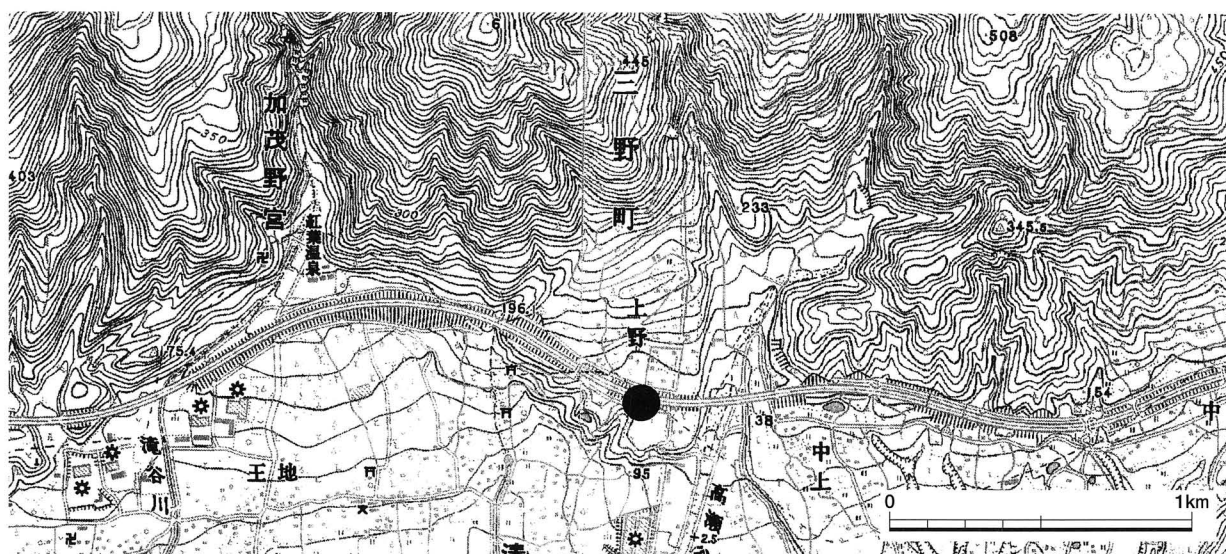
Ⅲ 清 水 遺 跡

1. 本章は、三好郡三野町に所在する清水遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査期間及び報告書作成期間は、第Ⅰ章の本文及び第2・3表にまとめてあるので、参照されたい。
3. 本章の遺物番号は、通し番号とし、本文・挿図・図版・表と一致する。
4. 本遺跡周辺の地理的、歴史的環境については、『四国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査報告28 大谷尻遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第53集の第Ⅱ章を参照されたい。

1 調査の経過

(1) 調査の経過

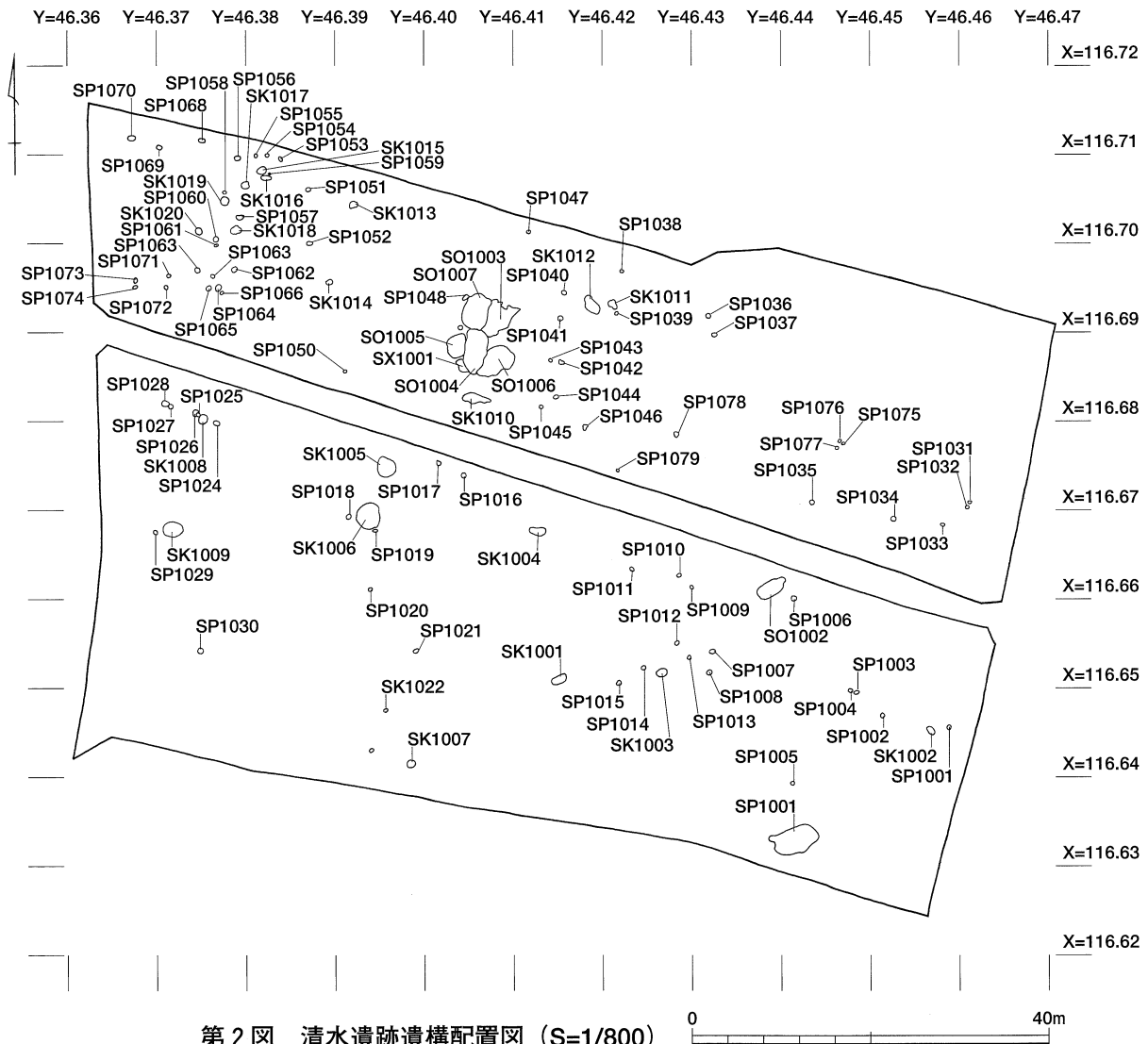
清水遺跡は、事前の分布調査時においてサヌカイト製石鏃、チップ、須恵器片、土師質土器等を採取しており、弥生時代から中世にかけての遺跡の可能性が指摘されていた。発掘調査にあたっては23,060m²を対象面積として試掘調査を行った。試掘調査は平成6年10月11日～11月11日にかけて重機によるトレンチ掘りで692m²につき行った。東側については、安定した包含層、遺構面と考えられる層があり、遺構・遺物ともに検出されたため、調査対象とした。西側については、流れ込みと思われる層から土器を検出したが、安定した層から遺構、遺物は検出されなかったため、試掘のみで終了し、本調査面積を10,000m²と確定した。本調査は平成8年4月3日に開始し、平成8年7月31日に終了した。



第1図 調査地点位置図 (S=1/2.5万)

(2) 発掘調査の方法

調査を始めるにあたりグリッドの配置は、発掘調査統一基準にならい、第IV系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。西南隅を基準とし、北にA、B、C・・・、東に1、2、3・・・の順に記号・番号を振り、その組み合わせで各グリッドを表すこととした。遺構記号・番号は検出時に決定し、掘削後遺構の確実性が乏しいと判断されたものについては欠番とした。



第2図 清水遺跡遺構配置図 (S=1/800)

(3) 調査日誌抄

| | | |
|-------------------------|-------|-----------------------------|
| 1996 (平成8) 年 | 7月9日 | 第3工区仕上げ、第2工区・第3工区 |
| 4月3日 発掘調査準備 | | トレンチ掘り、トレンチ土層断面図、 |
| 4月5日 調査準備、発掘届け作成 | | スカイマスターより第3工区遺構完掘全 |
| 4月15日 推進局西部事務所挨拶、清水遺跡現地 | | 景写真撮影 |
| 確認、プレハブ確認、工程確認 | 7月17日 | SO1003~SO1007掘削 |
| 4月25日 引っ越し、起工測量立会 | 7月19日 | 調査資料整理 |
| 5月1日 第3区機械掘削 1/4 | 7月22日 | 1/20平面図、SO1003~1007、SX1001・ |
| 5月7日 第3区機械掘削、窯跡 (SO) 検出 | | SO1003・EP1001土層断面図、写真 |
| 5月22日 第2工区機械掘削 | 7月31日 | 埋め戻し、整理作業 |
| 6月5日 第2工区人力掘削 (包含層) | 8月1日 | 報告書作成、遺構配置図、基本柱状図、 |
| 6月19日 第2工区人力掘削 (包含層) | | コンテナ台帳 |
| 第3工区半掘・完掘、断面等図面 | 8月2日 | 基本土層柱状図土色等、SO1001平面図 |
| 6月27日 第2工区人力掘削 (包含層) | | トレース、遺構配置図トレース |
| 7月1日 第2工区人力掘削 (包含層) | 8月15日 | 実績報告書作成、基本土層柱状図 |
| | 8月16日 | 写真整理 |

2 調査成果

(1) 基本層序

調査区においては、平坦な東側では、表土直下に地山の例もあるが、表土、にぶい黄褐色の包含層、遺構面を形成する自然堆積層、自然堆積層（地山の押し出し）、地山の層序がみられる。包含層は地表面から約10～20cmの浅いところがあり、場所によっては表土直下遺構面となるところもある。炭窯の他、土坑・ピットなどの遺構を検出した。

(2) 遺構と遺物

今回の調査の結果、出土した遺物は弥生時代～近世にわたるが、主な遺構は平安～鎌倉時代を中心とし、炭窯7基、土坑3基、柱穴3基を確認している。これらの遺構以外は出土遺物もなく時期不明である。

1号土坑（SK1001）（第3図）

3区中央部南側で検出された。規模は長軸1.30m、短軸0.80m、深さ0.10mを測る。平面形は長楕円形を呈す。1層である。遺構内からは須恵器の高台付杯がほぼ完形で出土した。

出土遺物（第4図）

1は須恵器高台付杯である。高台は貼り付け高台である。出土した須恵器の年代から10世紀後半頃の年代が与えられよう。

6号土坑（SK1006）（第5図）

3区中央部北側で検出された。規模は長軸3.24m、短軸2.94m、深さ0.26mを測る。平面形は不整な円形を呈す。1層である。覆土中より甕が出土した。

出土遺物（第6図）

2は弥生時代中期後半～後期前半の甕である。外面体部はハケ、底面は板ナデを施す。

12号土坑（SK1012）（第7図）

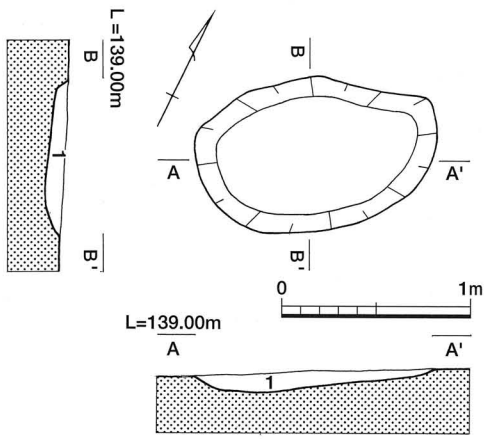
2区中央部北側で検出された。規模は長軸2.36m、短軸1.20m、深さ0.34mを測る。平面形は長楕円形を呈す。1層である。覆土中より甕が出土した。

出土遺物（第8図）

3は弥生時代後期後半の甕である。底部内外面とも板ナデを施す。

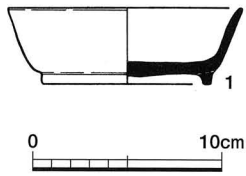
1号木炭焼成窯（SO1001）（第9図）

3区南東端部で検出された。規模は長軸5.00m、短軸2.96m、深さ0.40mを測る。長楕円形の平面プランを呈し、突出部は持たない。煙道部と思われる小ピットを有し断面形状は焚口部が浅く、煙道部に向けて緩やかに傾斜を見せる。主軸方向はN-40°-Eである。遺構内埋土は木炭が充填しており、部分的には、ころもと考えられる粘土がブロック状に混入していた。窯底部は焼土が拡がり固く焼け締まっていた。明確に年代を示す遺物が出土していないため詳細な構築時期は不明であるが、形態的特徴や周囲

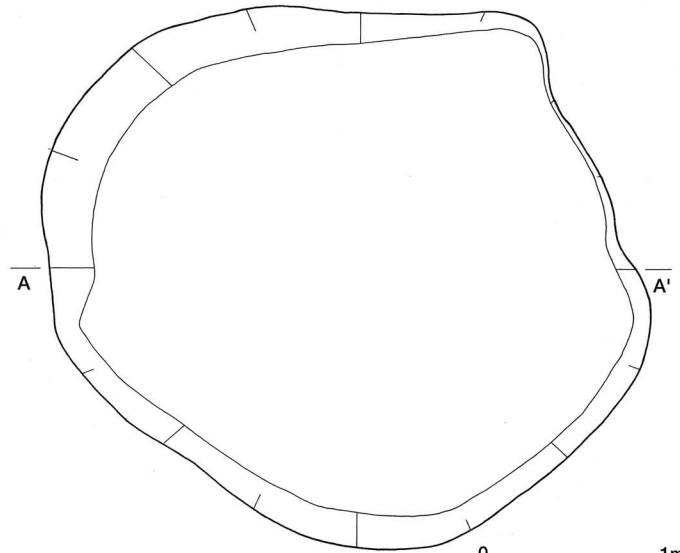


1. 褐色 10YR4/6 砂質土 (炭化物少量含む)

第3図 SK1001平・断面図 (S=1/40)

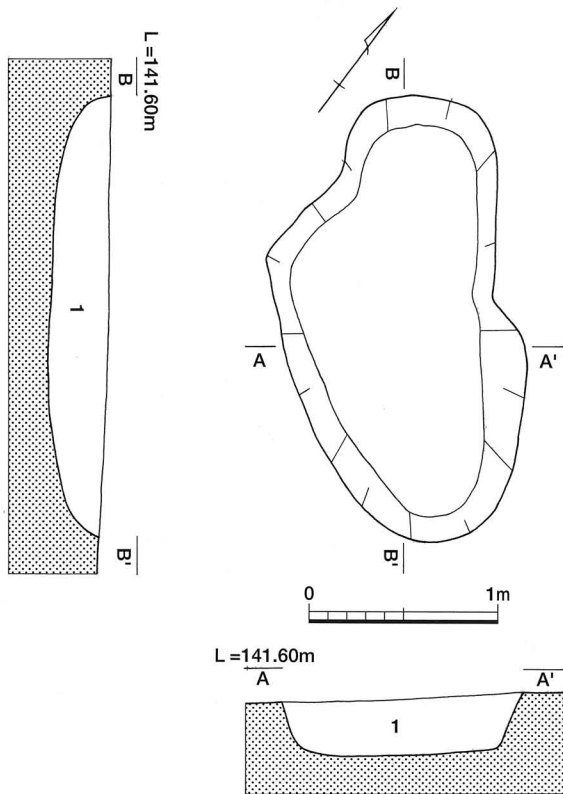


第4図 SK1001出土土器



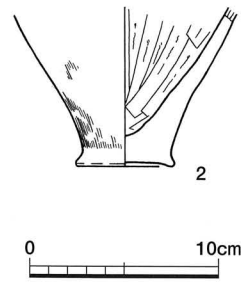
1. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (3cmまでの礫含む)

第5図 SK1006平・断面図 (S=1/40)

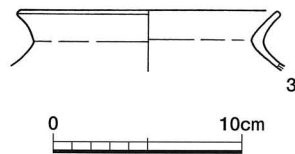


1. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (炭化物含む)

第7図 SK1012平・断面図 (S=1/40)



第6図 SK1006出土土器



第8図 SK1012出土土器

の遺構の状況から平安～鎌倉時代と考えられる。

2号木炭焼成窯 (SO1002) (第10図)

3区北東端部で検出された。小型で規模は長軸3.54m、短軸1.70m、深さ0.26mを測る。長楕円形の平面プランを呈し、突出部は持たない。煙道部と思われる小ピットを有し断面形状は焚口部が浅く、ほぼ平坦な窯底を示す。主軸方向はN-40°-Eである。遺構内埋土は木炭が充填しており、窯底部は焼土が拡がり固く焼け締まっていた。出土遺物はない。

6号木炭焼成窯 (SO1006) (第12図)

2区中央部で検出された。規模は長軸4.64m、短軸2.70m、深さ0.26mを測る。長楕円形の平面プランを呈し、突出部は持たない。ほぼ平坦な窯底を呈す。1層である。覆土中より弥生時代の壺が出土した。遺構に伴うものではなく、混入と考えられる。

出土遺物 (第13図)

10は弥生時代中期後半～後期の壺である。底部外面はハケ、内面は板ナデを施す。

柱穴52 (SP1052) (第14図)

2区西部で検出された。規模は長軸0.64m、短軸0.42m、深さ0.20mを測る。平面形は長楕円形を呈す。1層である。覆土中より甕が出土した。

出土遺物 (第15図)

4は弥生時代中期後半～後期の甕である。体底部外内面とも板ナデを施す。

柱穴60 (SP1060) (第16図)

2区西部で検出された。規模は長軸1.16m、短軸0.7m、深さ0.28mを測る。1層である。覆土中より壺などが出土した。

出土遺物 (第17図)

5～8は弥生時代中期後半～後期の壺と甕の底部もしくは体部である。

柱穴69 (SP1069) (第18図)

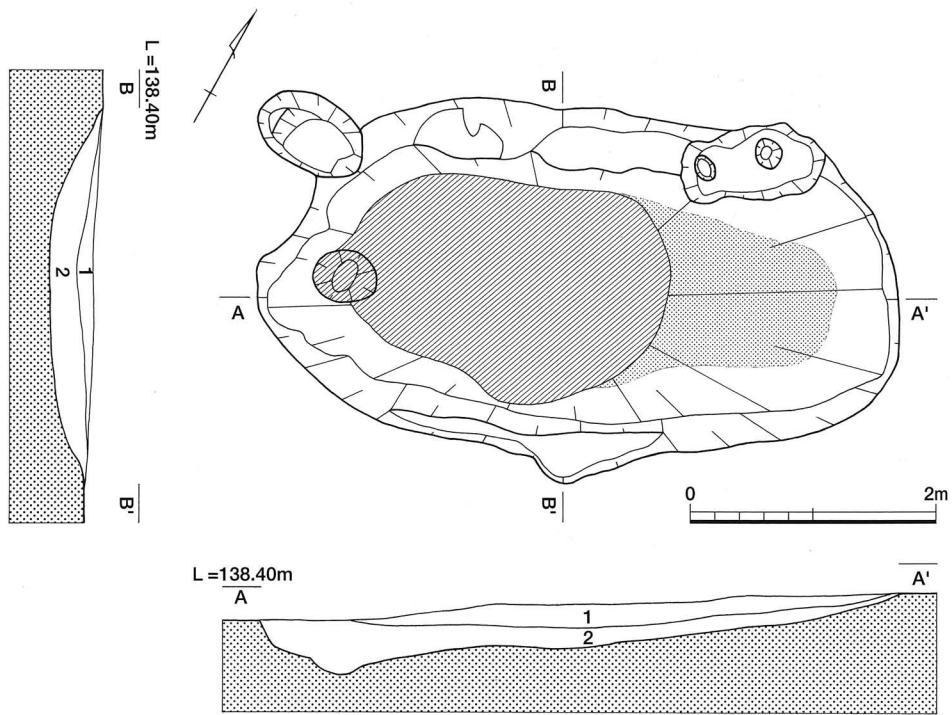
2区西北端部で検出された。規模は長軸0.58m、短軸0.56m、深さ0.30mを測る。平面形は不整な円形を呈する。覆土中より甕が出土した。

出土遺物 (第19図)

9は体部内面に特徴的なユビオサエを施す甕である。この内面の調整技法を重視すれば、弥生時代後期後半に属する。

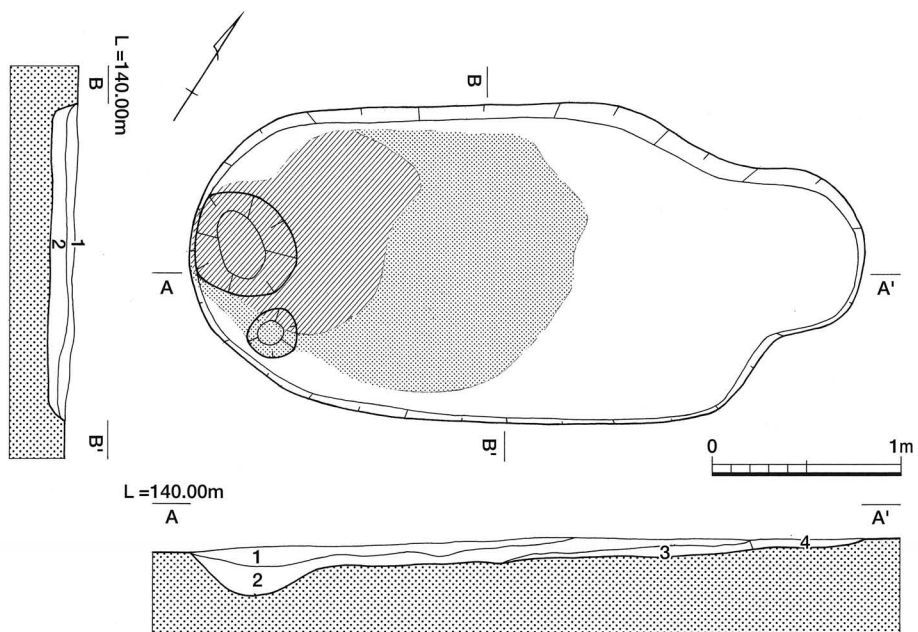
包含層出土遺物 (第20・21図)

11～21は弥生時代中期後半～後期の壺、甕、鉢、高杯である。いずれも遺存状態は悪く、調整技法は分かり難い。22は9～10世紀の須恵器の蓋である。23は、おそらく近世と思われる陶器の碗である。外面体部と内面に釉を施し、高台は削り出し高台である。24は弥生時代の結晶片岩製石庖丁である。



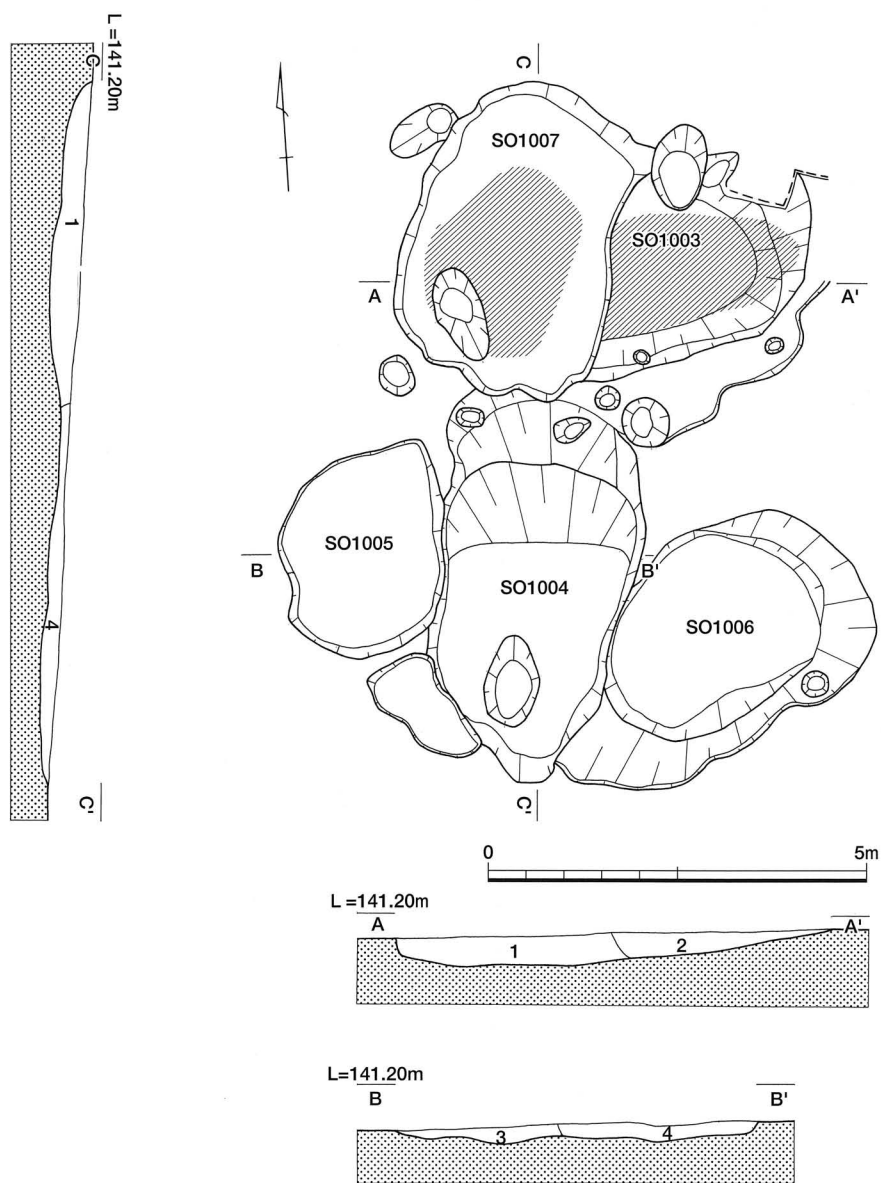
1. 黒褐色 10YR3/2 砂質土 (炭化物含む、10cmまでの礫多量に含む)
2. 黒色 10YR1.7/1 砂質土 (木炭層、粘土ブロック含む、下層に焼土少量含む)

第9図 SO1001平・断面図 (S=1/60)



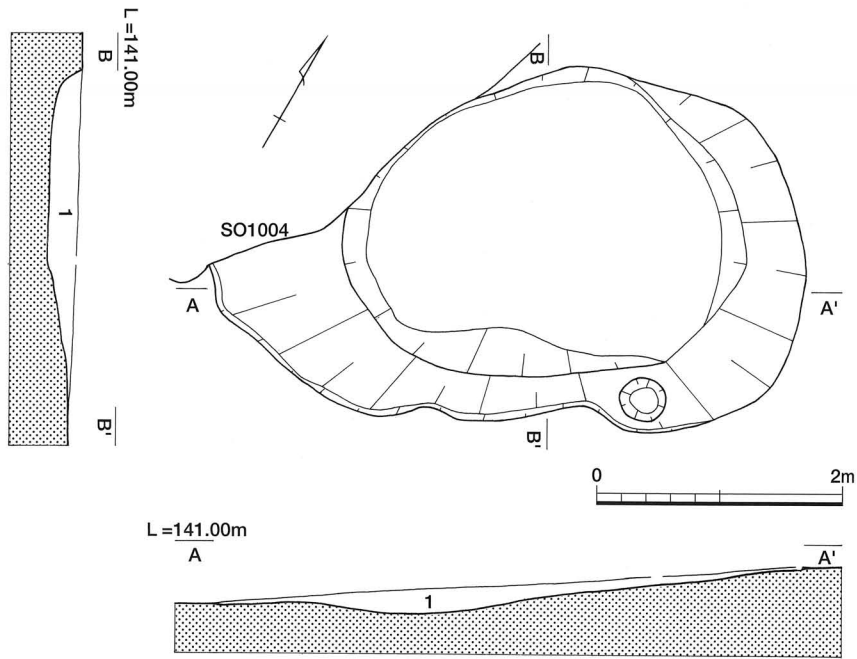
1. 暗褐色 10YR3/4 砂質土 (炭化物、焼土含む)
2. 黒色 10YR2/1 砂質土 (木炭層、粘土ブロック混入、焼土多く含む)
3. 黄褐色 10YR5/6 砂質土 (地山)
4. 黄褐色 10YR5/6 砂質土 (炭化物若干含む)

第10図 SO1002平・断面図 (S=1/40)



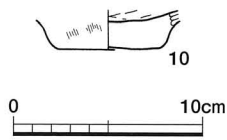
1. 黒色 10YR1.7/1 木炭層 (上層部に黒褐色10YR4/3の粘土がブロック状に混入)
2. 黒色 10YR1.7/1 木炭層 (上層部に暗褐色10YR3/3がブロック状に混入
窯底部に明赤褐色5YR5/6の焼土広がる)
3. 黒褐色 10YR3/2 砂質土 (木炭多く含む 上層部ににぶい黄褐色10YR4/3が
ブロック状に混入 下層部に5cm前後の礫多く含む)
4. 黒褐色 10YR3/2 砂質土 (木炭多く含む 上層部ににぶい黄褐色10YR4/3が
ブロック状に混入 底部に4cm前後の礫少量含む)

第11図 SO1003・1004・1005・1006・1007平・断面図 (S=1/100)



1. 黒褐色 10YR 砂質土 (木炭多く含む 上層部ににぶい黄褐色10YR4/3がブロック状に混入)

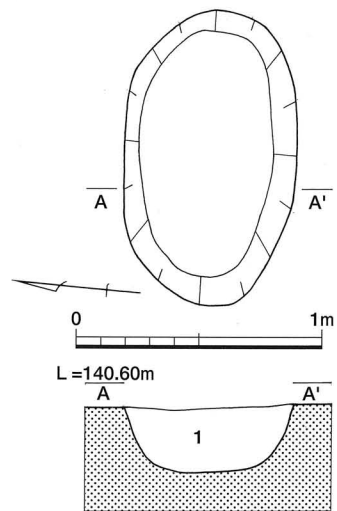
第12図 SO1006平・断面図 (S=1/60)



第13図 SO1006出土土器

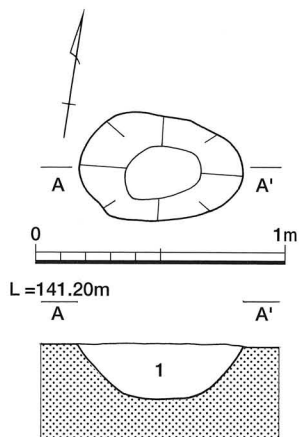


第15図 SP1052出土土器



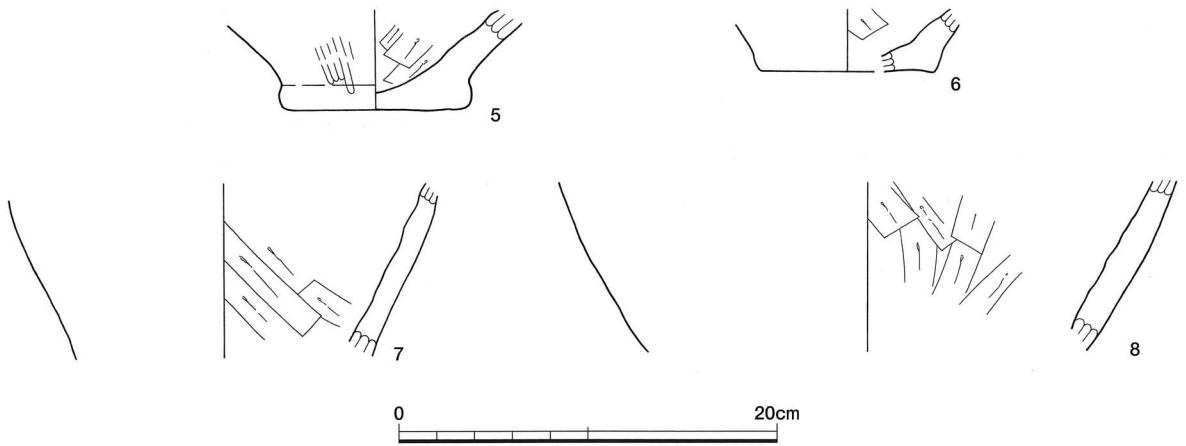
1. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (炭化物少量含む)

第16図 SP1060平・断面図 (S=1/30)

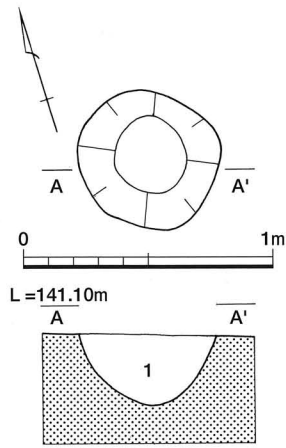


1. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土

第14図 SP1052平・断面図 (S=1/30)

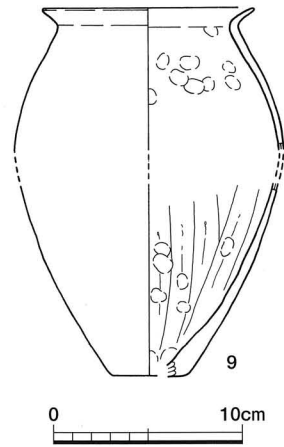


第17図 SP1060出土土器

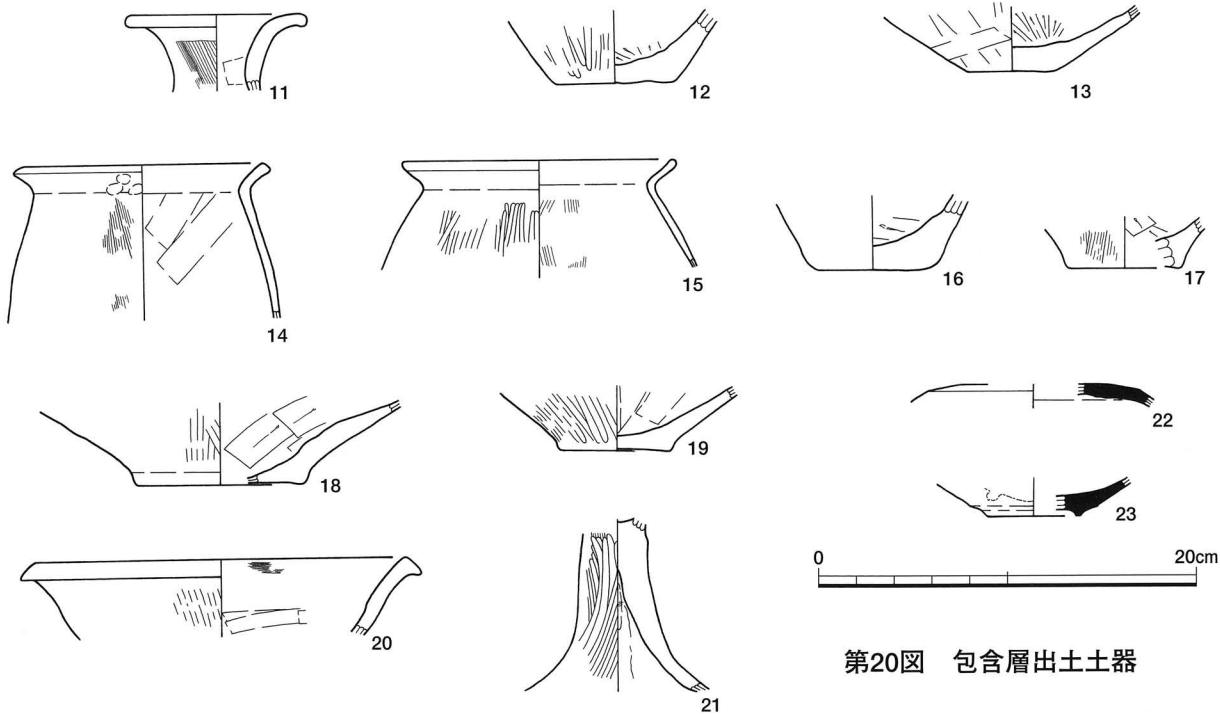


1. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土 (炭化物少量含む)

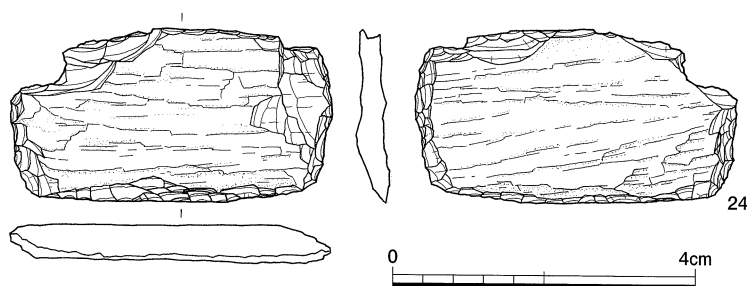
第18図 SP1069平・断面図 (S=1/30)



第19図 SP1069出土土器



第20図 包含層出土土器



第21図 包含層出土石器

3 まとめ

調査の結果、弥生時代～近世にかけての遺構、遺物が出土した。中心となる時期は、平安～鎌倉時代に位置付けられよう。出土した遺構は炭窯のほか、土坑・ピットなどである。当初、中世の遺跡の存在が予想され、今回の調査では、それが裏付けられた。また調査地点は、弘仁5年(814年)に馬場秋胤が拠城とした清水城伝承の地域である。『三野町誌』、『阿波国郡村誌』、『阿波古城記』、『阿波誌』、『三好郡誌』等はその記載が見られるため、中世山城の存在が予想されたが、今回の調査では、山城跡を特定する遺構、遺物を確認することはできなかった。本遺跡からは、炭窯7基・土坑20基・ピット78基・性格不明遺構1基が出土した。検出したピット群には規則的な配列は見られず、主体となる遺構は炭窯である。炭窯は徳島県では吉野川左岸中流域に集中する傾向がある。出土した炭窯は形態的には伏せ窯であり、民族事例にみられる小規模で安易な黒炭製造窯で、いわゆる「伏焼窯」に類似する。炭窯は合計7基が検出されており、単独に構築された2基を除いては近接して構築され、集中した様相を示している。平面形態はいずれも長楕円形を呈する。木炭窯については、その用途として製鉄関連遺構との見解がある。阿波においても荘園の有力層による自給的生産の存在が指摘されている。当該地域は三野町花園に三好郡司庁が所在していたと推定されており、近世の中世荘園には石清水八幡宮領三野田保(三好町足代)があった地域であることから、当該地域においても各種の職能集団が存在していたと予想される。徳島県およびその周辺地域の事例は「集中型」ととらえた遺跡であっても2・3基を一単位とする生産形態であり、専門的な在り方を示してはおらず、季節的な操業が予想され、こうした在り方は当時の生産形態及びそれらに関わる職能集団の動態を解明する上で興味深い。

また、遺物では、弥生時代中期後半～後期の土器が出土しており、近辺に集落跡が存在していた可能性が指摘できよう。

第 1 表 清水遺跡遺構一覽表

| 遺構名 | 長軸 (cm) | 短軸 (cm) | 深度 (cm) |
|--------|------------|------------|------------|
| SK1001 | 130 | 80 | 10 |
| SK1002 | 100 | 60 | 14 |
| SK1003 | 116 | 76 | 12 |
| SK1004 | 190 | 90 | 15 |
| SK1005 | 46 | 42 | 22 |
| SK1006 | 324 | 294 | 26 |
| SK1007 | 100 | 80 | 26 |
| SK1008 | 132 | 106 | 17 |
| SK1009 | 220 | 160 | 22 |
| SK1010 | 324 | 116 | 37 |
| SK1011 | 128 | 62 | 13 |
| SK1012 | 236 | 12 | 34 |
| SK1013 | 84 | 70 | 14 |
| SK1014 | 86 | 66 | 20 |
| SK1015 | 108 | 96 | 29 |
| SK1016 | 87 | 60 | 28 |
| SK1017 | 90 | 75 | 10 |
| SK1018 | 140 | 80 | 28 |
| SK1019 | 104 | 89 | 19 |
| SK1020 | 87 | 75 | 26 |
| S01001 | 500 | 296 | 40 |
| S01002 | 354 | 170 | 26 |
| S01003 | 428 | 252 | 43 |
| S01004 | 424 | 222 | 38 |
| S01005 | 300 | 210 | 30 |
| S01006 | 464 | 270 | 26 |
| S01007 | 426 | 268 | 56 |
| SP1001 | 48 | 38 | 25 |
| SP1002 | 44 | 40 | 14 |
| SP1003 | 50 | 26 | 12 |
| SP1004 | 40 | 28 | 18 |
| SP1005 | 32 | 28 | 32 |
| SP1006 | 44 | 43 | 17 |
| SP1007 | 60 | 32 | 14 |
| SP1008 | 50 | 44 | 14 |
| SP1009 | 38 | 30 | 20 |

| 遺構名 | 長軸 (cm) | 短軸 (cm) | 深度 (cm) |
|--------|------------|------------|------------|
| SP1010 | 44 | 32 | 12 |
| SP1011 | 54 | 40 | 8 |
| SP1012 | 52 | 42 | 13 |
| SP1013 | 46 | 30 | 18 |
| SP1014 | 54 | 40 | 11 |
| SP1015 | 60 | 48 | 22 |
| SP1016 | 74 | 56 | 24 |
| SP1017 | 56 | 48 | 19 |
| SP1018 | 55 | 40 | 32 |
| SP1019 | 35 | 30 | 12 |
| SP1020 | 44 | 30 | 16 |
| SP1021 | 50 | 36 | 23 |
| SP1022 | 32 | 30 | 11 |
| SP1023 | 42 | 35 | 11 |
| SP1024 | 50 | 50 | - |
| SP1025 | 54 | 48 | 28 |
| SP1026 | 80 | 30 | 23 |
| SP1027 | 58 | 54 | 10 |
| SP1028 | 96 | 82 | 17 |
| SP1029 | 50 | 45 | 25 |
| SP1030 | 56 | 52 | 26 |
| SP1031 | 30 | 22 | 18 |
| SP1032 | 52 | 46 | 18 |
| SP1033 | 44 | 22 | 22 |
| SP1034 | 62 | 54 | 41 |
| SP1035 | 60 | 52 | 26 |
| SP1036 | 66 | 38 | 22 |
| SP1037 | 56 | 46 | 25 |
| SP1038 | 40 | 30 | 27 |
| SP1039 | 56 | 44 | 16 |
| SP1040 | 35 | 45 | 16 |
| SP1041 | 55 | 40 | 18 |
| SP1042 | 70 | 44 | 28 |
| SP1043 | 44 | 34 | 35 |
| SP1044 | 58 | 54 | 40 |
| SP1045 | 46 | 44 | 38 |

| 遺構名 | 長軸 (cm) | 短軸 (cm) | 深度 (cm) |
|--------|------------|------------|------------|
| SP1046 | 70 | 28 | 40 |
| SP1047 | 68 | 54 | 30 |
| SP1048 | 98 | 48 | 45 |
| SP1049 | 55 | 50 | 24 |
| SP1050 | 40 | 34 | 28 |
| SP1051 | 49 | 42 | 16 |
| SP1052 | 64 | 42 | 20 |
| SP1053 | 54 | 52 | 14 |
| SP1054 | 30 | 20 | 8 |
| SP1055 | 32 | 26 | 12 |
| SP1056 | 74 | 46 | 8 |
| SP1057 | 70 | 41 | 18 |
| SP1058 | 37 | 34 | 26 |
| SP1059 | 15 | 15 | 10 |
| SP1060 | 116 | 70 | 28 |
| SP1061 | 40 | 35 | 29 |
| SP1062 | 68 | 52 | 26 |
| SP1063 | 28 | 17 | 22 |
| SP1064 | 91 | 54 | 18 |
| SP1065 | 64 | 48 | 28 |
| SP1066 | 35 | 30 | 14 |
| SP1067 | 72 | 42 | 26 |
| SP1068 | 72 | 45 | 8 |
| SP1069 | 58 | 56 | 30 |
| SP1070 | 82 | 64 | 14 |
| SP1071 | 41 | 30 | 20 |
| SP1072 | 43 | 32 | 12 |
| SP1073 | 50 | 31 | 24 |
| SP1074 | 49 | 37 | 14 |
| SP1075 | 20 | 16 | 10 |
| SP1076 | 28 | 26 | 15 |
| SP1077 | 24 | 22 | 11 |
| SP1078 | 32 | 20 | 14 |
| SP1079 | 22 | 20 | 23 |
| SX1001 | 172 | 64 | 14 |

第2表 清水遺跡発掘調査 出土遺物観察表 土器

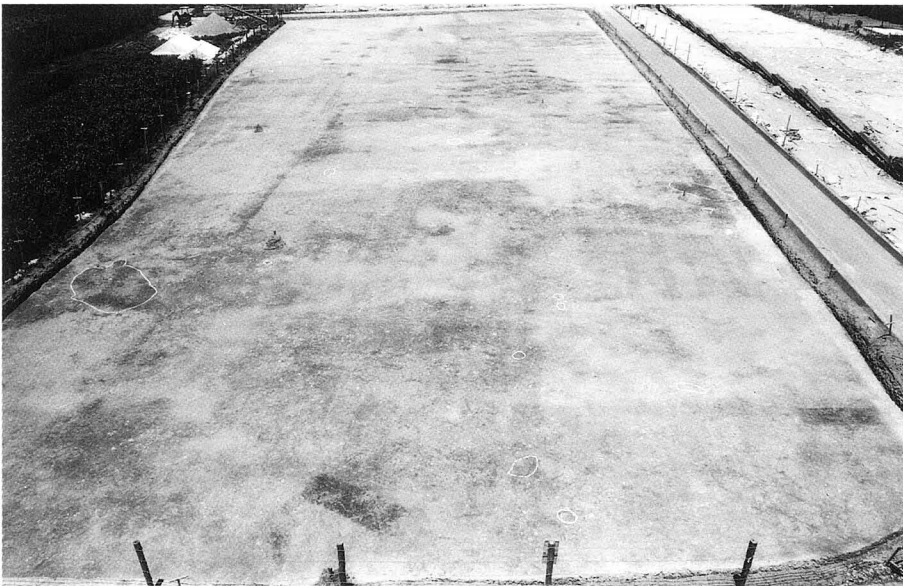
| 番号 | 遺構名 出土地点 | 器種 | 残存 率 | 口径 (cm) | 体部最 大径 (cm) | 底径 (cm) | 頸部 径 (cm) | 器高 (cm) | その他の 法量 (cm) | 技法・文様 | 色調 | 胎土 | 搬入 品 |
|----|-------------|-----------------|---------|------------|-------------------|------------|-----------------|------------|-----------------|--|------------------|-------------------|---------|
| 1 | SK1001 | 須恵器 高台付 杯 | 9/10 | 12.2 | - | 8.8 | - | 4.05 | 高台高 0.55 | 外)口縁体部:ヨコナデ、底面:回転ヘラケズリ 内)口縁体底部:ヨコナデ 高台:貼付高台 | 外)灰 内)灰 | 石、長、 雲 | |
| 2 | SK1006 | 土師器 甕 | 2/3 | - | - | 5.0 | - | (8.4) | - | 外)体部:ハケ(8条/cm)、底部:ナデ、底面: 板ナデ(幅1.6cm) 内)体底部:ケズリ | 外)明褐 内)暗灰黄 | 石、長、 雲、赤 | |
| 3 | SK1012 | 土師器 甕 | 1/8 | 13.6 | - | - | 13.0 | (3.15) | - | 外)口縁部:ナデ、体部:剥離の為調整不明 内)口縁部:ナデ、体部:剥離の為調整不明 | 外)明赤褐 内)明赤褐 | 石、長、 雲、赤 | |
| 4 | SP1052 | 土師器 甕 | 1/2 | - | - | 8.1 | - | (3.2) | - | 外)体部:ナデ、底面:板ナデ(幅1.8cm) 内)体底部:板ナデ(幅2.2cm) | 外)橙 内)赤橙 | 石、長、 雲、片、 赤 | |
| 5 | SP1060 | 土師器 甕(壺?) | 1/2 | - | - | 9.2 | - | (5.2) | - | 外)体部:ミガキ、底部底面:ナデ 内)体底部:ケズリ | 外)浅黄橙 内)黄 | 石、長、 雲、赤 | |
| 6 | SP1060 | 土師器 甕(壺?) | 1/5 | - | - | 9.0 | - | (3.4) | - | 外)体底部:ナデ 内)体部:ケズリ | 外)橙 内)黄橙 | 石、長、 雲、片、 赤 | |
| 7 | SP1060 | 土師器 壺(甕?) | 1/6 | - | - | - | - | (9.2) | - | 外)体部:磨減の為調整不明 内)体部:ケズリ | 外)橙 内)にぶい黄 | 石、長、 雲、片、 赤 | |
| 8 | SP1060 | 土師器 甕? | 1/4 | - | - | - | - | (9.0) | - | 外)体部:剥離が激しく調整不明 内)体部:ケズリ | 外)黄橙 内)黄 | 石、長、 雲、片、 赤 | |
| 9 | SP1069 | 土師器 甕 | 1/3 | 11.2 | - | 4.0 | 9.4 | (19.4) | - | 外)口縁体底部:剥離の為調整不明 内)口縁部:ナデ、体部:上位指オサエ下部指 オサエ・ケズリ、底部:指オサエ | 外)明褐 内)明褐 | 石、長、 雲、片、 赤 | |
| 10 | SO1006 | 土師器 壺 | 1/2 | - | - | 5.9 | - | (2.05) | - | 外)底部:ハケ(10条/cm)後ナデ、底面:ナデ 内)底部:板ナデ(幅1.6cm) | 外)橙 内)明黄褐 | 石、長、 雲、赤 | |
| 11 | P-19 包含層 | 土師器 壺 | 1/6 | 9.2 | - | - | 4.5 | (4.0) | - | 外)口縁部:ナデ、頸部:ハケ(8条/cm) 内)口縁部:ナデ、頸部:板ナデ(幅1.4cm) | 外)明褐 内)明黄褐 | 石、雲、 赤 | |
| 12 | J-24 包含層 | 土師器 壺(甕?) | 2/3 | - | - | 6.1 | - | (3.5) | - | 外)体部:ミガキ、底面:板ナデ(幅1.8cm) 内)体底部:ケズリ | 外)明黄褐 内)にぶい黄橙 | 石、長、 雲、片、 赤 | |
| 13 | K-35 包含層 | 土師器 壺(鉢?) | 1/4 | - | - | 4.6 | - | (3.4) | - | 外)体部:板ナデ(幅1.7cm)、底面:ナデ 内)体底部:ケズリ | 外)にぶい橙 内)黒褐 | 石、長、 雲、赤 | |
| 14 | J-23 包含層 | 土師器 甕 | 1/2 | 12.6 | - | - | 11.4 | (8.2) | - | 外)口縁部:ナデ、頸部:指オサエ後ナデ、体部: ハケ(10条/cm) 内)口縁部:ナデ、体部:板ナデ(幅1.2cm) | 外)明褐 内)黄褐 | 石、長、 雲、片、 赤 | |
| 15 | L-24 包含層 | 土師器 甕 | 1/2 | 13.8 | - | - | 12.2 | (5.7) | - | 外)口縁部:ナデ、体部:ミガキ 内)口縁部:ナデ、体部:ハケ(10条/cm) 一部合成 | 外)明黄褐 内)明黄褐 | 石、長、 雲、赤 | |
| 16 | F-29 包含層 | 土師器 甕(壺?) | 2/3 | - | - | 5.8 | - | (3.8) | - | 外)体部:ナデ、底面:板ナデ(幅1.8cm) 内)体底部:ケズリ | 外)橙 内)橙 | 石、長、 雲、片、 赤 | |
| 17 | F-33 包含層 | 土師器 甕 | 1/6 | - | - | 5.8 | - | (2.65) | - | 外)底部:ハケ(7条/cm) 内)底部:ケズリ | 外)暗褐 内)橙 | 石、長、 雲 | |
| 18 | L-25 包含層 | 土師器 鉢 | 2/3 | - | - | 8.6 | - | (4.4) | - | 外)体部:ミガキ、底部:ナデ、底面:板ナデ(幅 1.8cm) 内)体底部:ケズリ | 外)赤褐 内)橙 | 石、長、 雲 | |
| 19 | L-25 包含層 | 土師器 鉢 | 1 | - | - | 5.8 | - | (3.4) | - | 外)体部:ミガキ、底面:板ナデ(幅1.6cm) 内)体底部:板ナデ(幅1.6cm) | 外)橙 内)明赤褐 | 石、長、 雲、片 | |
| 20 | K-35 包含層 | 土師器 高杯 | 1/9 | 19.6 | - | - | - | (4.1) | - | 外)口縁部:ナデ、体部:ミガキ 内)口縁部:ハケ(12条/cm)、体部:ナデ・板 ナデ(幅0.7cm) | 外)橙 内)にぶい橙 | 石、長、 雲、赤 | |
| 21 | J-25 包含層 | 土師器 高杯 | 2/3 | - | - | - | - | (9.0) | - | 外)脚部:ハケ後ミガキ 内)脚部:絞り痕 | 外)橙 内)橙 | 石、雲、 赤 | |
| 22 | M-22 包含層 | 須恵器 蓋 | 1/6 | - | - | - | - | (1.25) | - | 外)体部:上位回転ヘラケズリ下位ヨコナデ 内)体部:ヨコナデ | 外)灰 内)灰 | 石、長、 雲 | |
| 23 | M-22 包含層 | 陶器 碗 | 4/5 | - | - | 4.9 | - | (2.0) | 高台高 0.3 | 外)体部:ロクロナデ・施釉 内)体部:ロクロナデ・施釉 高台:削り出し高台 | 内)外)グレイ みの黄 | | |

第3表 清水遺跡発掘調査 出土遺物観察表 石器

| 番号 | 遺構名・出土地点 | 器種 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚(cm) | 重量(g) | 備考 |
|----|----------|-----|--------|-------|-------|-------|------|
| 24 | K-21 包含層 | 石庖丁 | 4.6 | 8.5 | 1.0 | 48.7 | 結晶片岩 |



調査前風景

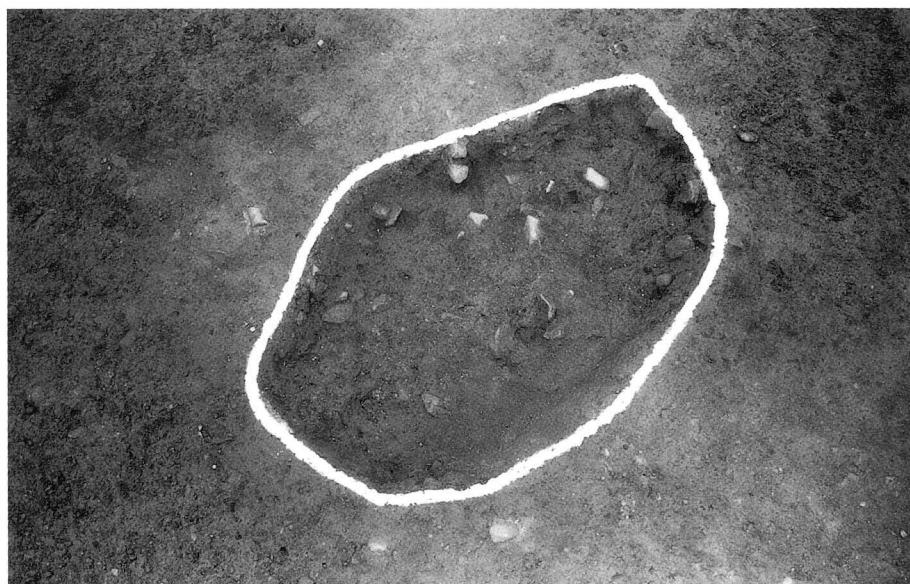


2区全景（西から）

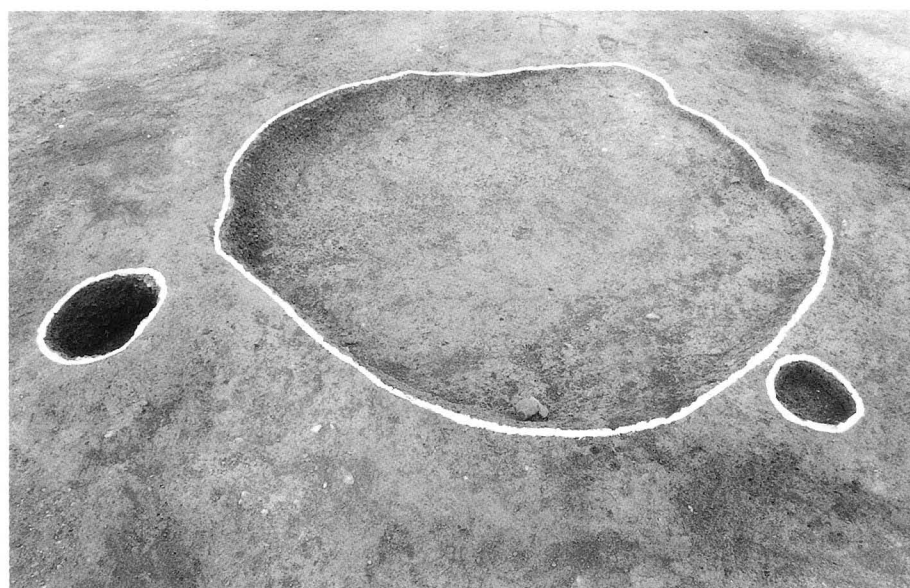


3区全景（西から）

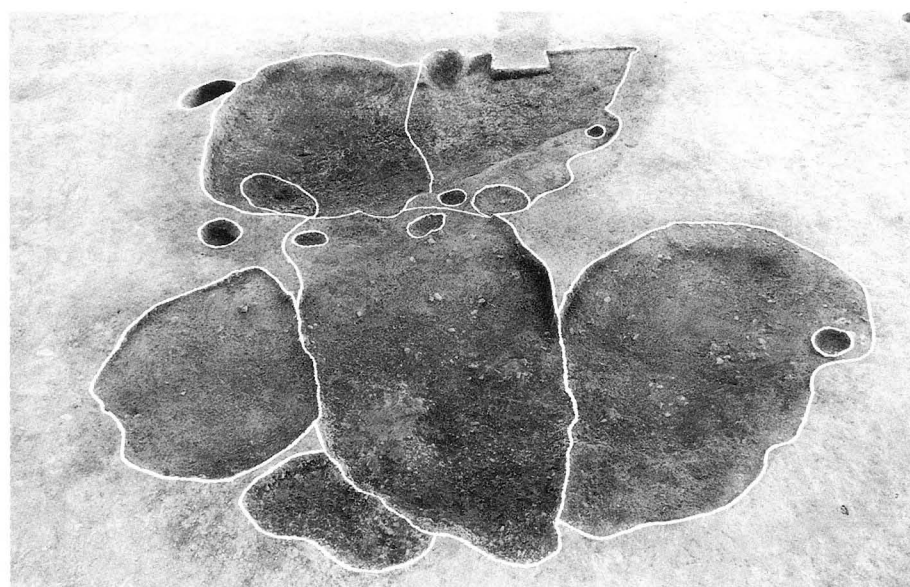
图版 2



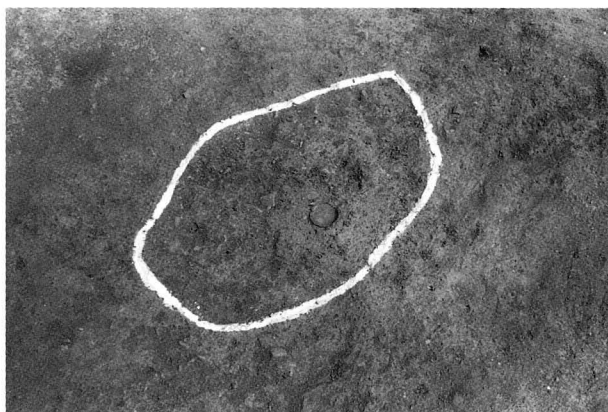
SK1001完掘状况



SK1006完掘状况



SO1003~SO1007
完掘状况 (全景)



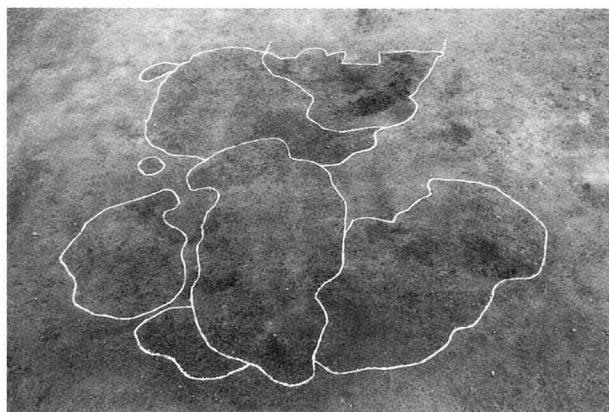
SK1001遺構検出状況 (南から)



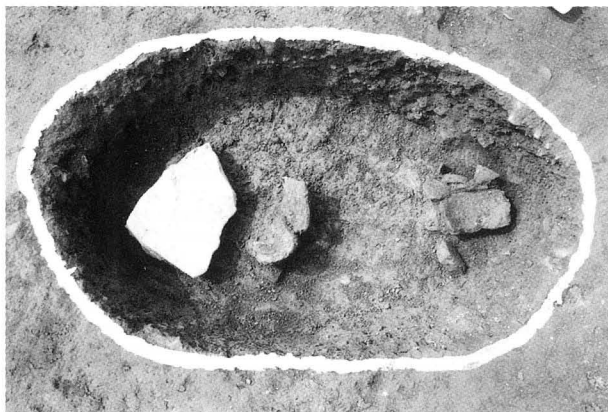
SK1006遺構出土状況



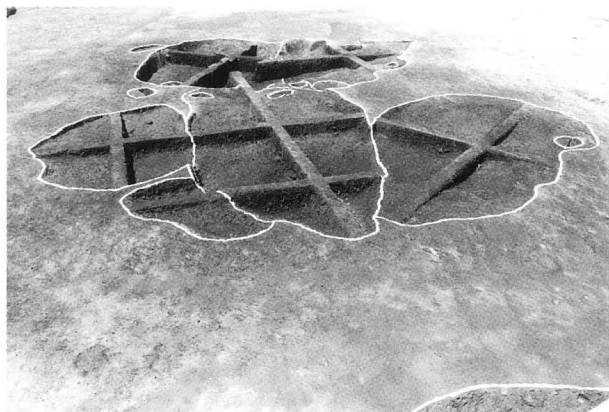
SK1001遺構出土状況



SO1003~SO1007遺構検出状況



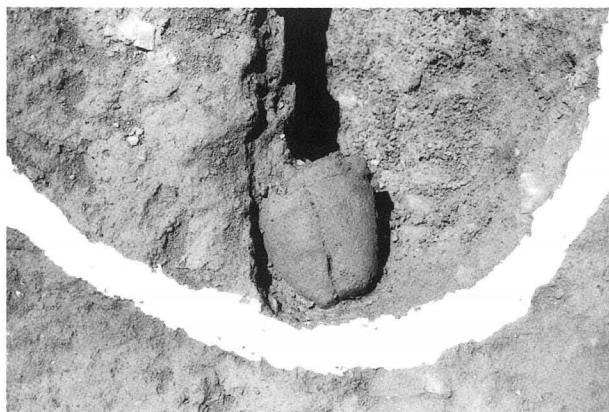
SP1060遺構出土状況



SO1003~SO1007半掘全景

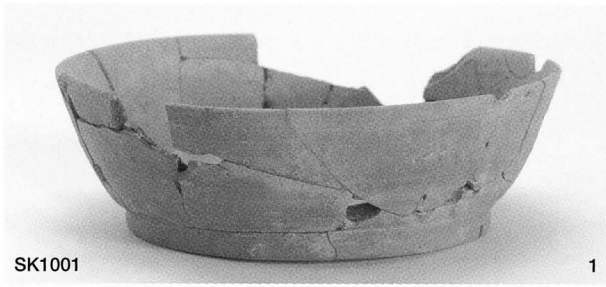


SP1069遺構出土状況 (西から)



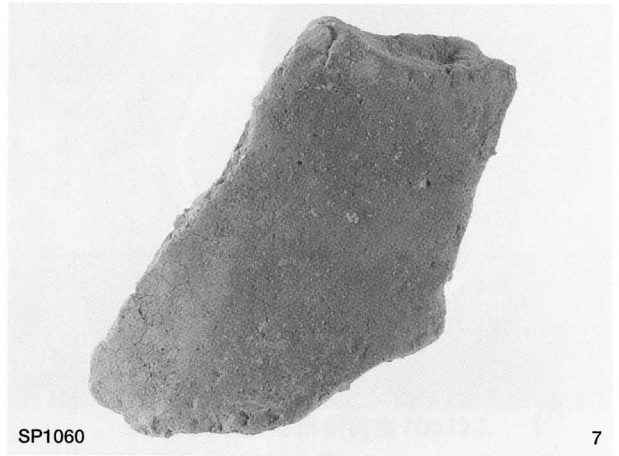
SP1069遺構出土状況

図版 4



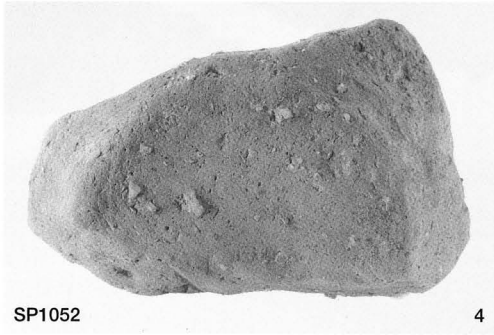
SK1001

1



SP1060

7



SP1052

4



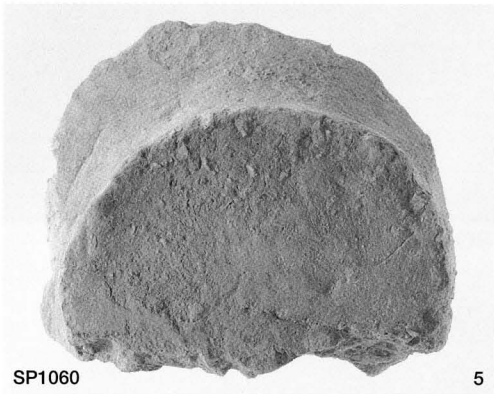
SK1006

2



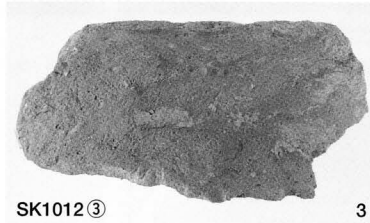
包含層

11



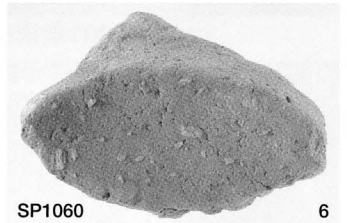
SP1060

5



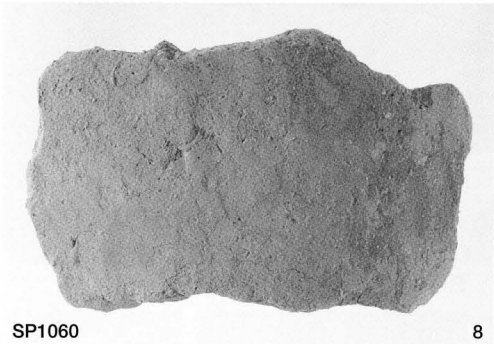
SK1012 ③

3



SP1060

6



SP1060

8



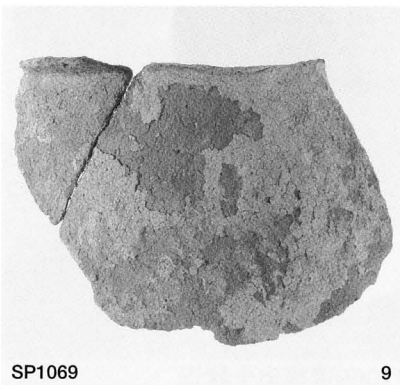
SO1006

10



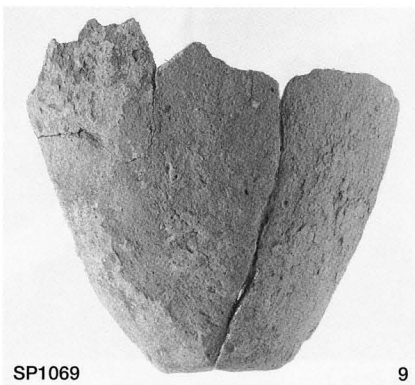
包含層

12



SP1069

9



SP1069

9



包含層

13



包含層

14



包含層

14



包含層

16



包含層

15



包含層

15



包含層

19



包含層

17



包含層

20

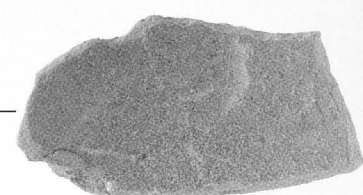


包含層

18



包含層



23



包含層

22



包含層



24



包含層

21



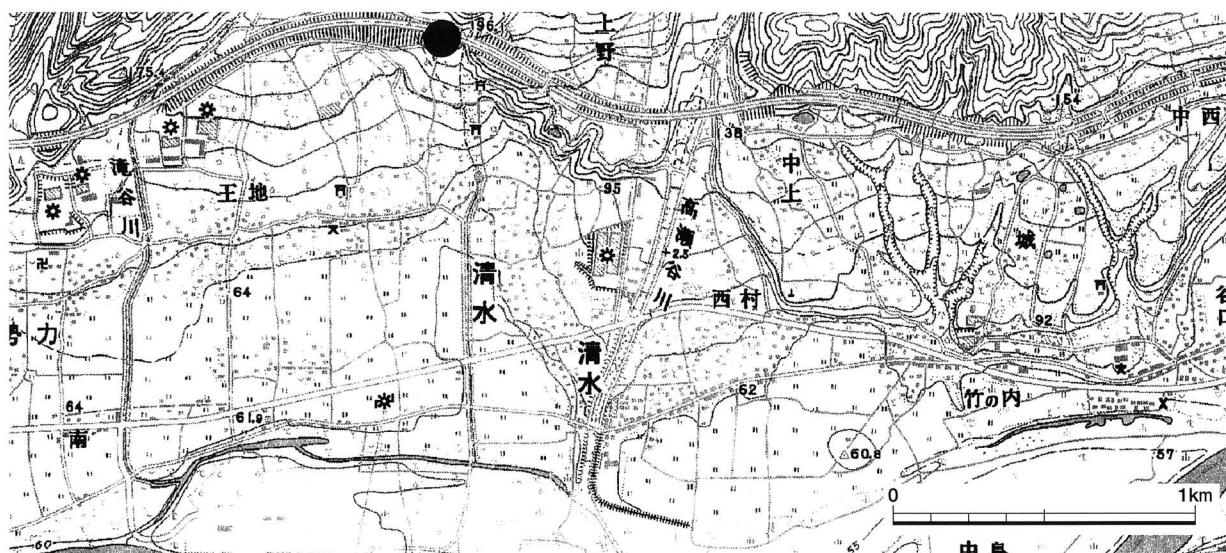
IV 塩塚遺跡

1. 本章は、三好郡三野町に所在する清水遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査期間及び報告書作成期間は、第Ⅰ章の本文及び第2・3表にまとめてあるので、参照されたい。
3. 本章の遺物番号は、通し番号とし、本文・挿図・図版・表と一致する。
4. 本遺跡周辺の地理的、歴史的環境については、『四国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査報告28 大谷尻遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第53集の第Ⅱ章を参照されたい。

1 調査の経過

(1) 調査の経過

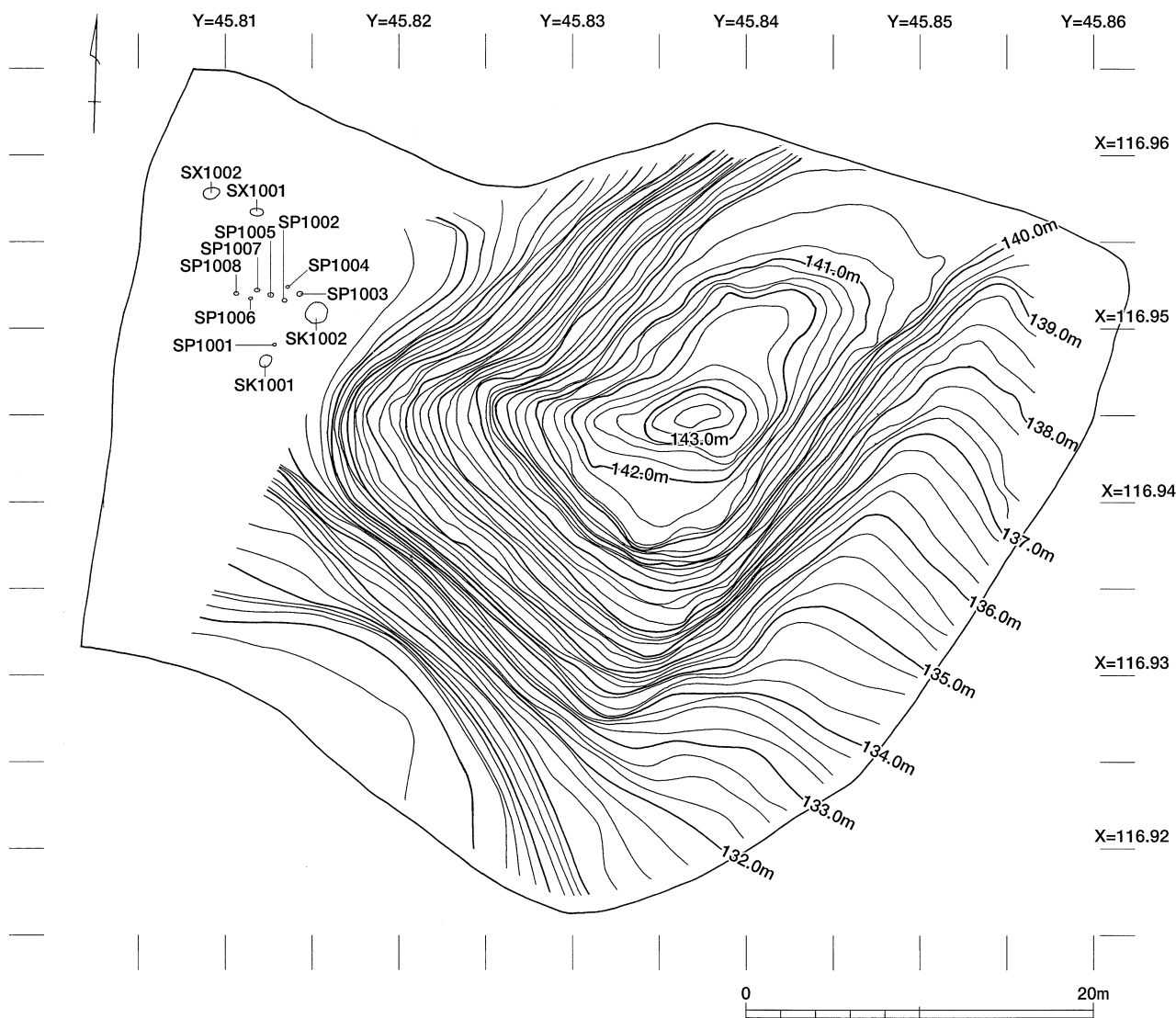
塩塚遺跡は、調査区の南側は、緩やかな傾斜で扇状地へと続く標高120～140mに位置する。調査区の北側は急傾斜で山地につながり、調査区内の北東には、扇状地斜面に突出する比高差15m程度の円錐状の小山塊（塩塚）が存在する。頂上部には丸山神社があり、周辺の地形状況からみて遺跡の可能性が指摘されていた。発掘調査にあたっては13,730m²を対象面積として試掘調査を行った。試掘調査は平成7年1月24日～2月3日と平成7年10月12日～10月16日の2回に分けて重機によるトレンチ掘りを382m²につき行った。本調査面積を1,950m²と確定した。本調査は平成8年4月3日に開始し、平成8年6月10日に終了した。



第1図 調査地点位置図 (S=1/2.5万)

(2) 発掘調査の方法

調査を始めるに当たりグリッドの配置は、発掘調査統一基準にならい、第Ⅳ系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。西南隅を基準とし、北にA、B、C・・・、東に1、2、3・・・の順に記号・番号を振り、その組み合わせで各グリッドを表すこととした。遺構記号・番号は検出時に決定した。



第2図 塩塚遺跡遺構配置図 (S=1/400)

(3) 調査日誌抄

| | | |
|---------------------------------|-------|--|
| 1996 (平成8) 年 | 5月22日 | 側溝、土層図面、(東壁・南壁) |
| 4月17日 等高線作図 | 5月23日 | 側溝清掃、西壁断面 |
| 4月18日 等高線作図 | 5月31日 | 人力掘削、西平坦部プラン検出、中央ベルト (Iライン) 断面写真 北壁断面 |
| 5月7日 側溝清掃、起工測量、平板 | 6月3日 | 人力掘削、土層断面図、SK、SP、東完掘写真 |
| 5月10日 側溝清掃、平板、山の平坦部メッシュ (5m) 設定 | 6月5日 | 人力掘削、西平坦部遺構検出、1/100 東レベル入れ |
| 5月13日 機械掘削、写真、平面 (上) メッシュのみ | 6月6日 | 人力掘削、1/100東・南レベル入れ、西平坦部完掘・塚上写真、1/20平面図 |
| 5月20日 側溝清掃、南壁写真、東壁断面 | 6月7日 | 人力精査 |
| 5月21日 側溝清掃、南壁断面、南平坦部南壁写真、東壁断面 | | |

2 調査成果

(1) 基本層序

調査区においては薄く表土(腐葉土)がのるが、表土も礫が風化したものであり、礫層の状態に違いはあるもののすべて礫層である。東側の緩斜面や小山塊も基本的にはすべて礫層である。北東部、塚の西側平坦部で近世の遺構面を検出した。

(2) 遺構と遺物

今回の調査では遺構として捉えられたのは、西側平坦部で土坑2基、柱穴8基、性格不明遺構2基である。

1号土坑 (SK1001) (第3図)

西側平坦部、J-3で検出した土坑である。規模は長軸0.76m、短軸0.54m、深さ0.13mを測る。平面形は楕円形で、断面形は船底形である。覆土中より出土遺物はなかった。

2号土坑 (SK1002) (第4図)

西側平坦部、J-2で検出した土坑である。規模は長軸1.43m、短軸1.20m、深さ0.16mを測る。平面形は円形で、断面形は皿形である。覆土中より出土遺物はなかった。

1号不明遺構 (SX1001) (第5図)

西側平坦部、H-3で検出した不明遺構である。規模は長軸0.72m、短軸0.62m、深さ0.16mを測る。平面形は不整な楕円形で、断面形は椀形である。覆土中より出土遺物はなかった。

2号不明遺構 (SX1002) (第6図)

西側平坦部、I-3で検出した不明遺構である。規模は長軸0.86m、短軸0.78m、深さ0.13mを測る。平面形は不整な楕円形で、断面形は椀形である。覆土中より出土遺物はなかった。

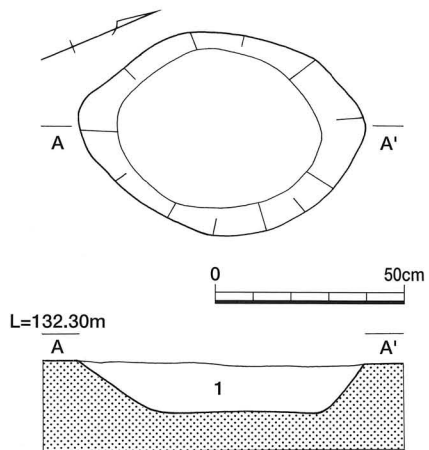
包含層出土遺物 (第7・8・9図)

1は皿である。2は磁器皿である。内面は見込み蛇の目釉剥ぎで染付を施し、口縁部は輪花を施す。

3～6は磁器の碗である。4・6の外表面は染付である。5は内外表面ともに染付である。内面に釉を施している。2～6・12は内外表面ともに釉を施している。7は青磁の壺か中瓶と思われる、外表面に釉を施している。壺付部分は砂付である。8・9は肥前系と考えられる。磁器の小瓶か徳久利と思われる。外表面は染付で、蜻唐草文を描く。8は外表面と内表面の口縁部に釉を施している。9は外表面に釉を施している。

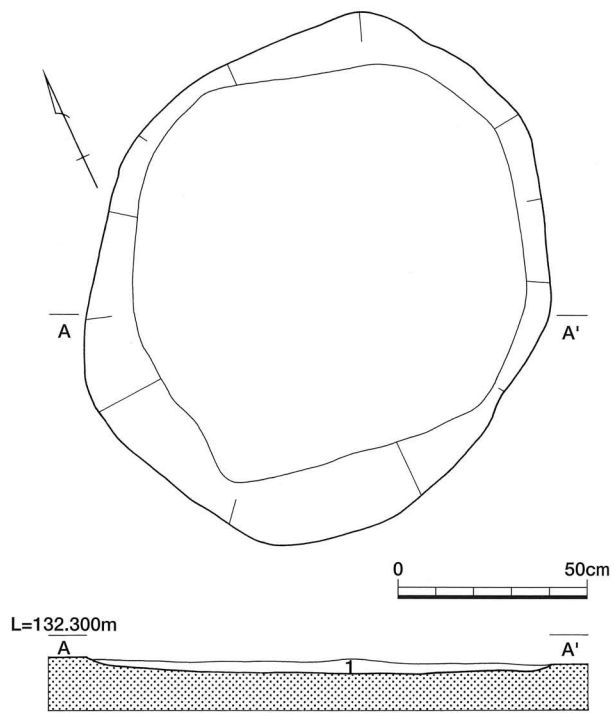
10・11は陶器灯明皿である。備前系と考えられる。12は陶器大鉢である。内表面は見込み蛇の目跡があり、白泥している。13・14は陶器播鉢である。13は体部にすり目を施している。14は内表面にすり目を施している。15は陶器播鉢である。内表面にすり目を施している。備前系と考えられる。16は瓦質の羽釜である。

17は平瓦か棧瓦と思われる。凸面凹面ともに板ナデを施してある。18は瓦質軒丸棧瓦で凸面には板ナ



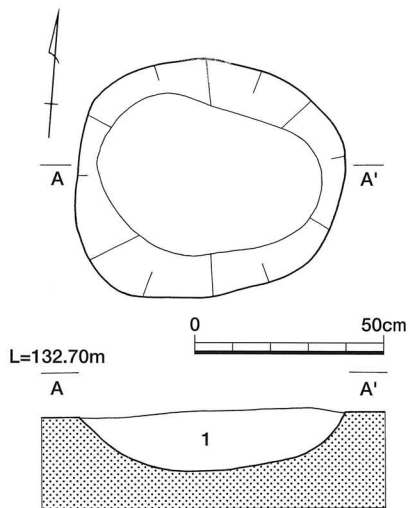
1. オリーブ褐色 2.5YR4/4 粘質土
(ϕ 1cm以下の黒っぽい角礫を多量に含む)

第3図 SK1001平・断面図 (S=1/20)



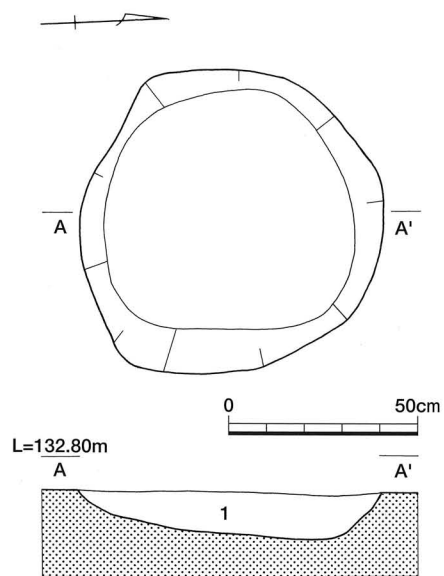
1. オリーブ褐色 2.5Y4/6 砂質土 (ϕ 5mm前後の角礫を多量に含む)

第4図 SK1002平・断面図 (S=1/20)



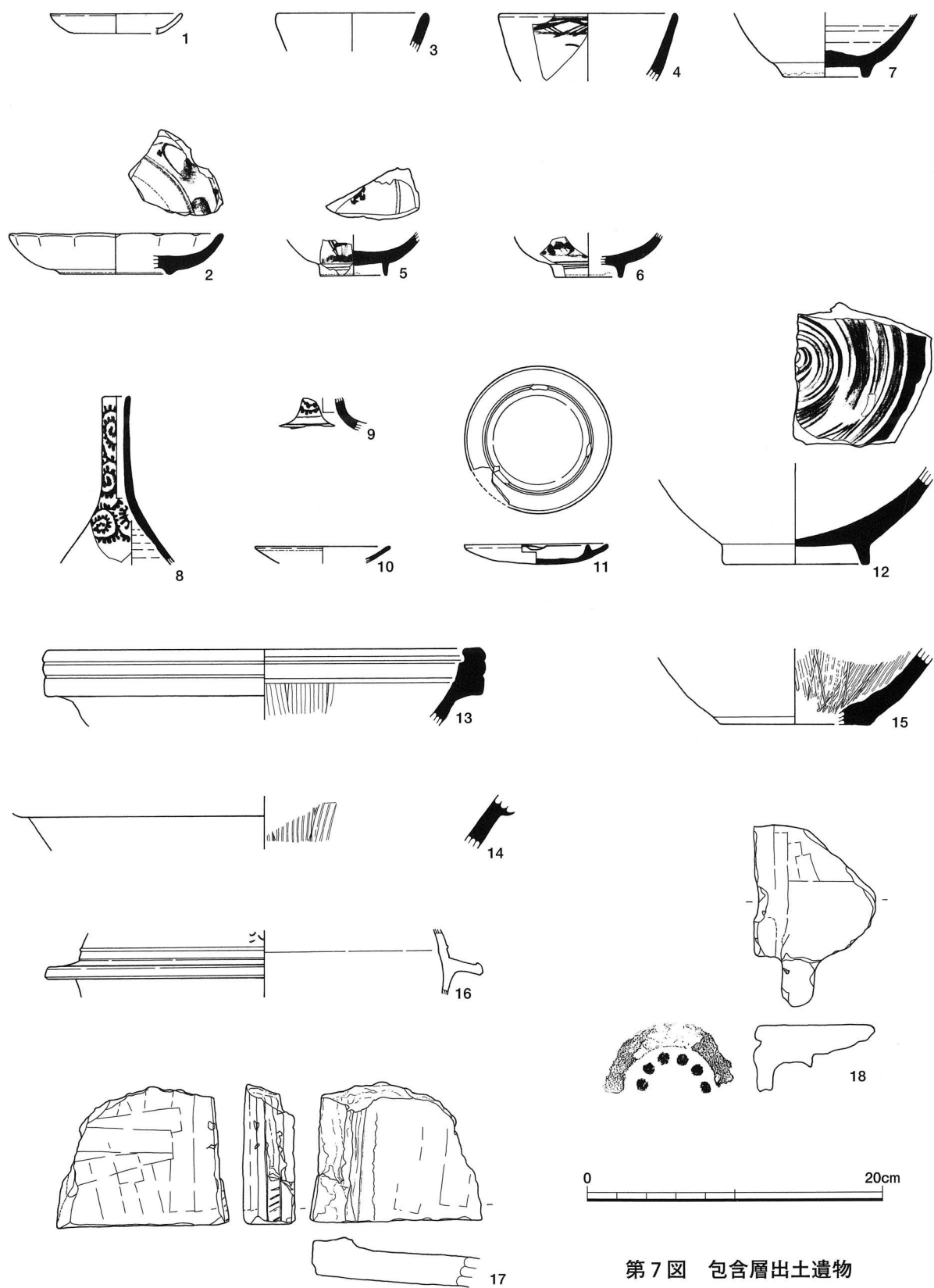
1. 黄褐色 2.5Y5/4 粘質土
(ϕ 2~3cm大の礫を含む しまりあり)

第5図 SX1001平・断面図 (S=1/20)



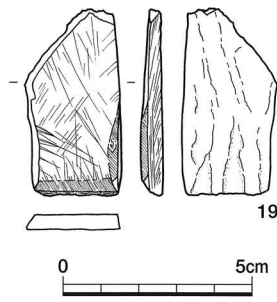
1. 黄褐色 2.5Y5/4 粘質土
(ϕ 2~3cm大の礫を含む しまりあり)

第6図 SX1002平・断面図 (S=1/20)

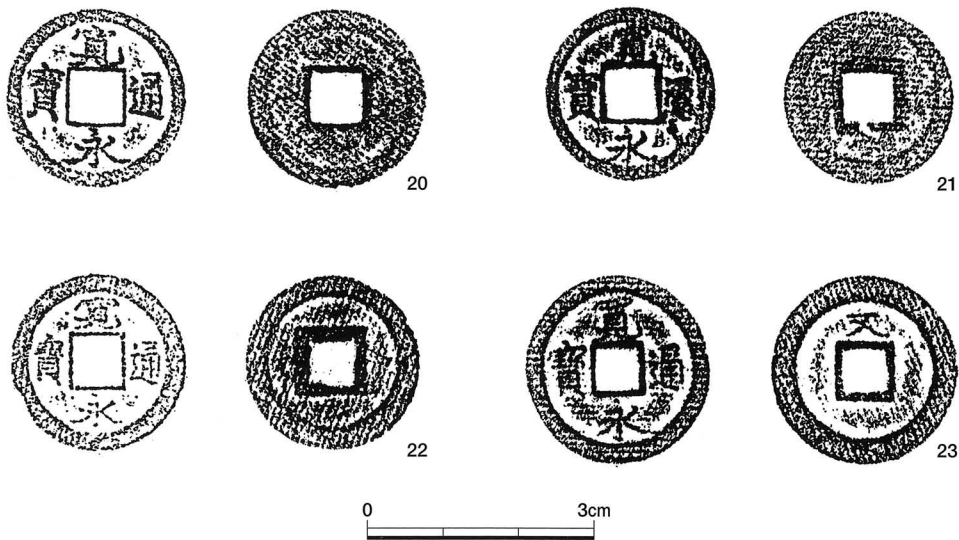


第7図 包含層出土遺物

デを施してある。19は砥石である。20～23は寛永通宝である。いずれも銅銭である。23は背文を持つ。これら以外に、遺存状態が悪く、図示できなかったが、鉄銭の寛永通宝も3枚見つかった。



第8図 包含層出土石器



第9図 表土出土遺物

3 まとめ

本遺跡には、通称塩塚と呼ばれる小山塊があり、古墳の存在が予想された。しかし、調査の結果、17世紀以前の遺構、遺物は検出されなかった。塚頂上付近の表土より出土した銭貨には、背面に「文」の文字を有するいわゆる文銭も含まれている。初鑄は寛文8年（1668年）である。一方、鉄銭の寛永通宝の初鑄は、元文4年（1739年）である。また、出土陶磁器や瓦も18世紀以降のものがほとんどである。これらのことから、本遺跡の時期は「明和2年」（1765年）という塩塚北に鎮座する祠の年号からはさほど遡りえず、最も古く考えても17世紀で、主体は18～19世紀と考えられよう。

第1表 塩塚遺跡遺構一覧表

| 遺構名 | 長軸 (cm) | 短軸 (cm) | 深度 (cm) |
|--------|------------|------------|------------|
| SK1001 | 76 | 54 | 13 |
| SK1002 | 143 | 12 | 16 |
| SX1001 | 72 | 62 | 16 |
| SX1002 | 0.86 | 78 | 13 |

第2表 塩塚遺跡発掘調査 出土遺物観察表 土器

| 番号 | 遺構名 出土地点 | 器種 | 残存 率 | 口径 (cm) | 体部最 大径 (cm) | 底径 (cm) | 頸部 径 (cm) | 器高 (cm) | その他の 法量 (cm) | 技法・文様 | 色調 | 胎土 | 搬入 品 |
|----|----------------------------------|-------------------|---------|------------|-------------------|------------|-----------------|------------|-----------------|--|---------------------------|-----------|----------|
| 1 | J-1 ベルト | 土師器 皿 | 1/6 | 9.0 | - | - | - | 1.35 | - | 外)口縁体部:ヨコナデ、底面:回転ヘラ切り 内)口縁体部:ヨコナデ | 外)黄橙 内)黄橙 | 長、雲、 赤 | |
| 2 | G・Hグリッド 機械掘削 | 磁器 皿 | 1/8 | 14.4 | - | 7.6 | - | 2.7 | 高台高 0.3 | 外)口縁体底部:ロクロナデ・施釉 内)口縁体底部:ロクロナデ・施釉・見込み蛇の 目釉剥ぎ 口縁輪花型、内面染付 | 外)黄みの白 内)黄みの白 | | |
| 3 | I-2 | 磁器 碗 | 1/12 | 10.1 | - | - | - | (2.6) | - | 外)口縁体部:ロクロナデ・施釉 内)口縁体部:ロクロナデ・施釉 | 内・外)グレイみ の黄緑 | | |
| 4 | 塚南平坦部 C・Dライン 表土? | 磁器 碗 | 1/8 | 11.9 | - | - | - | (4.6) | - | 外)口縁体部:ロクロナデ・施釉 内)口縁体部:ロクロナデ・施釉 外面染付 | 内・外)明るいオリ ープみのグレイ | | |
| 5 | 北壁西壁下 | 磁器 碗 | 1/8 | - | - | 4.6 | - | (2.8) | 高台高 0.85 | 外)体底部:ロクロナデ・施釉 内)体底部:ロクロナデ・施釉 内外面染付 | 外)黄みの白 内)黄みの白 | | |
| 6 | G・Hグリッド 機械掘削 | 磁器 碗 | 1/8 | - | - | 4.6 | - | (3.0) | 高台高 (0.9) | 外)体底部:ロクロナデ・施釉 内)体底部:ロクロナデ・施釉 外面染付 | 外)黄みの白 内)黄みの白 | | |
| 7 | J-1 人力 西平坦部 | 青磁 壺 (中瓶?) | 1/5 | - | - | 5.8 | - | (4.3) | 高台高 1.0 | 外)体底部:ロクロナデ・施釉 内)体底部:ロクロナデ 畳付砂付 | 外)グレイみの黄 緑 内)グレイみの黄 | | |
| 8 | 南方 表土 (機械掘削) | 磁器小 瓶 (徳利?) | 1/2 | 1.8 | - | - | - | (11.2) | - | 外)口縁頸体部:ロクロナデ・施釉 内)口縁頸体部:ロクロナデ、口縁部:施釉 外面染付、蜻唐草文 | 外)グレイみの黄 内)明るいグレイ | | 肥前 系? |
| 9 | J-1 人力 西平坦部 | 磁器小 瓶 (徳利?) | 1/3 | - | - | - | - | (2.0) | - | 外)頸部:ロクロナデ・施釉 内)頸部:ロクロナデ 外面染付、蜻唐草文 | 外)緑みの白 内)白 | | 肥前 系? |
| 10 | J-1 人力 西平坦部 | 陶器 灯明皿 | 1/13 | 8.1 | - | - | - | (1.1) | - | 外)口縁体部:ロクロナデ、口縁部:塗土 内)口縁体部:ロクロナデ・塗土 | 外)にぶい橙 内)赤 | | 備前 系? |
| 11 | J-1 ベルト | 陶器 灯明皿 | 9/10 | 9.7 | - | 1.9 | - | 1.4 | - | 外)口縁体底部:ロクロナデ 内)口縁体底部:ロクロナデ | 外)にぶい褐 内)にぶい橙 | | 備前 系? |
| 12 | G-9(P-5) 表土 | 陶器 大鉢 | 1/3 | - | - | 9.6 | - | (6.6) | 高台高 1.4 | 外)体底部:ロクロナデ・施釉 内)体底部:ロクロナデ・施釉・見込み目跡有り、 白泥 | 外)暗い赤 内)浅い黄みの ブラウン | | |
| 13 | P-2(K-5)P- 3(K-1)より北 平坦部表探 | 陶器 播鉢 | 1/10 | 29.0 | - | - | - | (4.7) | - | 外)口縁頸部:回転ナデ 内)口縁部:回転ナデ、体部:スリ目(9条/2.7cm) | 外)明赤褐 内)明赤褐 | | |
| 14 | 西平坦部 ベルト | 陶器 播鉢 | 1/20 | - | - | - | - | (3.6) | - | 外)体部:回転ナデ 内)体部:スリ目(4条/cm) | 外)明赤褐 内)明赤褐 | | |
| 15 | 西斜面J-5 機械掘削 | 陶器 播鉢 | 1/5 | - | - | 10.2 | - | (5.1) | - | 外)体底部:ナデ 内)体底部:スリ目(7条/2.6cm) | 外)暗赤褐 内)にぶい赤褐 | | 備前 系? |
| 16 | 塚南平坦部 C・Dライン 表土? | 瓦質 羽釜 | 1/12 | - | - | - | - | (4.4) | - | 外)体部:回転ナデ 内)体部:回転ナデ・回転ヘラケズリ | 外)褐灰 内)灰白 | 石、長 | |

第3表 塩塚遺跡発掘調査 出土遺物観察表 瓦

| 番号 | 遺構名 出土地点 | 瓦種 | 材質 | 最大長 (cm) | 最大幅 (cm) | 最大厚 (cm) | 重量 (g) | 凸面 | 凹面 | 色調 | 胎土 |
|----|------------------|-------------|-----|-------------|-------------|-------------|-----------|-----------------|-----------------|-------------------------|-----------|
| 17 | F・G グリッド 塚南東部 | 平瓦 (棧瓦?) | 須恵質 | 9.45 | 11.65 | 3.5 | 272.5 | 板ナデ (幅1.6cm) | 板ナデ (幅1.8cm) | 凸面 凹面 浅黄 にぶい黄褐 | 石、長、 雲 |
| 18 | J-5塚 西斜面 | 軒丸棧瓦 | 瓦質 | 7.9 | 2.0 | 8.9 | 28.17 | 板ナデ (幅1.1cm) | 凸面 凹面 | 褐灰 褐灰 | 緻密 |

第4表 塩塚遺跡発掘調査 出土遺物観察表 石器

| 番号 | 遺構名・出土地点 | 器種 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚(cm) | 重量(g) | 備考 |
|----|----------|----|--------|-------|-------|-------|----|
| 19 | C-29 包含層 | 砥石 | 4.9 | 2.55 | 0.6 | 9.9 | |

第5表 塩塚遺跡発掘調査 出土遺物観察表 鉄製品

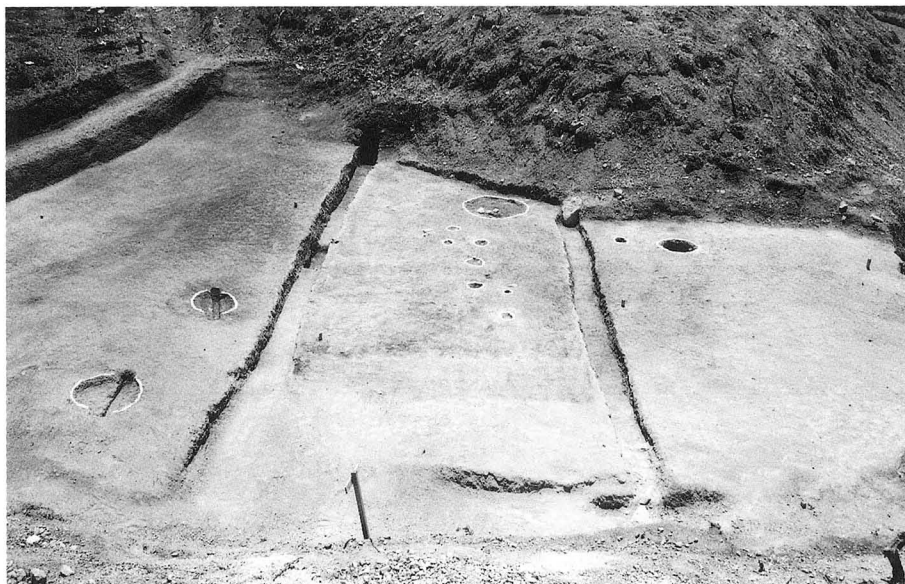
| 番号 | 遺構名・出土地点 | 器種 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 備考 |
|----|------------------|----|--------|-------|--------|-------|------------------|
| 20 | 東西トレンチ 表土 | 銅銭 | 2.4 | 2.4 | 0.1 | 2.5 | 寛永通宝 |
| 21 | 東西・南北トレンチ交点付近 表土 | 銅銭 | 2.25 | 2.25 | 0.1 | 2.2 | 寛永通宝 |
| 22 | H-6 表土 | 銅銭 | 2.3 | 2.3 | 0.1 | 3.3 | 寛永通宝 |
| 23 | 東西・南北トレンチ交点 表土 | 銅銭 | 2.5 | 2.5 | 0.1 | 3.6 | 寛永通宝 背面に「文」文銭 |



調査前風景



西平坦部遺構検出状況



西平坦部完掘状況

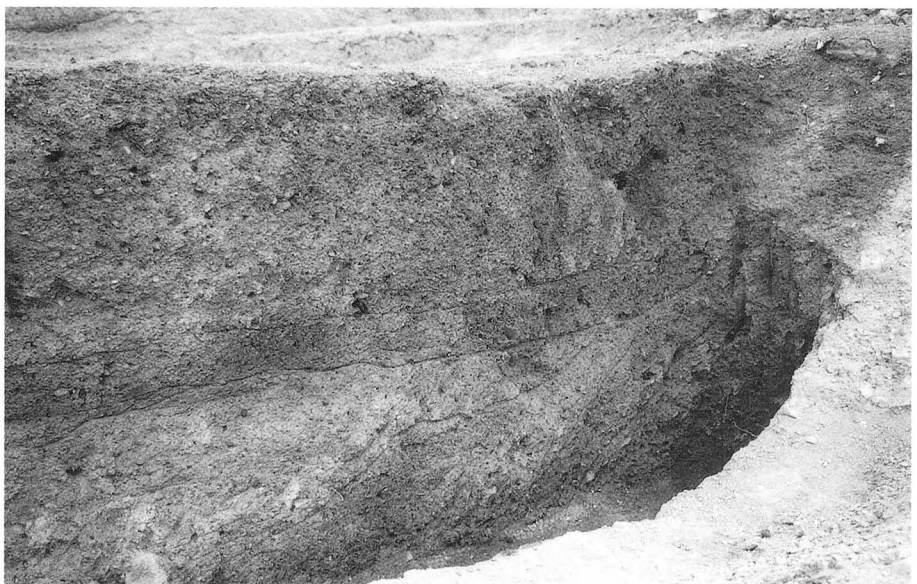
図版 2



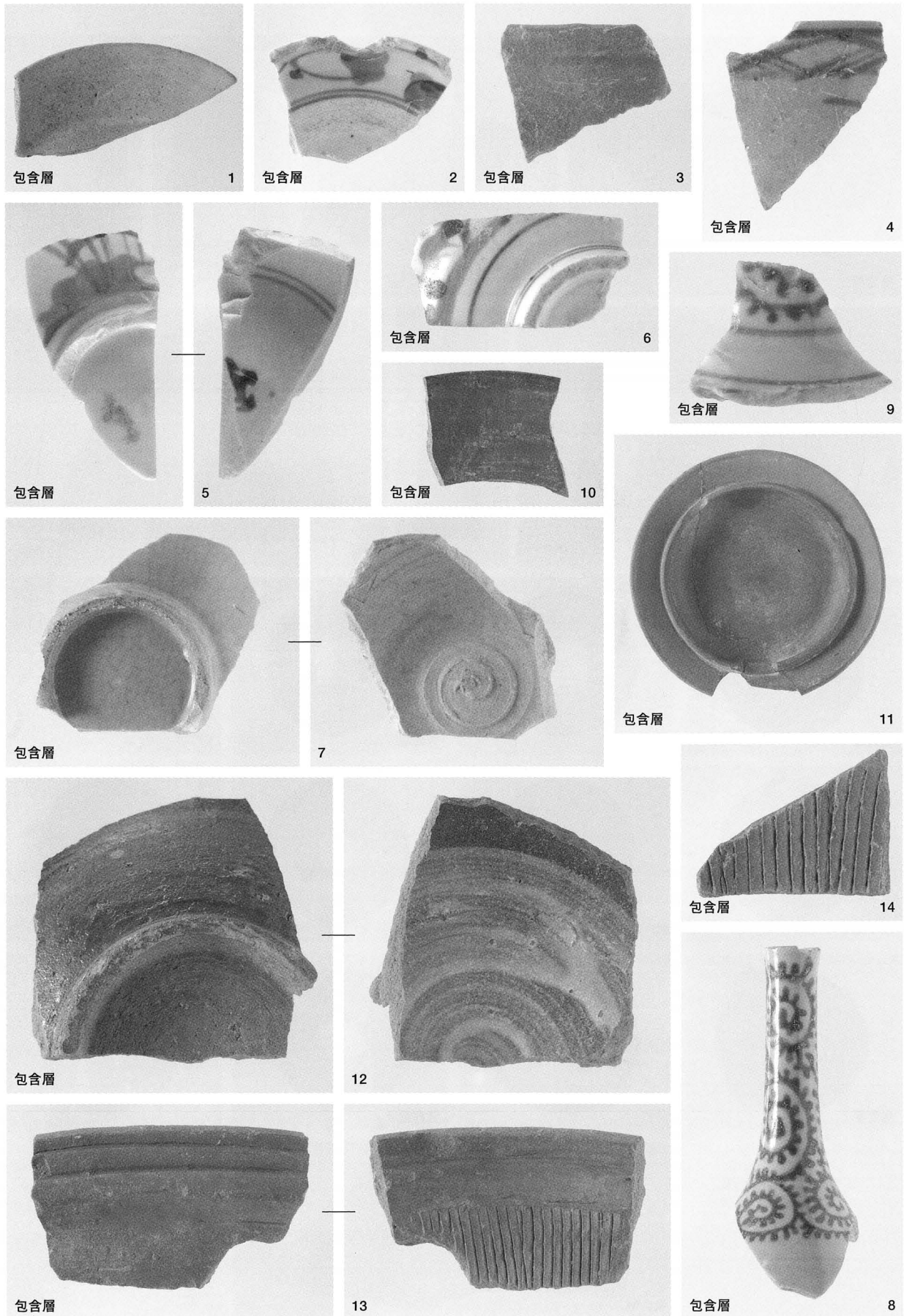
塚上トレンチ (東西)
交点付近



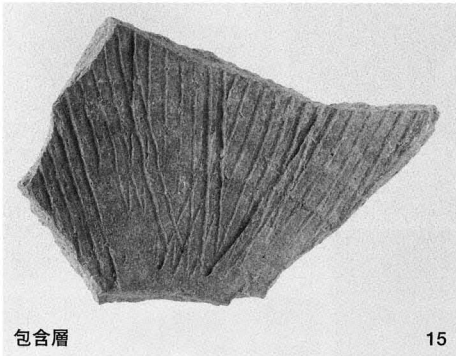
塚上トレンチ (東西)
土層断面



西平坦部中央ベルト
東西ベルト断面



图版 4



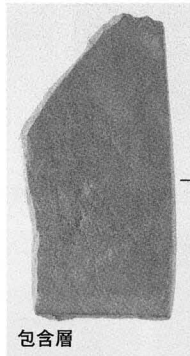
包含層

15

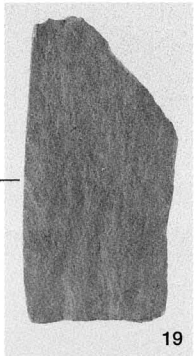


包含層

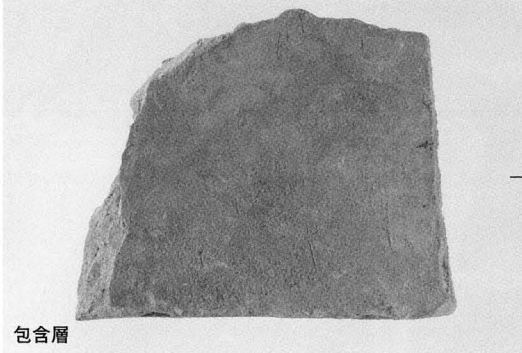
16



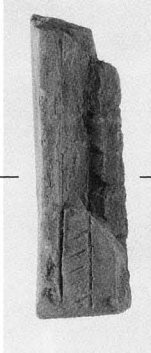
包含層



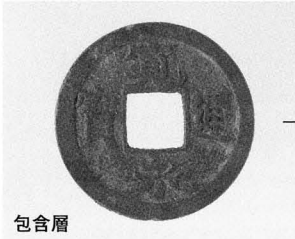
19



包含層

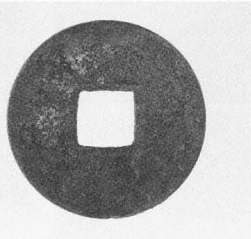


17



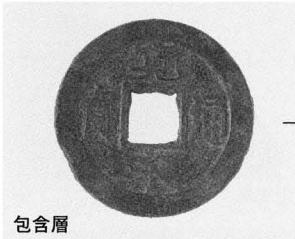
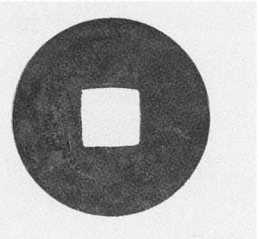
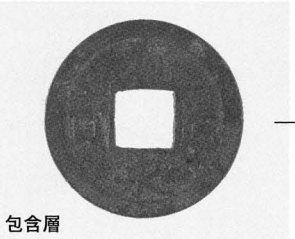
包含層

20



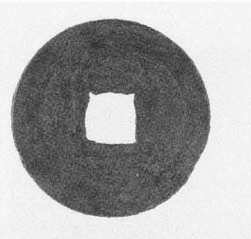
包含層

21



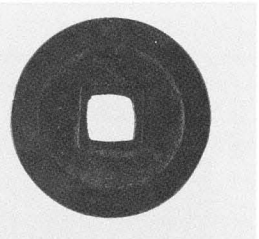
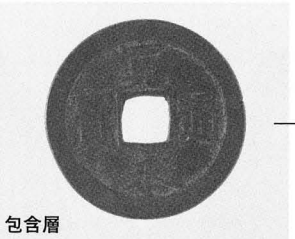
包含層

22



包含層

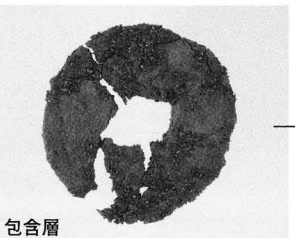
23



包含層



包含層



18



包含層

18

V お塚古墳

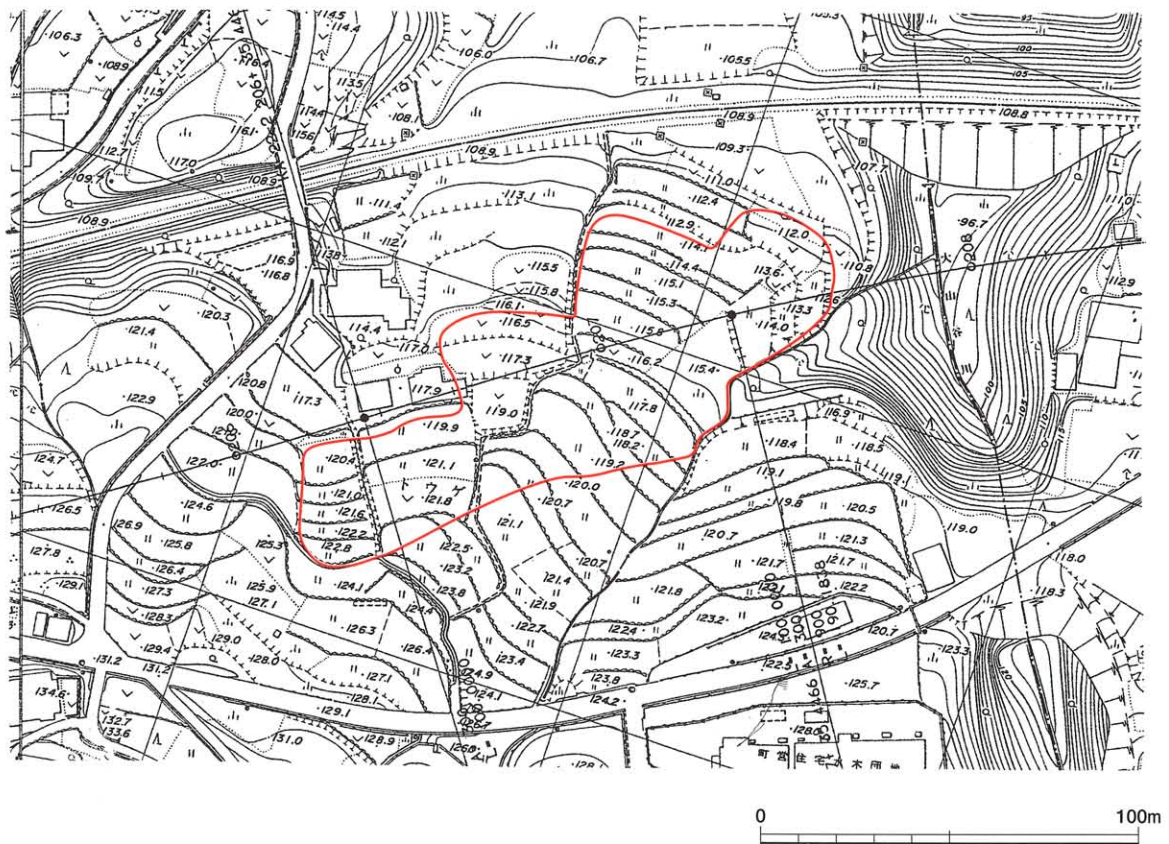
1. 本章は三好郡池田町字トウゲ106-1ほかに所在するお塚古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査期間および報告書作成の期間は、第I章の本文および第2・3表にまとめてあるので、参照されたい。
3. 本章の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
4. 本遺跡の地理的・歴史的環境については、『四国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査報告18 大柿遺跡I』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第37集の第II章を参照されたい。

1 調査の経過

(1) 調査の経過

お塚遺跡は、南北に延びた大山谷とトウゲ谷に挟まれた河岸段丘面上にあり、遺跡の標高は109～130mを測る。対象地のなかにある塚は古墳とされており、現代に至るまで地元地域の信仰の対象とされてきている。

推定された遺跡の範囲のうち、11,806m²が調査対象面積とされた。その範囲を平成7年1月19日から試掘調査を開始し、同年2月10日に終了した。試掘調査は重機によるトレンチ掘削を行い、354m²において実施した。その結果、遺物包含層は田地造成のために削平されていたものの遺構面は残存が確認され溝・土坑・ピットが検出された。またそれに伴って瓦器碗などが出土していることから中世遺構の存在が推定された。よって、本調査面積を6,198m²と確定した。本調査は平成8年3月6日に開始し、同年10月31日に終了した。

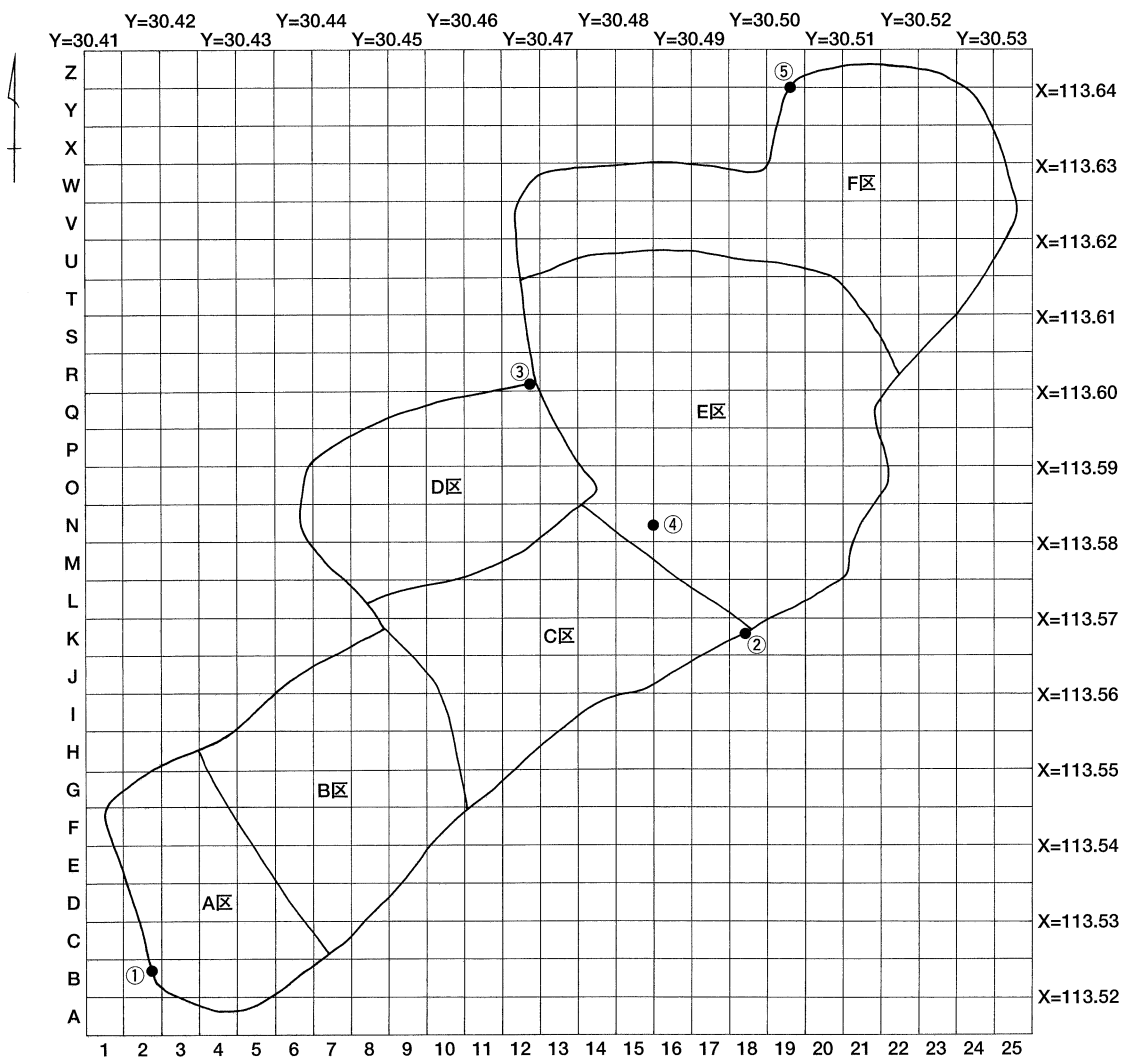


第1図 調査地位置図

(2) 発掘調査の方法 (第2図)

発掘調査を始めるにあたりグリッドの配置は発掘調査統一基準にならい、第IV系国土座標を基準として、5 mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込むかたちで設定した。南西隅のX = 113.515、Y = 30.410の座標値を起点として北にA、B、C・・・、東に1、2、3・・・の順に番号を振り、その組み合わせで各グリッドを表すことにした。

遺構記号・番号は遺構検出時に決定し、掘削後遺構としての確実性の乏しいと判断されるものについては欠番とした。また整理作業段階においても遺構の性格を判断して上で改めて遺構番号を振りなおしている。



第2図 グリッド位置図

(3) 調査日誌抄

1996（平成8）年

- 4月5日 1・2号塚地形測量
- 4月15日 A区空撮
- 4月22日 B区検出状況写真撮影
- 5月14日 2号塚覆土除去
- 5月21日 1号塚検出状況写真撮影
- 5月28日 1・2号塚空撮
- 6月5日 1・2号塚トレンチ掘削、
F区完掘状況写真撮影
- 6月11日 1・2号塚上部小礫層断面写真撮影
- 6月14日 1,2号塚、上部礫層土層図作成
- 6月20日 1・2号塚上部礫層除去
- 7月5日 2号塚平面図作成、
1号塚検出状況写真撮影
- 7月19日 室内整理作業
- 7月29日 C・D区機械掘削開始
- 8月7日 C区人力掘削開始
- 8月9日 D区人力掘削開始
- 8月11日 D区遺構掘削開始
- 10月4日 C区遺構掘削開始
- 10月10日 D区完掘状況写真撮影
- 10月15日 立会
- 10月24日 C区完掘状況写真撮影
- 10月29日 立会
- 10月31日 とりまとめ、撤収

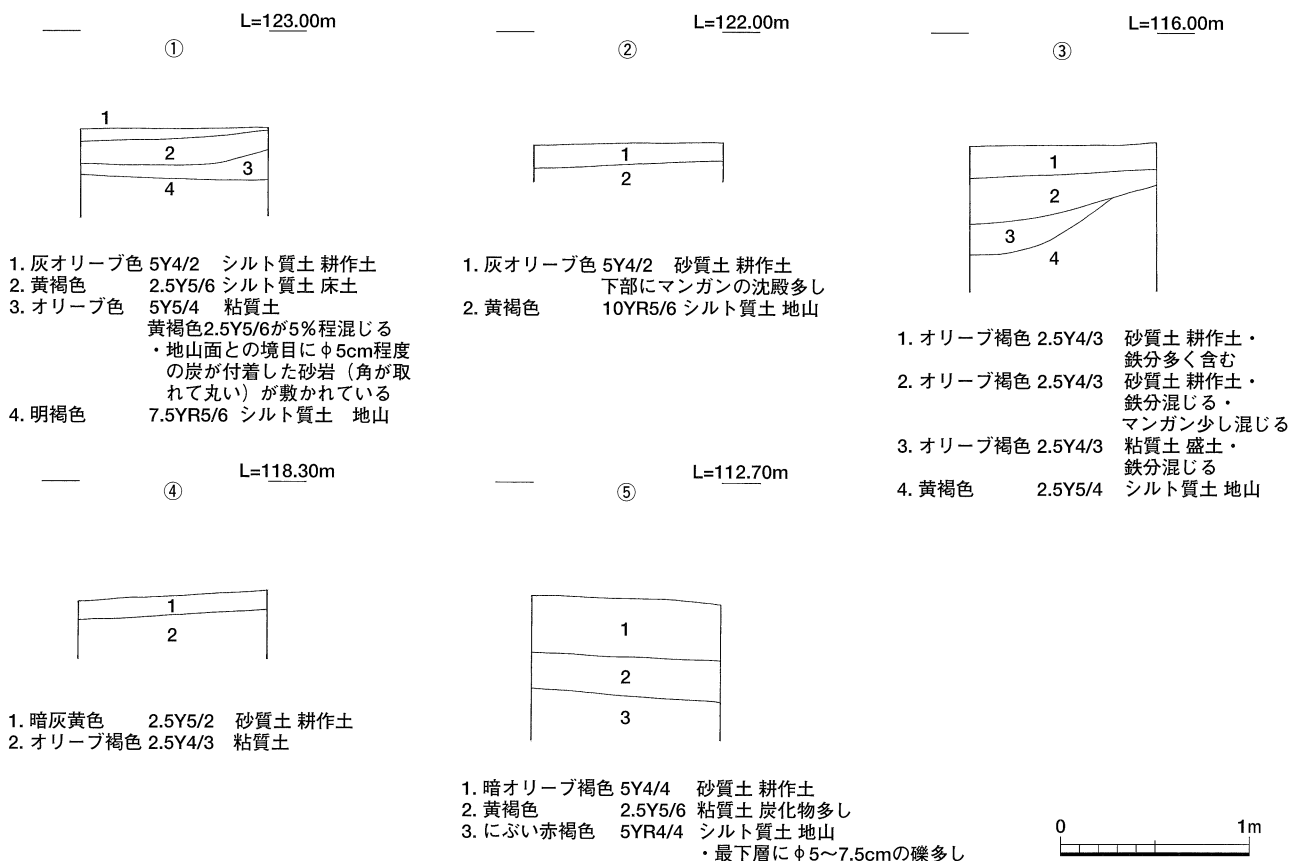
2 調査成果

(1) 基本層序 (第3図)

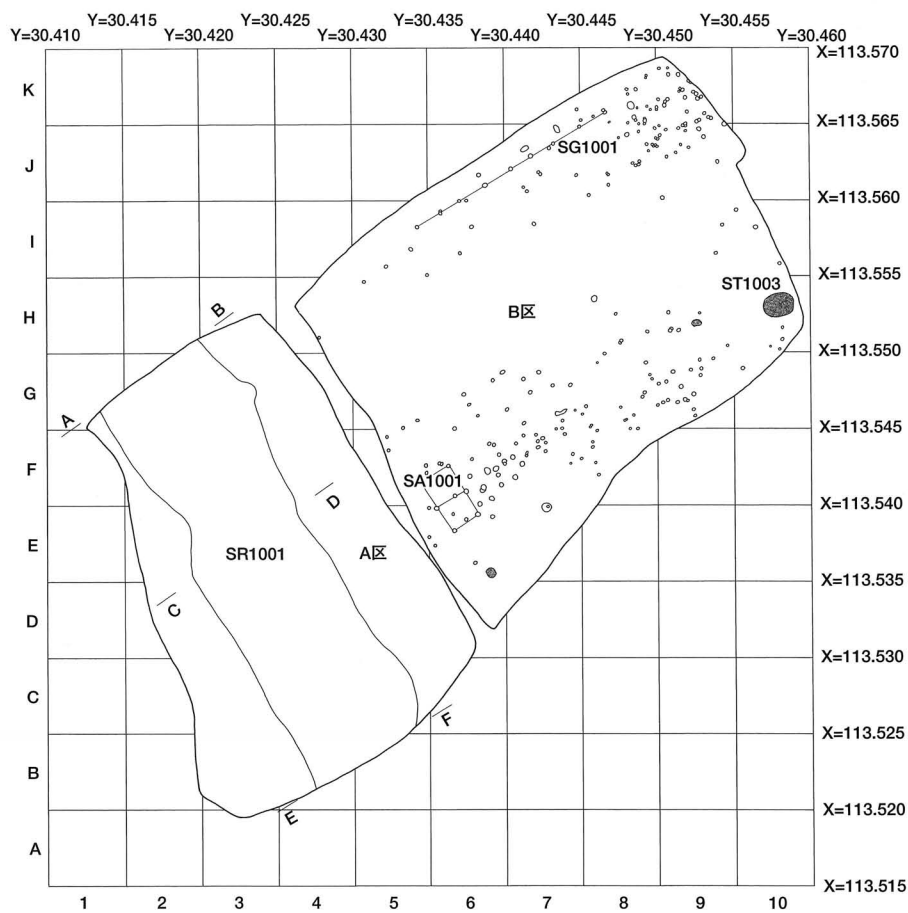
本遺跡は吉野川の南岸に位置し、四国山地の北麓の標高約120mを測る河岸段丘上に立地する。調査地は南から北へ下る緩斜面上にあり、比高差は約10m余りを測る。

調査前の状況は、多くは田畑として利用されており、斜面を削平しその削平した土を低い北側部分に盛り土をすることで平坦部をつくり出している。そのため、とくに南側に位置する標高が高い調査区ほど削平が著しい。逆に標高が低い北側の調査区ほど遺物包含層および遺構面が安定しており遺存状況も良かった。そのため南側のA～D区およびE区の南側の各調査区においては耕作土直下に遺構面を検出することになった。よってここでは、おもに比較的土層堆積状況が良かった北端の調査区であるF区を中心に観察できた堆積状況について説明する。

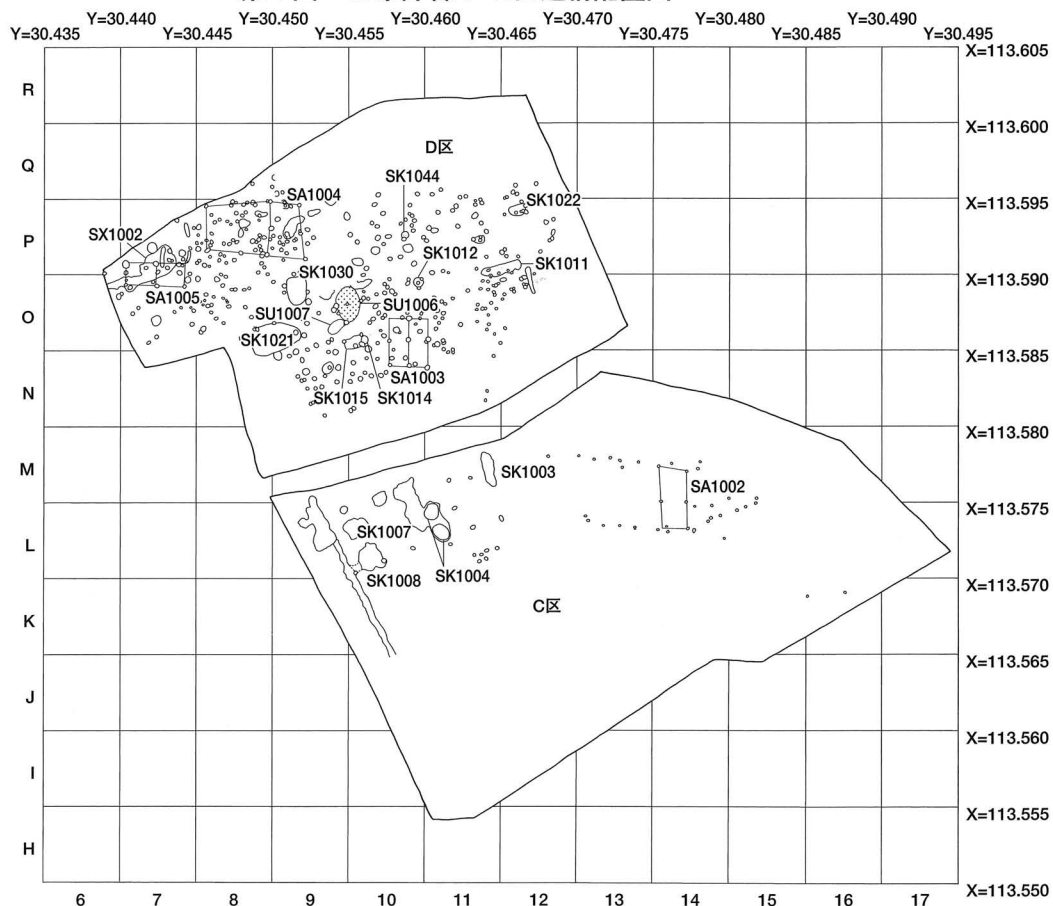
1・2層は耕作土および床土である。これらは比較的全調査区において認められる。3・4層は田地を造成する際に盛られた客土や盛り土で、部分的にのみ観察されるものである。5層は、調査地南端のA区においても部分的に観察されたが、F区においてより広範囲および厚い層厚で堆積している状況が確認できた包含層である。色調はオリーブ褐色～黄褐色を呈し、調査地のほかの堆積層ではあまり確認できなかった粘質土である。6層は地山層である。土質はシルト質土を呈し、 ϕ 5～10cm前後の岩盤礫を含んでいる。



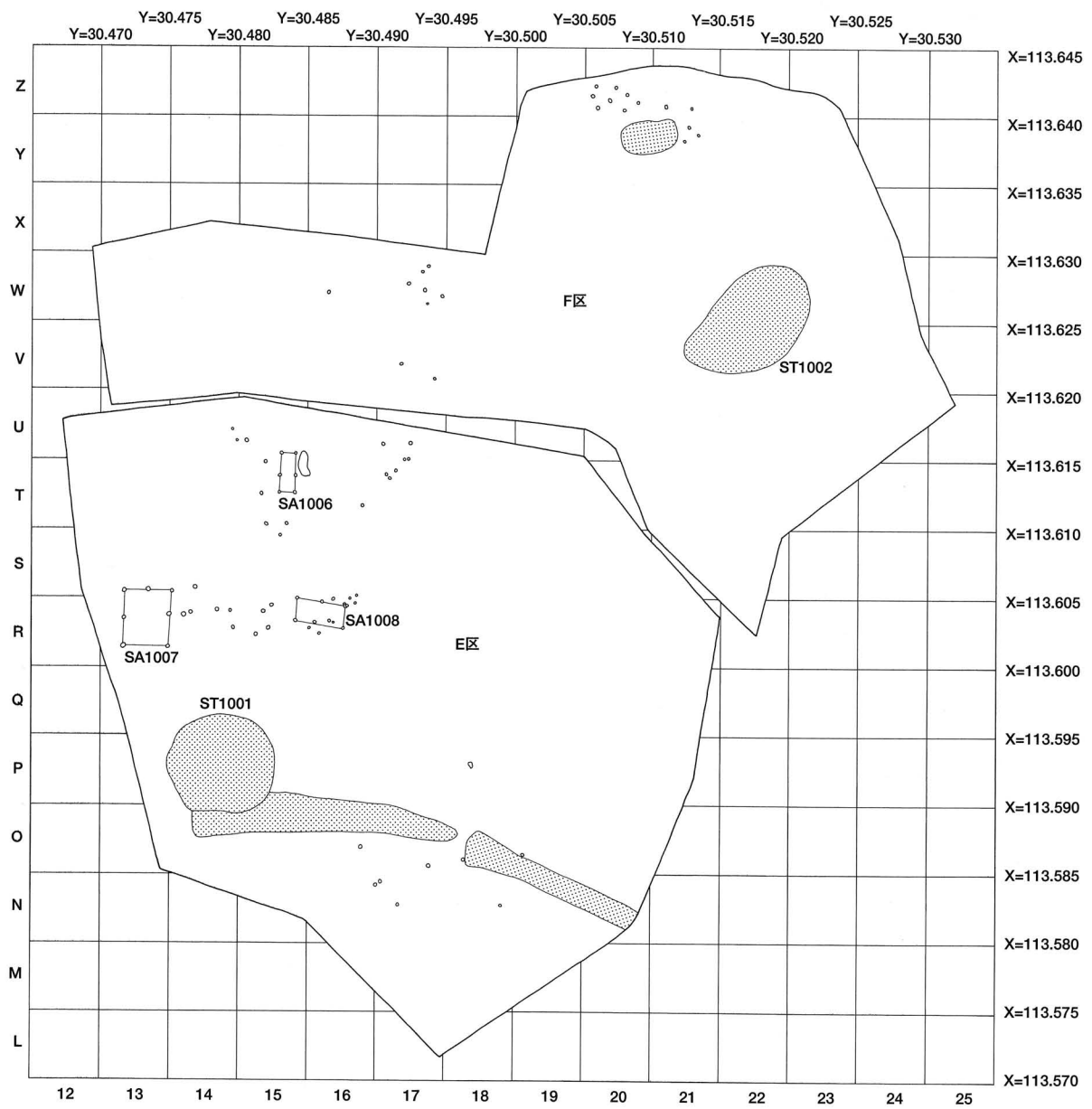
第3図 基本土層柱状図



第4図 お塚古墳A・B区遺構配置図



第5図 お塚古墳C・D区遺構配置図



第6図 お塚古墳E・F区遺構配置図

(2) 遺構と遺物

この項では遺構の種類ごとに説明を加えていくが、確認された遺構の所属年代において大きく古代・中世と近世に属する2時期がみられたため時代順にふれていく。また、1種類の遺構についてはA区からF区の順にみていくことにする。

古代

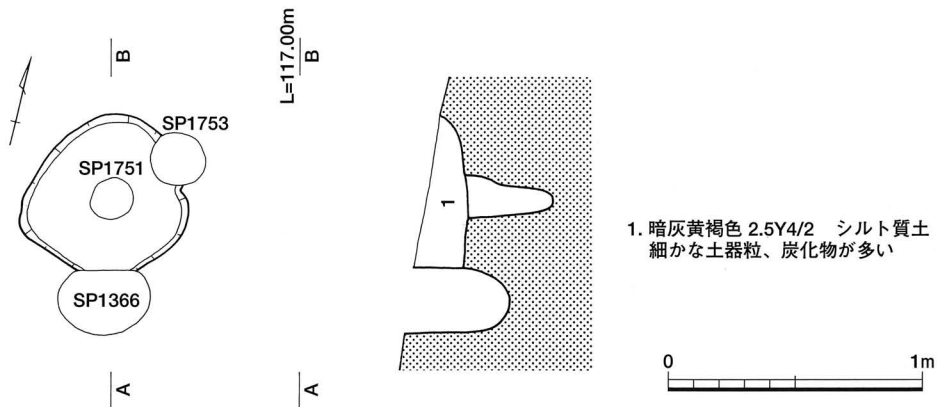
土坑 (SK)

12号土坑 (SK1012) (第7・8図)

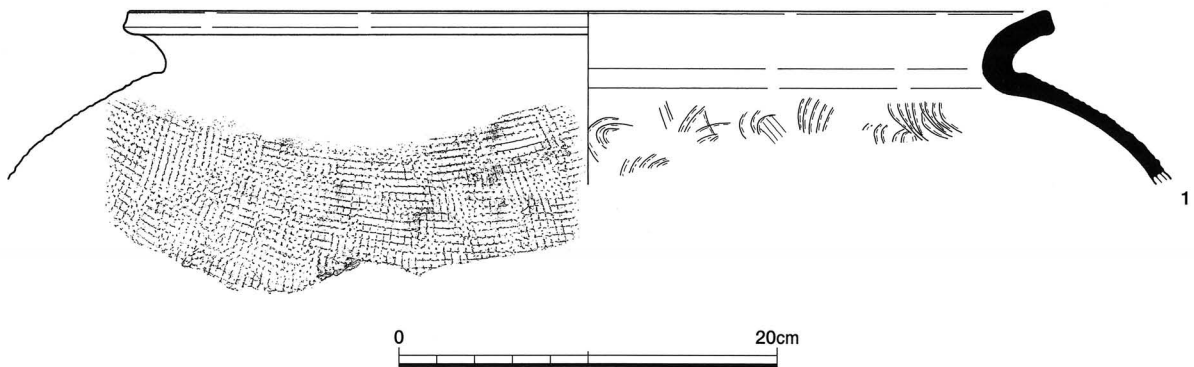
D区のほぼ中央に位置する。検出グリッドはO-9・10グリッドである。遺構の中央でSP1751を切り、遺構の南側でSP1366に、遺構の北側でSP1753に切られる。遺構平面形状は不整形円形を呈し、遺構断面形状は浅い逆台形を呈する。遺構規模は長軸0.67m、短軸0.60m、深さ0.14mを測る。遺構埋土は暗灰黄褐色を呈するシルト質土が堆積する単一層である。埋土中には炭化物を多く含むほか、土器の細片や地山礫をやや含む。

1は須恵器の甕である。

遺構の時期は13世紀後半頃と思われる。



第7図 D区SK1012平・断面図



第8図 D区SK1012出土土器

中世

掘立柱建物跡 (SA)

1号掘立柱建物跡 (SA1001) (第9図)

B区の南西側に位置する。検出グリッドはE・F-5・6グリッドである。南東から北西に向けての緩やかな下り傾斜地に立地する。遺構の規模は桁行2間(385cm)×梁間1間(205cm)を測る側柱式である。主軸はN-33°-Wを向く。柱間寸法は桁行側で192.5cm、梁間で205cmを測り、床面積は7.89m²を測る。各柱穴の平面形状は円形を呈しており、遺構断面形状はいずれも丸みをもった逆台形を呈するものが多く、一部不整形なものを含む。遺構断面の観察では柱痕跡が確認できたものはなかった。出土遺物は図化できるものはなかった。

1号柵列 (SG1001) (第10図)

B区の北側に位置する。検出グリッドはI~K-5~8グリッドである。当初掘立柱建物跡の南辺であり建物部分は北側の調査区外へ続くものと考えられていたが、8間と間数が多く柱間寸法が短く一定していないことから柵列とした。全長15m、柱間寸法は115cm~230cmを測る。各柱穴の平面形状は円形を呈しており、遺構断面形状はいずれも丸みをもった逆台形を呈するものが多く、一部不整形なものを含む。遺構断面の観察では柱痕跡が確認できたものはなかった。出土遺物は図化できるものはなかった。

2号掘立柱建物跡 (SA1002) (第11図)

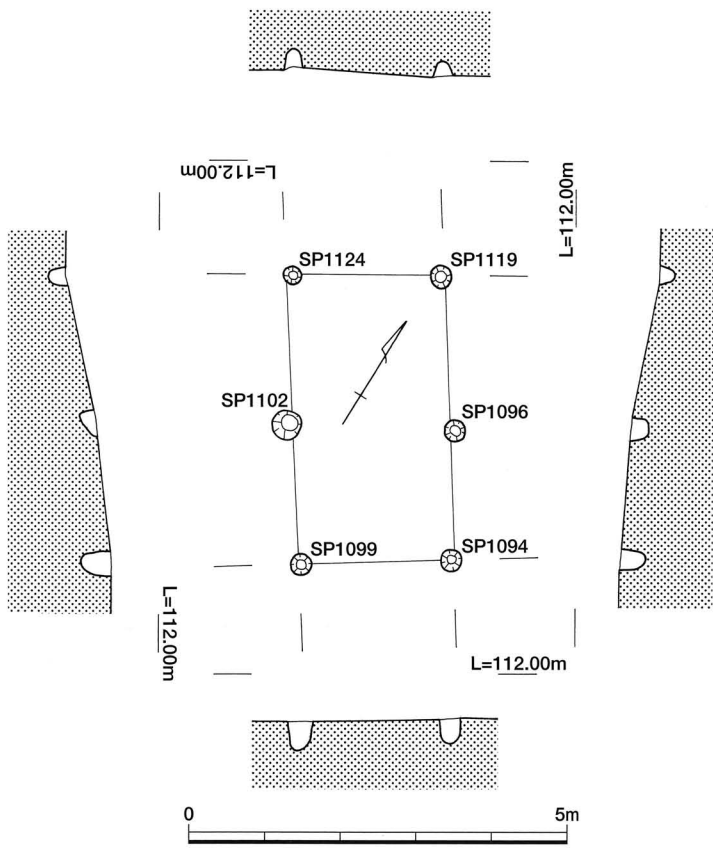
C区の北東側に位置する。検出グリッドはL・M-14グリッドである。南から北に向けての緩やかな下り傾斜地に立地する。遺構の規模は桁行2間(410cm)×梁間1間(190cm)を測る側柱式であるが、北西側に若干ゆがむ。主軸はN-2°-Wを向く。柱間寸法は桁行側で205cm、梁間で190cmを測り、床面積は7.79m²を測る。各柱穴の平面形状は一部楕円形を呈するものを含むが、多くは円形を呈しており、遺構断面形状は逆台形を呈するものが主体となる。遺構断面の観察では柱痕跡が確認できたものはなかった。

出土遺物は図化できるものはなかった。

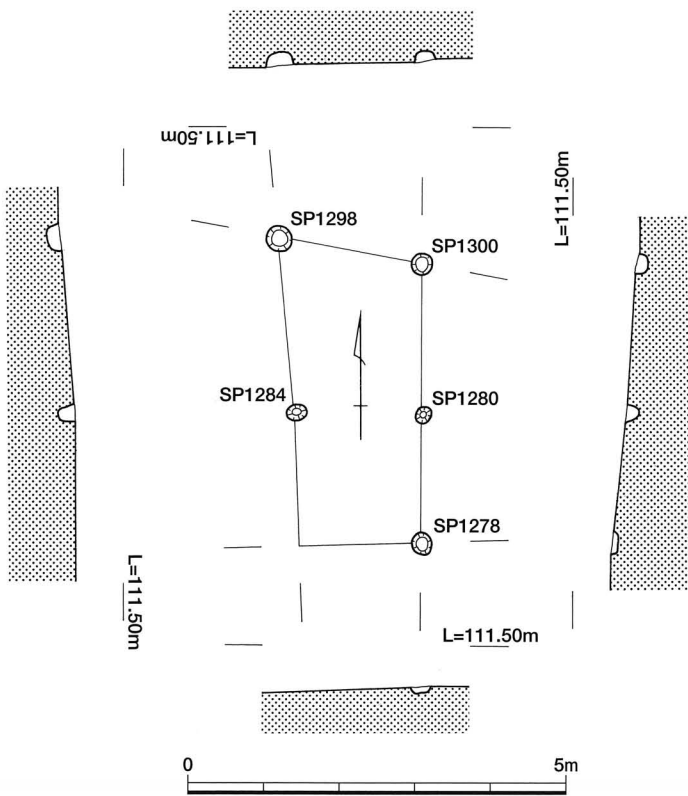
3号掘立柱建物跡 (SA1003) (第12・13図)

D区の南側に位置する。検出グリッドはN・O-10・11グリッドである。南から北に向けての緩やかな下り傾斜地に立地する。遺構の規模は桁行2間(335cm)×梁間2間(230cm)を測る総柱式であるが、南東側が若干ゆがむ。主軸はN-2°-Eを向く。柱間寸法は桁行側で167.5cm、梁間で115cmを測り、床面積は7.71m²を測る。各柱穴の平面形状は一部楕円形および方形を呈するものを含むが、多くは円形を呈しており、遺構断面形状は逆台形または船底形を呈するものが主体となる。遺構断面の観察では柱痕跡が確認できたものはなかった。

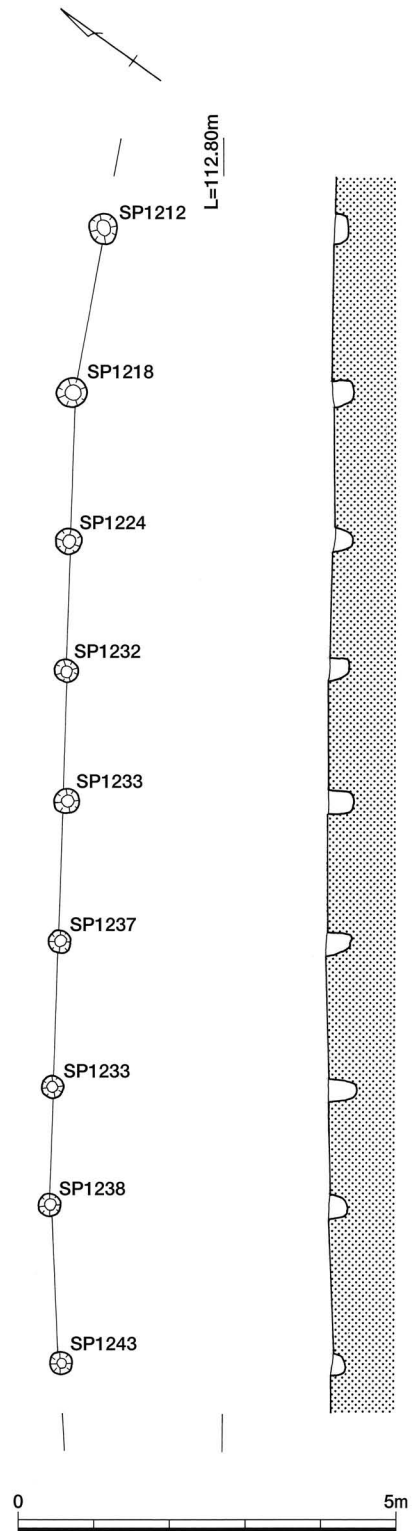
出土遺物は2がSP1393から出土した土師器の羽釜である。3がSP1384から出土した土師器の羽釜である。4がSP1383から出土した土師器羽釜の脚部である。5がSP1374から出土した須恵器甕の胴部片



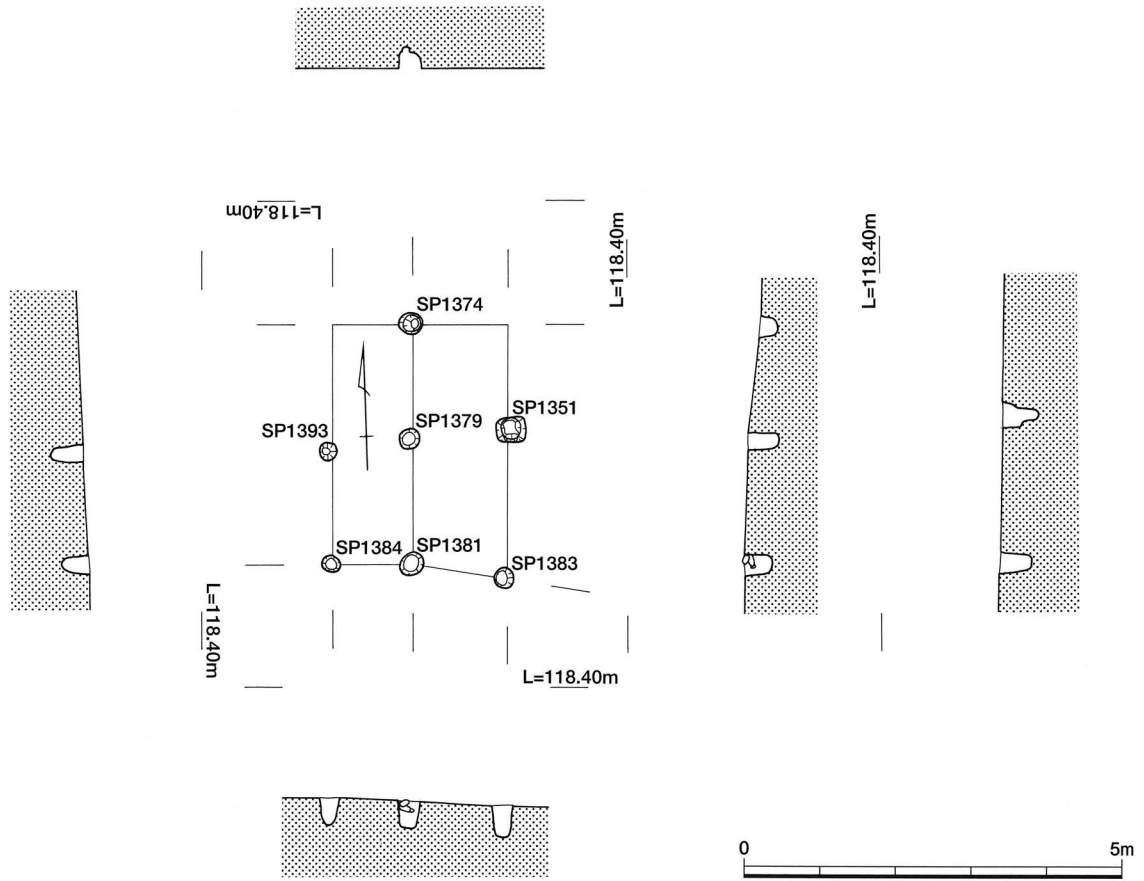
第9图 B区SA1001平·断面图



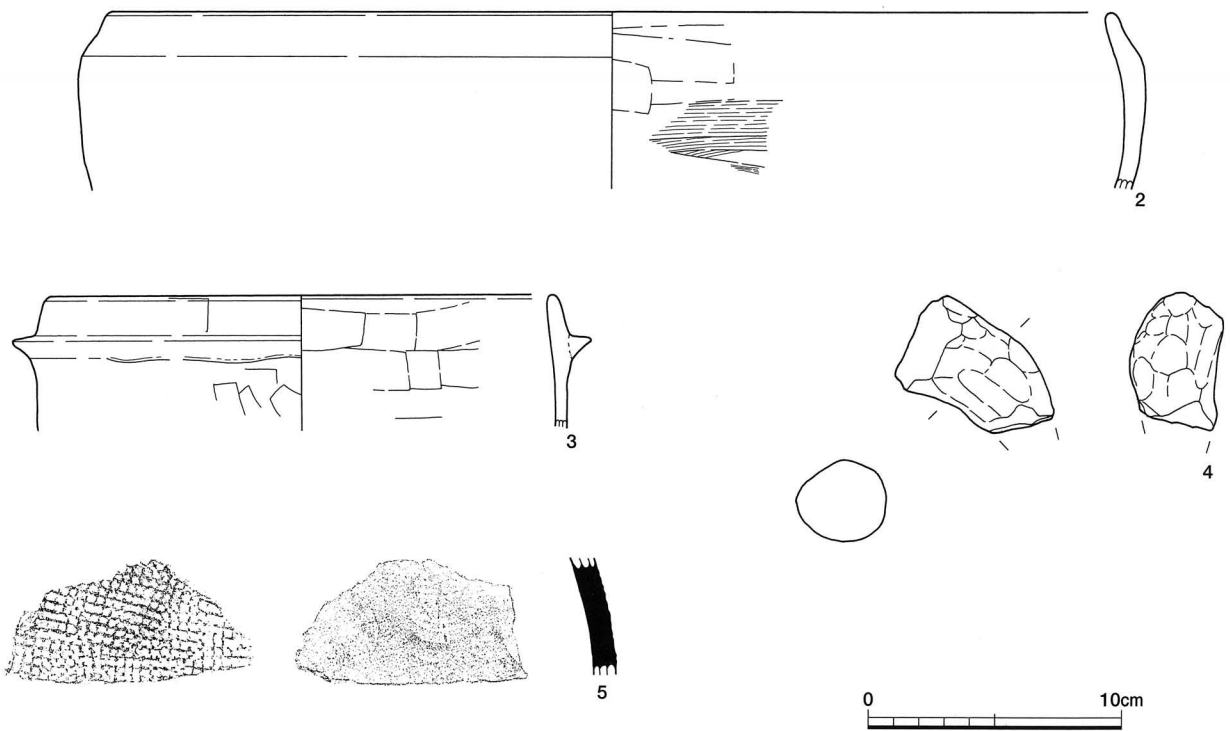
第11图 C区SA1002平·断面图



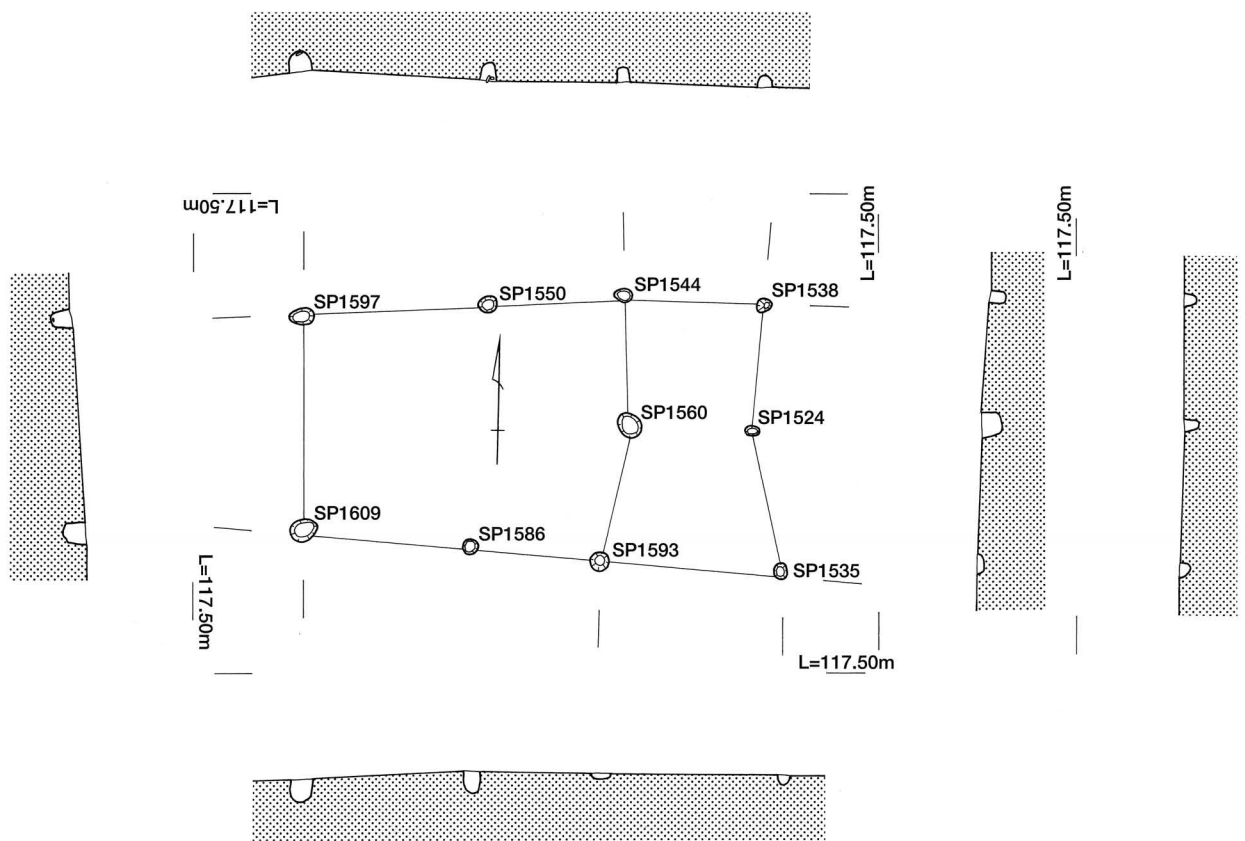
第10图 B区SG1001平·断面图



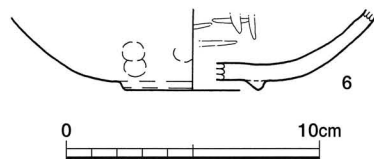
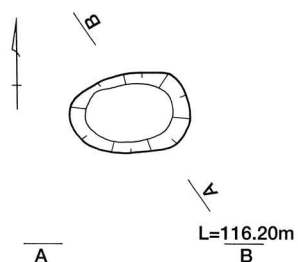
第12图 D区SA1003平·断面图



第13图 D区SA1003出土土器



第14図 D区SA1004平・断面図

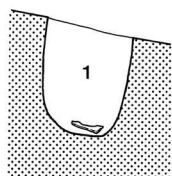


第16図 D区SP1597出土土器

である。

遺構の時期は、15世紀末～16世紀にかけてと思われる。

4号掘立柱建物跡 (SA1004)
(第14・16図)



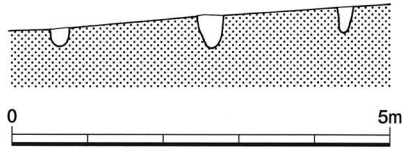
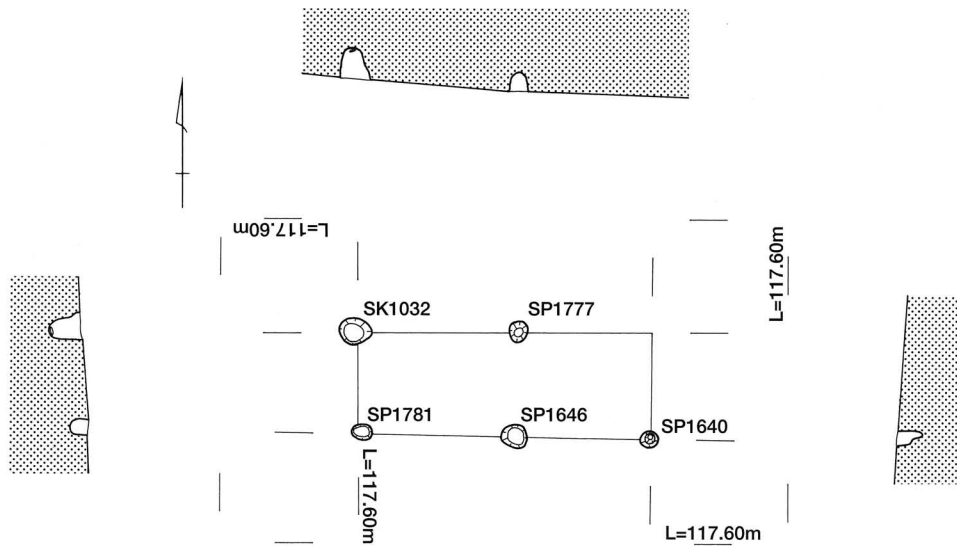
1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土炭化物、φ1.5～2cmの礫多し



第15図 D区SP1597平・断面図

D区の北西側に位置する。検出グリッドはP-8・9グリッドである。南東から北西に向けての緩やかな下り傾斜地に立地する。遺構の規模は桁行3間(620cm)×梁間2間(325cm)を測る側柱式であるが、全体的にいびつな形状を呈する。主軸はN-88°-Wを向く。柱間寸法は桁行側で206.7cm、梁間で162.5cmを測り、床面積は20.15m²を測る。各柱穴の平面形状は一部楕円形を呈するものを含むが、多くは円形を呈しており、遺構断面形状は逆台形を呈するものが主体となる。遺構断面の観察では柱痕跡が確認できたものはなかった。

出土遺物はSP1597の底付近から6の瓦器碗が出土している。遺構の時期は、出土遺物から13世紀後半頃と思われる。



第17図 D区SA1005平・断面図



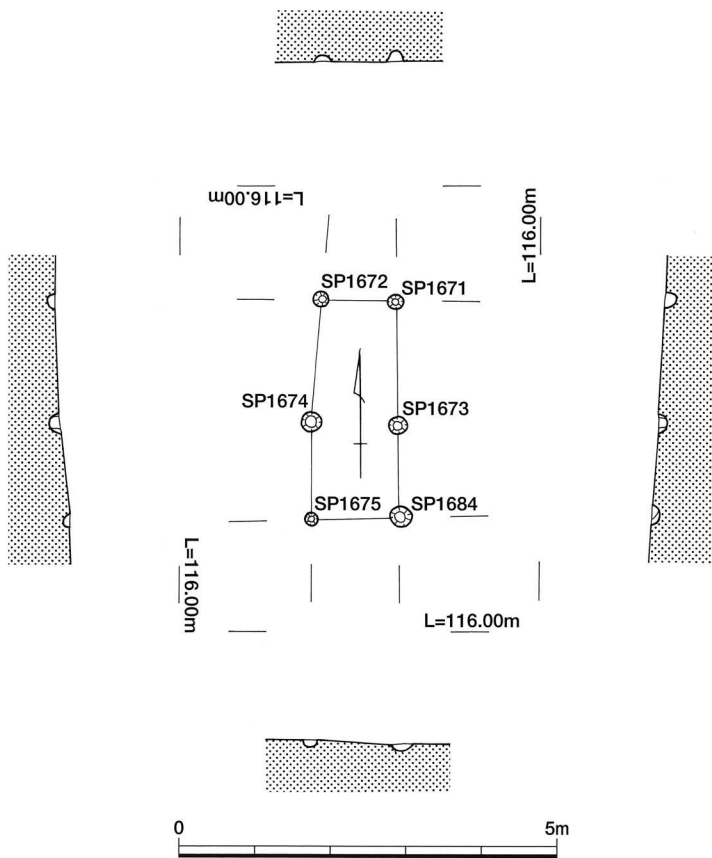
第18図 D区SA1005出土土器

5号掘立柱建物跡 (SA1005)

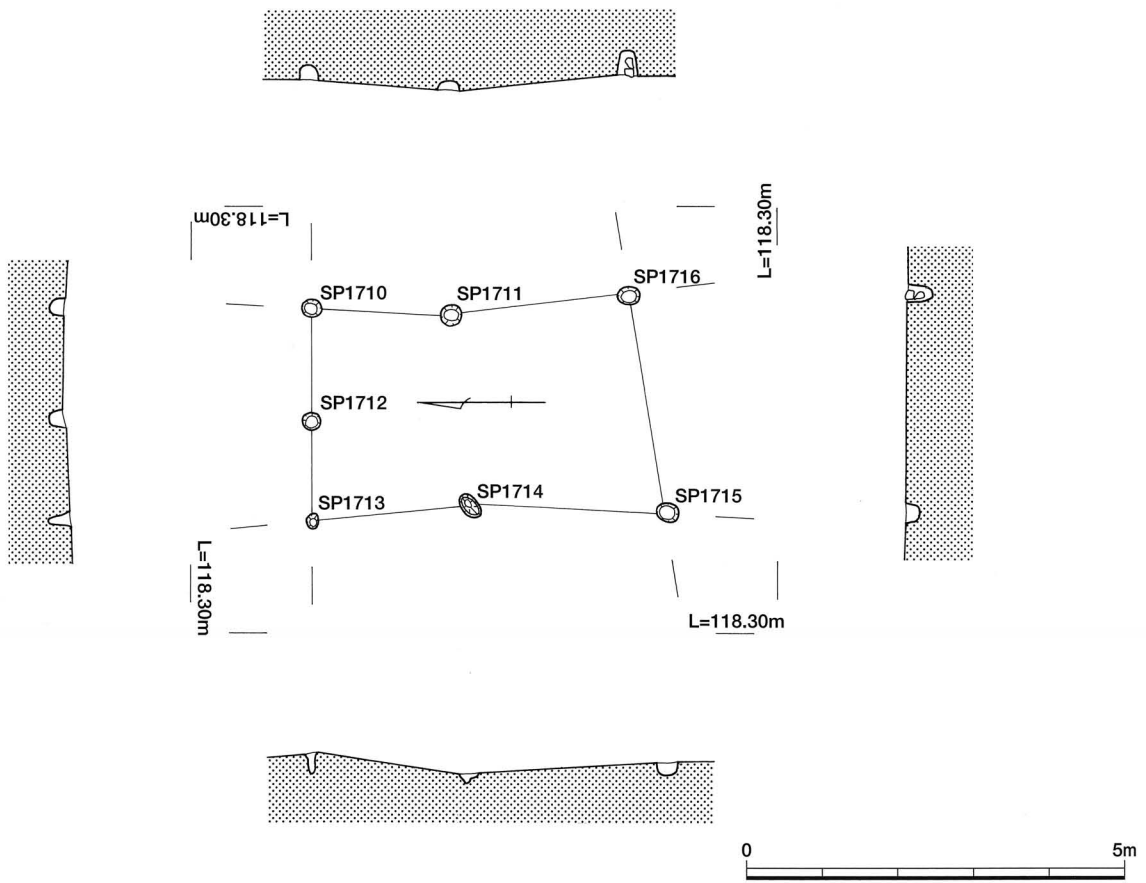
(第17・18図)

D区の北西側に位置する。検出グリッドはO・P-7グリッドである。南東から北西に向けての緩やかな下り傾斜地に立地する。遺構の規模は桁行2間(390cm)×梁間1間(140cm)を測る側柱式である。主軸はN-90°-Eを向く。柱間寸法は桁行側で195cm、梁間で140cmを測り、床面積は5.46m²を測る。各柱穴の平面形状は一部楕円形を呈するものを含むが、多くは円形を呈しており、遺構断面形状はややいびつなものの逆台形を呈するものが主体となる。遺構断面の観察では柱痕跡が確認できたものはなかった。

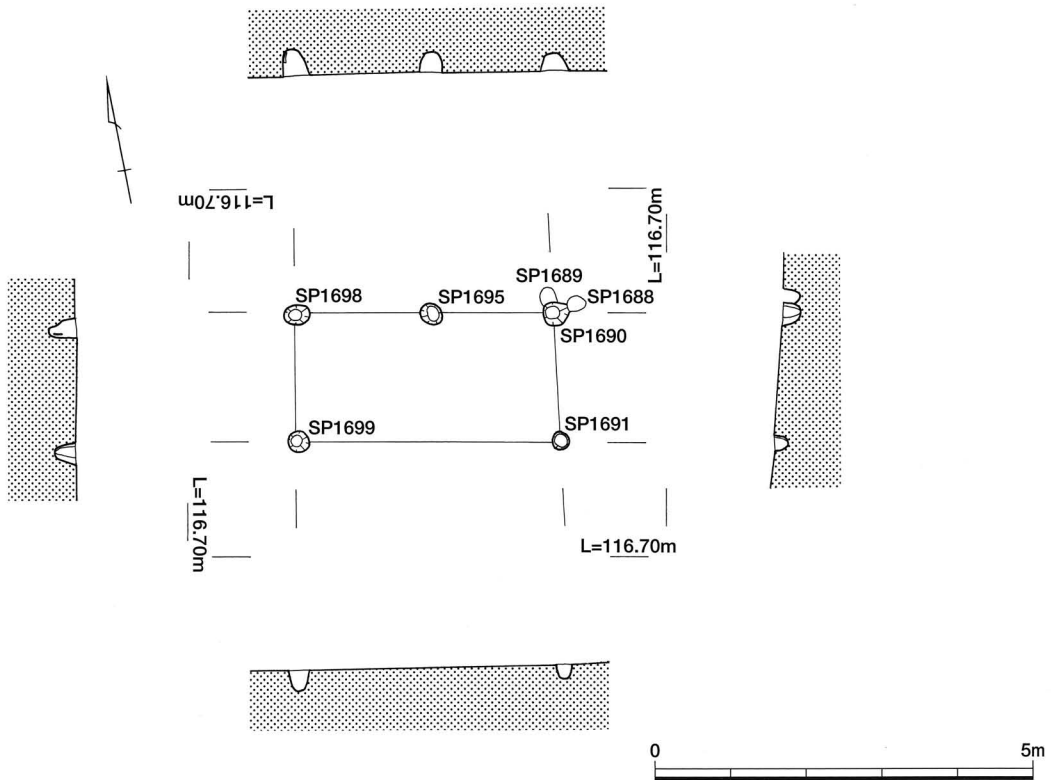
出土遺物は7が土師器の杯である。



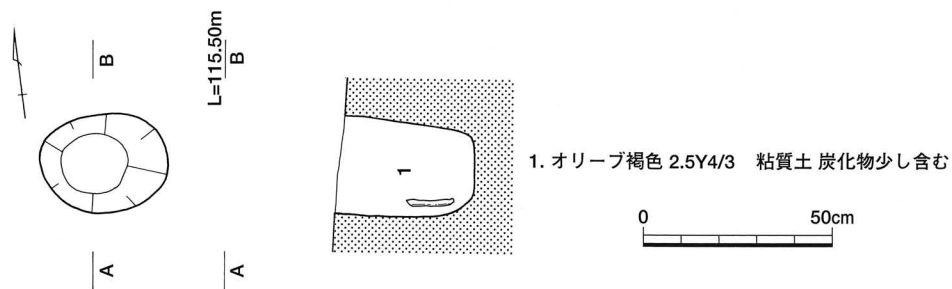
第19図 E区SA1006平・断面図



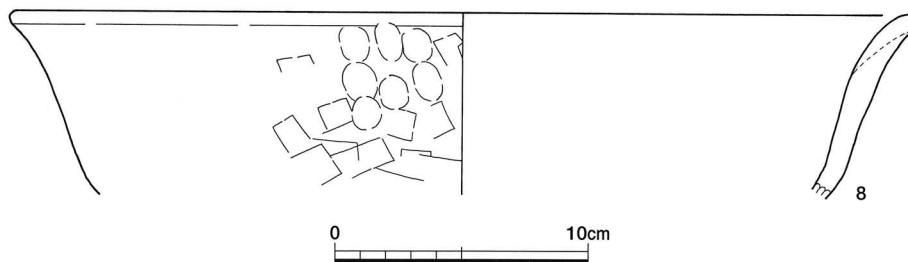
第20图 E区SA1007平·断面图



第21图 E区SA1008平·断面图



第22図 E区SP1698平・断面図



第23図 E区SP1698出土土器

6号掘立柱建物跡 (SA1006) (第19図)

E区の北西側に位置する。検出グリッドはT・U-15グリッドである。南から北に向けての緩やかな下り傾斜地に立地する。遺構の規模は桁行2間(290cm)×梁間1間(110cm)を測る側柱式であるが、北西側が東に若干ゆがむ。主軸はN-2°-Eを向く。柱間寸法は桁行側で145cm、梁間で110cmを測り、床面積は3.19m²を測る。各柱穴の平面形状は円形を呈しており、遺構断面形状は船底形を呈するものが主体となる。遺構断面の観察ではSP1673、1674において柱痕跡が確認できた。

出土遺物は図化できるものはなかった。

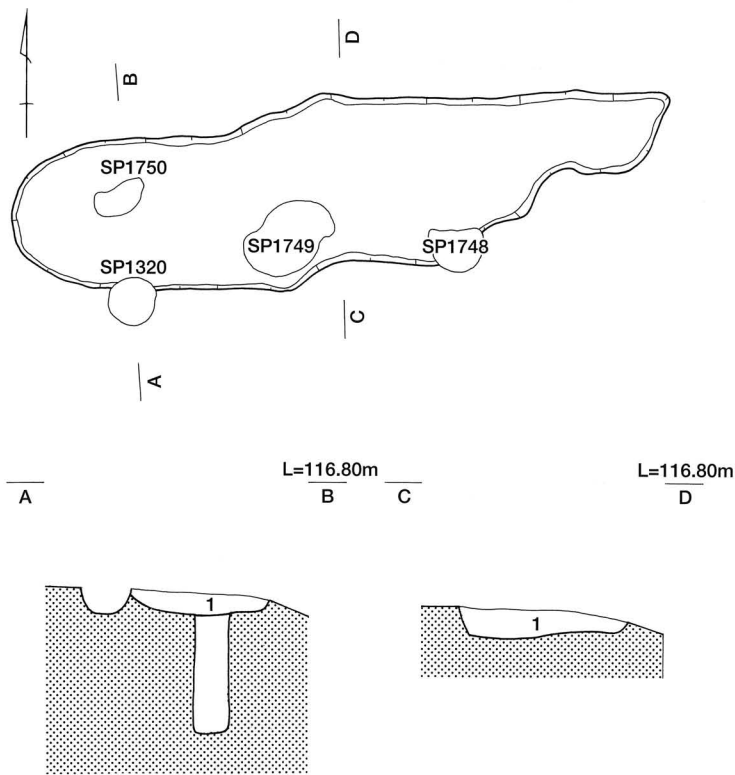
7号掘立柱建物跡 (SA1007) (第20図)

E区の西側に位置する。検出グリッドはR・S-13・14グリッドである。多少遺構検出面が削平を受けているものの、ほぼ平坦地に立地する。遺構の規模は桁行2間(442cm)×梁間2間(290cm)を測る側柱式である。主軸はN-2°-Wを向く。柱間寸法は桁行側で221cm、梁間で145cmを測り、床面積は12.82m²を測る。各柱穴の平面形状は一部楕円形を呈するものを含むが、多くは円形を呈しており、遺構断面形状は逆台形を呈するものが主体となる。遺構断面の観察では柱痕跡が確認できたものはなかった。

出土遺物は図化できるものはなかった。

8号掘立柱建物跡 (SA1008) (第21～23図)

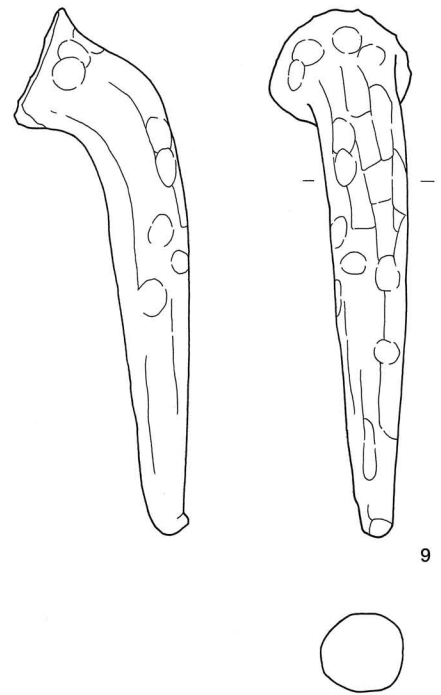
E区の中央やや西寄りに位置する。検出グリッドはR・S-15・16グリッドである。遺構の規模は桁行2間(345cm)×梁間1間(170cm)を測る側柱式である。主軸はN-79°-Wを向く。柱間寸法は桁行側で172.5cm、梁間で170cmを測り、床面積は5.87m²を測る。各柱穴の平面形状は一部楕円形を呈するものを含むが、多くは円形を呈しており、遺構断面形状は逆台形を呈するものが主体となる。遺構



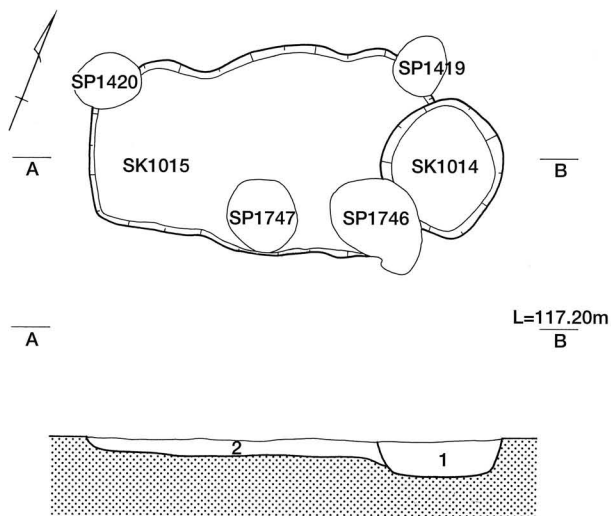
1. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルト質土 炭化物多し



第24図 D区SK1011平・断面図



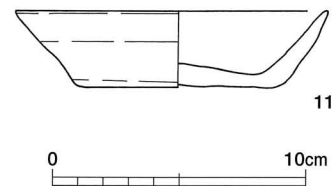
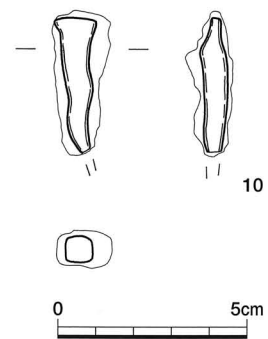
第25図 D区SK1011出土土器



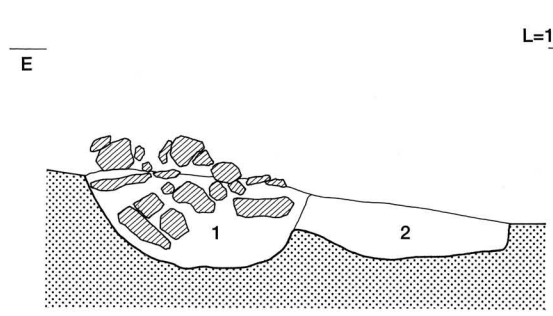
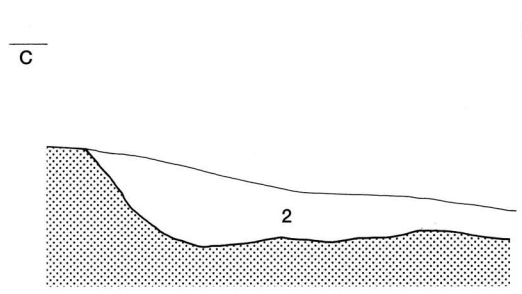
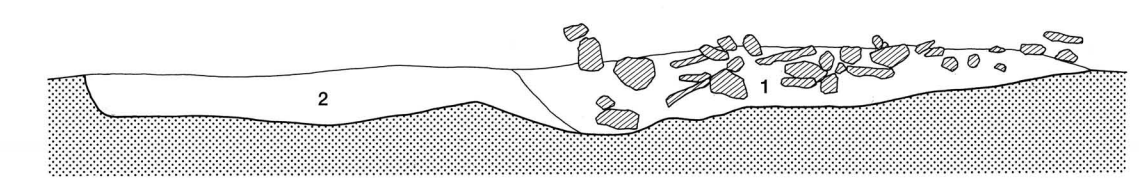
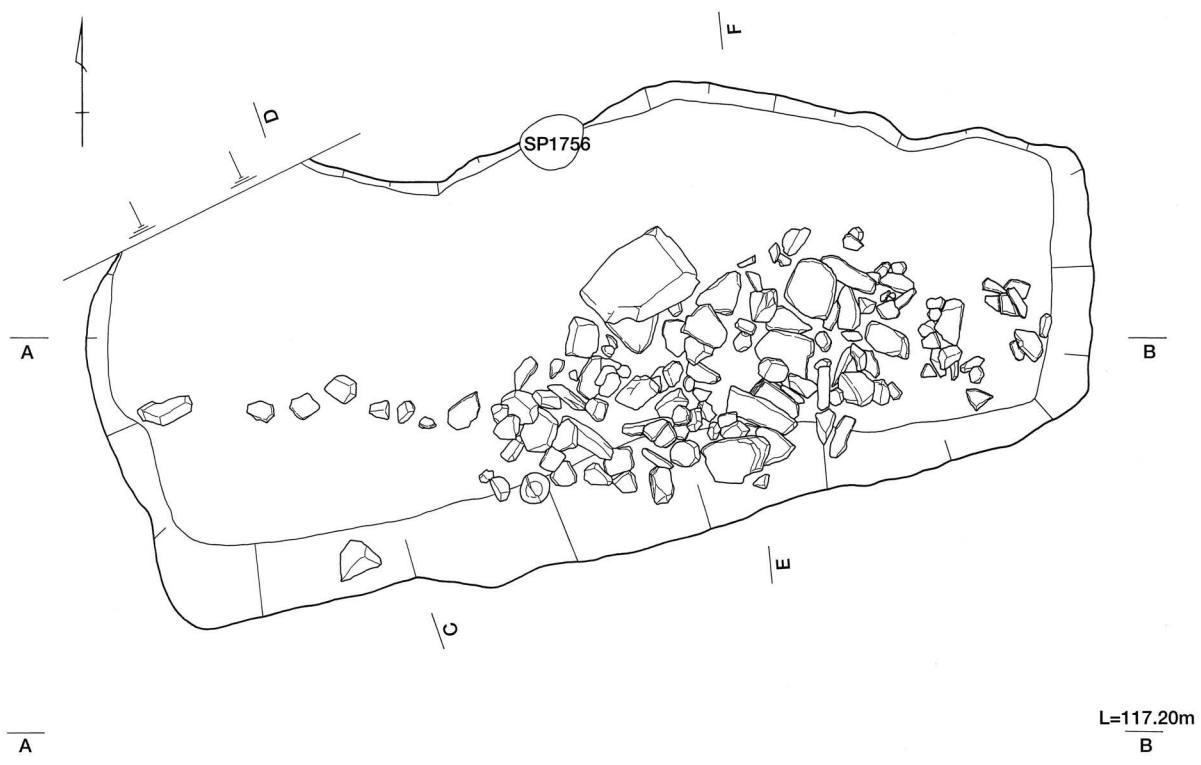
1. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土 炭化物多し
 2. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 土器粒、マンガ、炭化物を多く含む



第26図 D区SK1014・1015平・断面図



第27図 D区SK1014・1015出土遺物



- 1. 暗褐色 2.5Y3/2 粘質土 φ1.5cm程の炭化物と土器片を多く含む
- 2. 暗オリブ褐色 2.5Y3/3 細かな炭化物と土器粒を多く含む



第28図 D区SK1021平・断面遺物出土状況図

断面の観察ではSP1690、1699において柱痕跡が確認できた。

出土遺物はSP1698から8の土師器鍋が出土している。

土坑 (SK)

11号土坑 (SK1011) (第24・25図)

D区の東側に位置する。検出グリッドはP-10・11グリッドである。遺構の西側でSP1749、1750を切り、遺構の南側でSP1320、1748に切られる。遺構平面形状は不整形を呈し、遺構断面形状は浅い逆台形を呈する。遺構規模は長軸2.64m、短軸0.31m、深さ0.12mを測る。

遺構埋土は暗オリーブ褐色を呈するシルト質土が堆積する単一層である。埋土中には地山礫をやや含む。9は土師器羽釜の脚である。

14号土坑 (SK1014) (第26・27図)

D区の中央やや南側に位置する。検出グリッドはO-9グリッドである。遺構の西側でSK1015を切り、遺構の南西側をSP1746に切られる。遺構平面形状は北西-南東に主軸をもつ楕円形を呈し、遺構断面形状は浅い逆台形を呈する。遺構規模は長軸0.56m、短軸0.48m、深さ0.16mを測る。

遺構埋土は暗オリーブ褐色を呈する粘質土が堆積する単一層である。埋土中には地山礫をやや含み、炭化物を多く含む。

10は鉄製の釘である。

15号土坑 (SK1015) (第26・27図)

D区の中央親や南側に位置する。検出グリッドはO-8・9グリッドである。遺構の東側をSP1419、SK1014、北西側をSP1420、南側をSP1746、1747に切られる。遺構平面形状は不整長方形を呈し、遺構断面形状は東側がやや窪む浅い逆台形を呈する。遺構規模は長軸1.18m、短軸0.66m、深さ0.12mを測る。遺構埋土はオリーブ褐色を呈する粘質土が堆積する単一層である。埋土中には炭化物を多く含む。

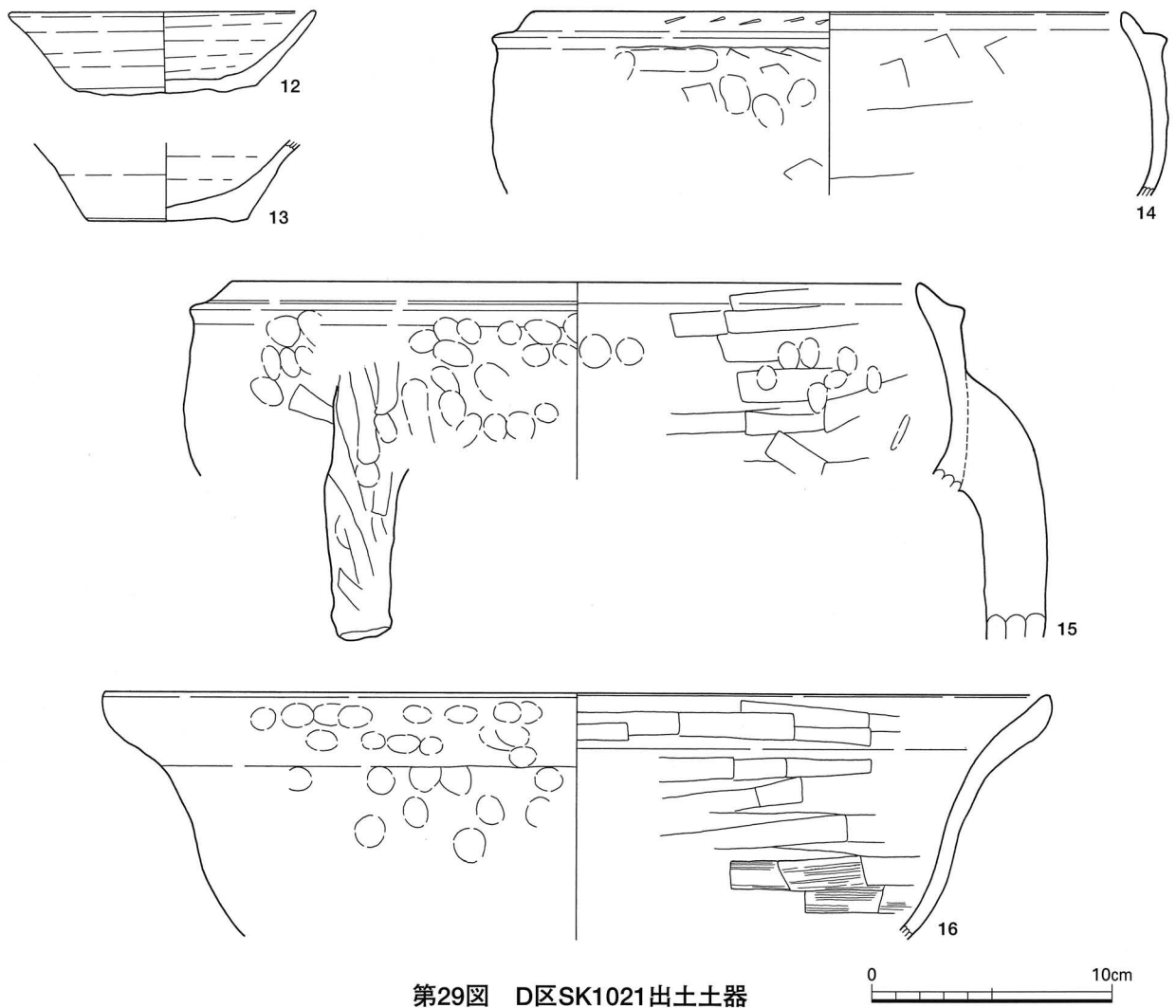
11は土師器の杯である。

21号土坑 (SK1021) (第28・29図)

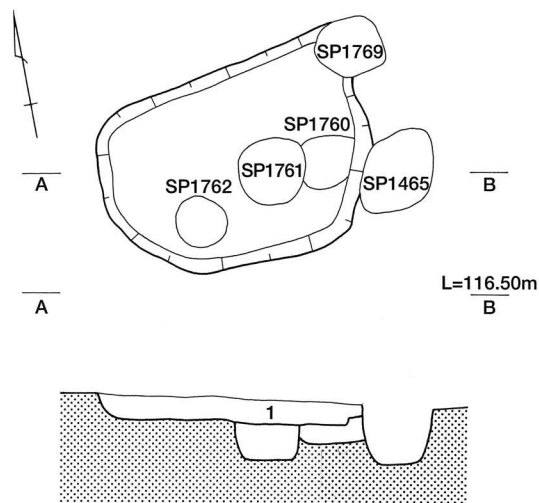
D区の西側に位置する。検出グリッドはN・O-7・8グリッドである。遺構の北西側をカクランとSP1756に切られる。遺構平面形状は不整長方形を呈し、遺構断面形状は不整逆台形もしくは不整船底形を呈する。遺構規模は長軸3.95m、短軸1.20m、深さ0.38mを測る。

遺構埋土は2層に分層することができ、色調は第1層が暗褐色を呈し、第2層が暗オリーブ褐色を呈する。いずれも粘質土が堆積しており、検出された礫群のほとんどはこの第1層に含まれる。この第1層中に含まれる礫群は遺構の南東側に集中しており、礫の大きさは8~45cm前後を測りばらつきが多いことから、大きさを揃えているようではない。使用されている石材は遺跡周辺で比較的安易に入手できる結晶片岩の岩盤礫を用いているが、遺構の底からはわずかに浮いており、なおかつ石を積み上げている様子も見られない。

出土遺物には羽釜や鍋などの煮沸具があり、後述するST1001などの副葬品の内容と共通することか



第29図 D区SK1021出土土器



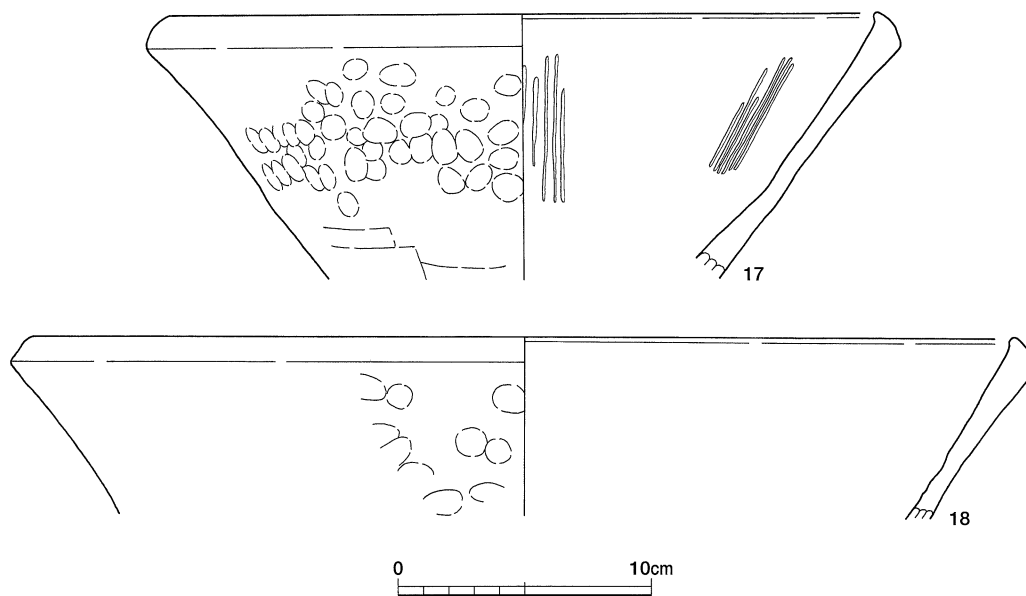
1. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質土 マンガン多く、土器片を含む

第30図 D区SK1022平・断面図

ら埋葬施設としての可能性も考えられたが、とくに礫を用いて施設を組み上げるなどの要素が確認できなかった。その上礫群が遺構内前面に広がっていることもなかったため集石遺構としても考えられなかったことから土坑として扱った。

12、13は土師器の杯である。14、15は土師器の羽釜である。16は土師器の鍋である。

遺構の時期は15世紀～16世紀頃と思われる。



第31図 D区SK1022出土土器

22号土坑 (SK1022) (第30・31図)

D区の東側に位置する。検出グリッドはP-11グリッドである。遺構の南半でSP1760、1761、1762を切り、遺構の北東側でSP1465、1769に切られる。遺構平面形状は不整長方形を呈し、遺構断面形状は浅い逆台形を呈する。遺構規模は長軸1.28m、短軸0.32m、深さ0.13mを測る。

遺構埋土はオリーブ褐色を呈する粘質土が堆積する単一層である。埋土中には地山礫をやや含む。

17、18は土師質の播り鉢である。

遺構の時期は15世紀末～16世紀初頭頃であろうと思われる。

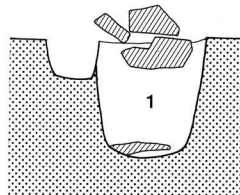
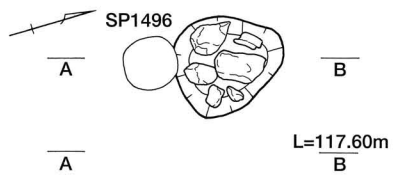
44号土坑 (SK1044) (第32・33図)

D区の中央やや北よりに位置する。検出グリッドはP-9グリッドである。遺構の南側はSP1496に切られる。遺構平面形状は円形を呈し、遺構断面形状は逆台形を呈する。遺構規模は長軸0.42m、短軸0.36m、深さ0.48mを測る。

遺構埋土は暗オリーブ褐色を呈する粘質土が堆積する単一層である。

遺構底部には板石がほぼ水平を保って置かれており、かつ遺構上面には拳大～人頭大の角礫が配される。これら遺構上面の角礫は、大きめの礫が中央から西側にかけてあり小振りな礫はその周辺に配されている。このことから何らかの祭祀あるいは埋納行為があった可能性が考えられるが、判断できなかった。

19は土師器の茶釜である。



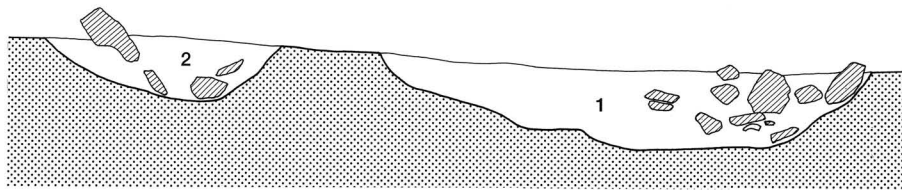
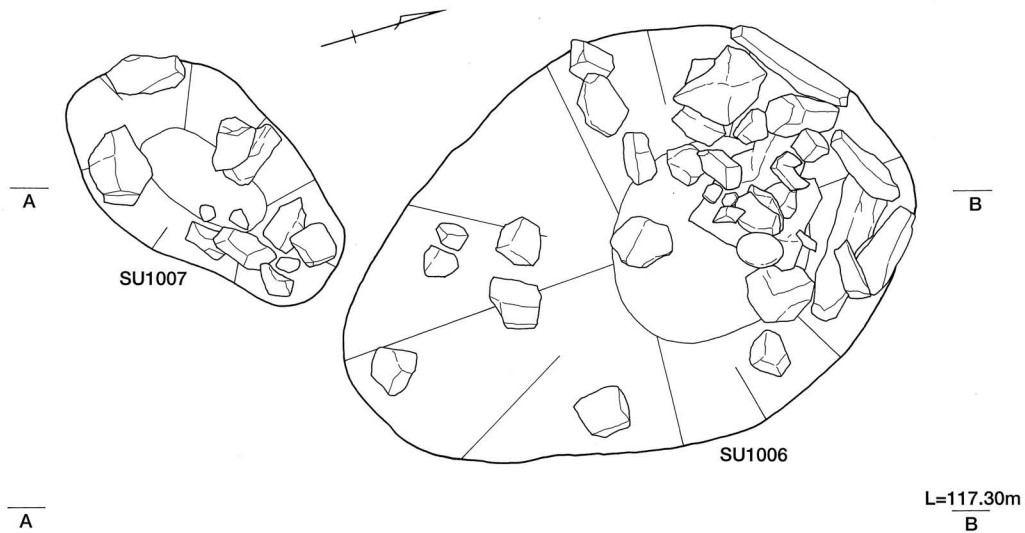
1. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質土
石英の小礫やその他の礫を多く含む



第32図 D区SK1044平・断面遺物出土状況図



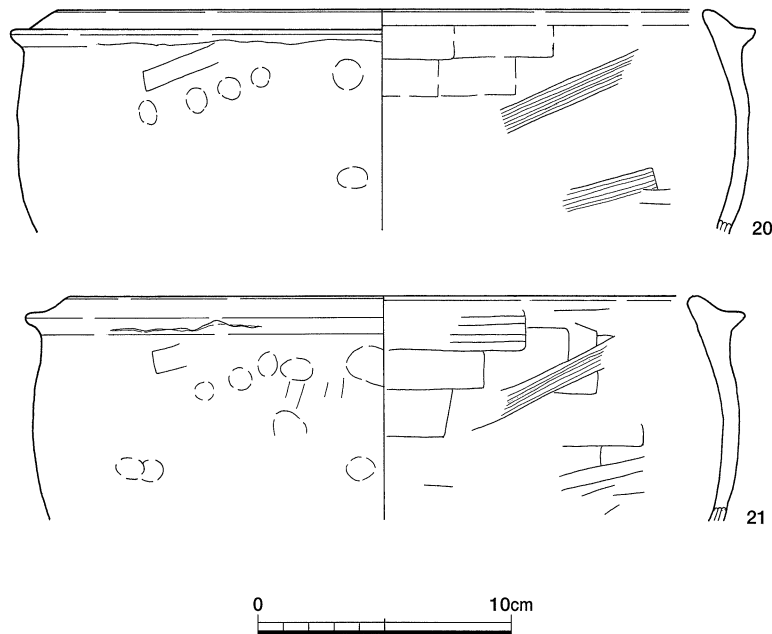
第33図 D区SK1044出土土器



1. 暗灰黄色 2.5Y4/2 粘質土 炭化物多し
2. 暗灰黄色 2.5Y4/2 炭化物を極少量含む



第34図 D区SU1006・1007平・断面遺物出土状況図



第35図 D区SU1006出土土器

集石遺構 (SU)

6号集石遺構 (SU1006) (第34・35図)

D区のほぼ中央に位置する。検出グリッドはO-8・9グリッドである。SU1007の北東側にあり、両者の位置関係は、水平距離で0.12mと非常に近い。遺構平面形状は楕円形を呈し、遺構断面形状は不整船底形を呈する。遺構規模は長軸2.38m、短軸1.56m、深さ0.40mを測り、南北に長軸をもつ。

遺構埋土は暗灰黄色を呈する粘質土が堆積する単一層である。埋土内には拳大～人頭大の角礫が出土しており、これらの礫は若干北側に偏重する。何らかの埋納行為があった可能性が考えられるが、判断できなかった。

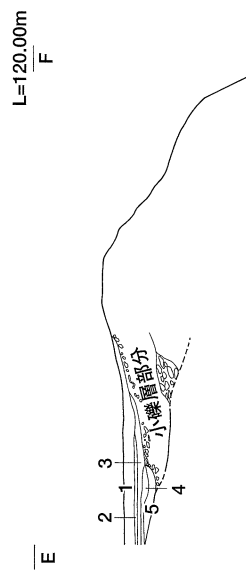
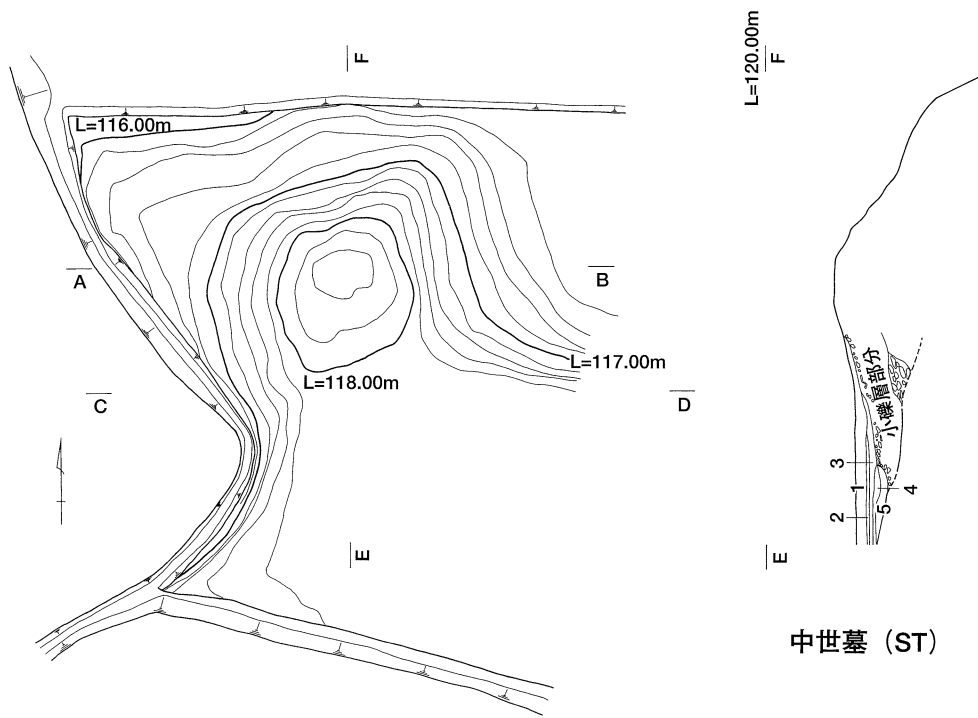
20、21は土師器の羽釜である。

遺構の時期は15世紀後半頃～16世紀代と思われる。

7号集石遺構 (SU1007) (第34図)

D区のほぼ中央に位置する。検出グリッドはO-8・9グリッドである。SU1006の南西側にあり、両者の位置関係は、水平距離で0.12mと非常に近い。遺構平面形状は楕円形を呈し、遺構断面形状は不整船底形を呈する。遺構規模は長軸1.26m、短軸0.54m、深さ0.27mを測り、北東-南西に長軸をもつ。

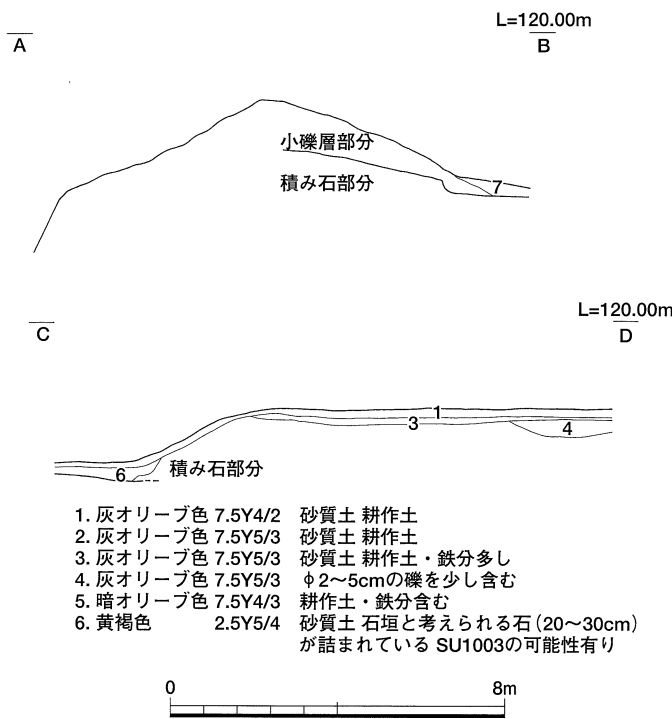
遺構埋土は暗灰黄色を呈する粘質土が堆積する単一層である。埋土内には拳大～人頭大の角礫がほぼ遺構全体から出土しており、大きめの礫が遺構の南西側に、小振りな礫が遺構の北東側に偏重する。これらの状況から何らかの埋納行為があった可能性が考えられるが、判断できなかった。



中世墓 (ST)

1号中世墓 (ST1001) (第36~45図)

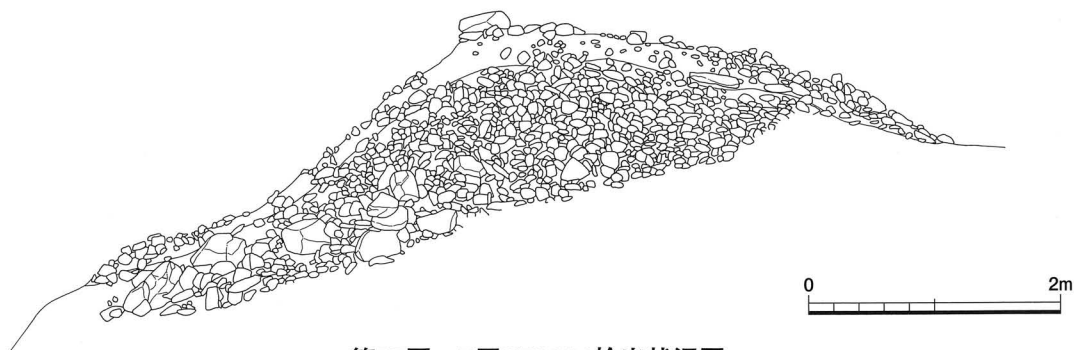
E区の南西側に位置する。検出グリッドはO~Q-13~15グリッドである。古来、地元の住民から「お塚さん」とよび慣わされ信仰の対象となってきた2基の塚であり、調査時には便宜上1号塚・2号塚と仮称していた。ここでは、まずそのうちの1号塚についてふれていくことにする。遺構は標高116m~117.5mを測る緩やかな傾斜地に築造されており、直径9.8m、比高差は約3mほどである。塚の上面は大小様々な大きさの礫を積み上げることなく無造作に盛り上げられ、被覆されていた。そのため裾の特定は困難であったが、礫が散布する範囲を遺構の範囲として捉えることにした。



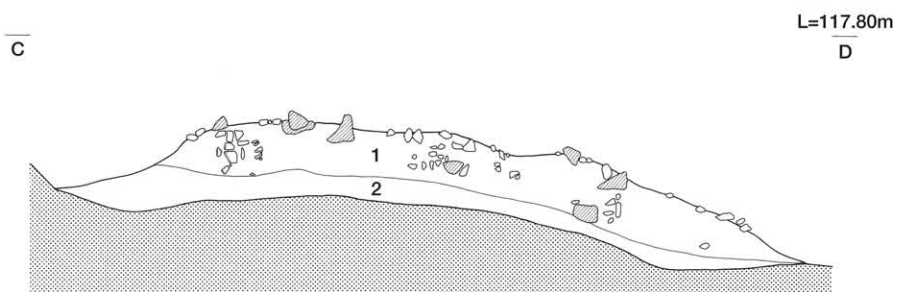
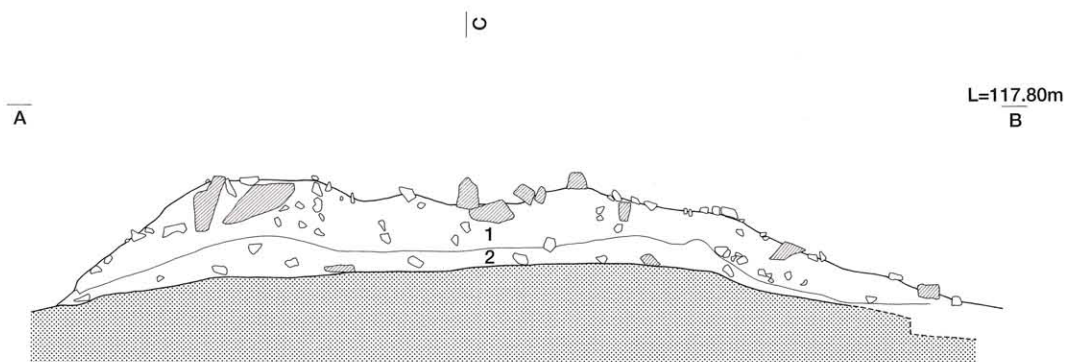
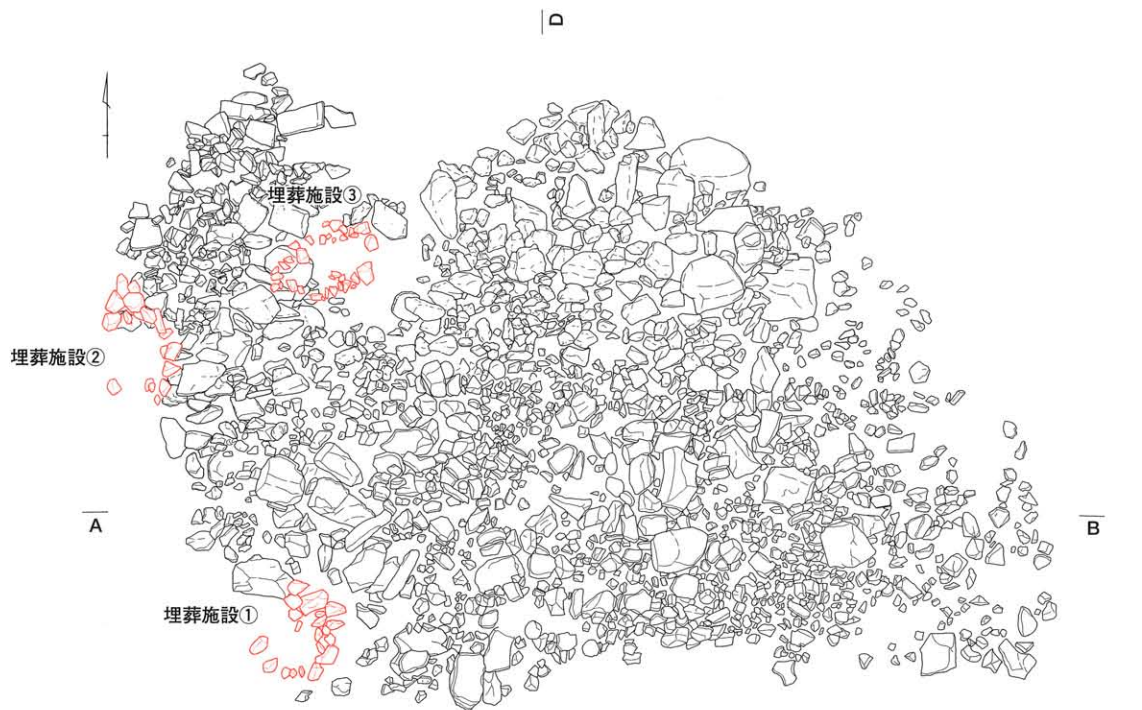
- 1. 灰オリーブ色 7.5Y4/2 砂質土 耕作土
- 2. 灰オリーブ色 7.5Y5/3 砂質土 耕作土
- 3. 灰オリーブ色 7.5Y5/3 砂質土 耕作土・鉄分多し
- 4. 灰オリーブ色 7.5Y5/3 φ2~5cmの礫を少し含む
- 5. 暗オリーブ色 7.5Y4/3 耕作土・鉄分含む
- 6. 黄褐色 2.5Y5/4 砂質土 石垣と考えられる石(20~30cm)が詰まれている SU1003の可能性有り

第36図 E区ST1001平・断面図

この礫に被覆された第1層を除去すると、とくに目立った配列や区画はないが30~40cm大の大型礫を用いてある程度塚としての範囲をつくり出している。これらの大型礫は一度大まかに地山を削り出したのちに整地し、さらにその上にオリーブ褐色を呈する粘質土を敷き詰め、そこに置かれている。よって築造前には位置の選定や範囲の特定が行われ、計画的に築造されたものと思われる。そこには3基の埋葬施設が分散した配置で確認できた。以下埋葬施設を個別にみていくことにする。



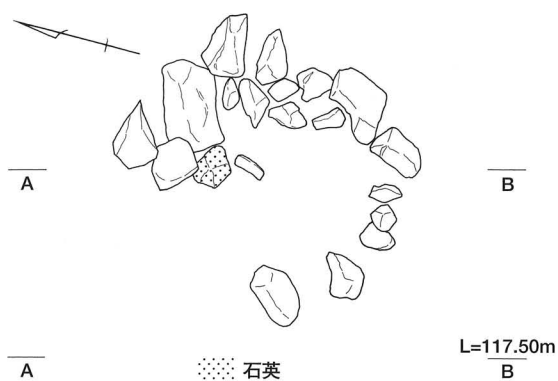
第37図 E区ST1001検出状況図



- 1. オリーブ褐色 2.5Y4/6 粘質土 土器片を多く含む
- 2. 黄褐色 10YR5/6 粘質土 φ5~7cmの砂岩が混じる 山面形成のための敷き土と思われる



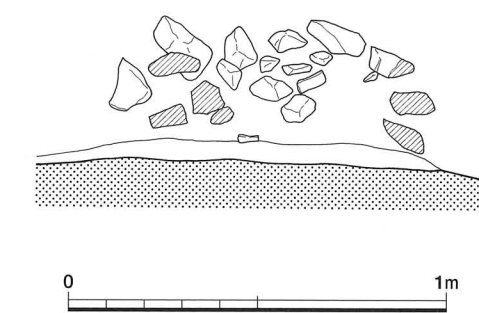
第38図 E区ST1001平・断面遺物出土状況図



第39図 E区ST1001埋葬施設①平・断面遺物出土状況図



第40図 E区ST1001埋葬施設②平・断面遺物出土状況図



第41図 E区ST1001埋葬施設③平・断面遺物出土状況図

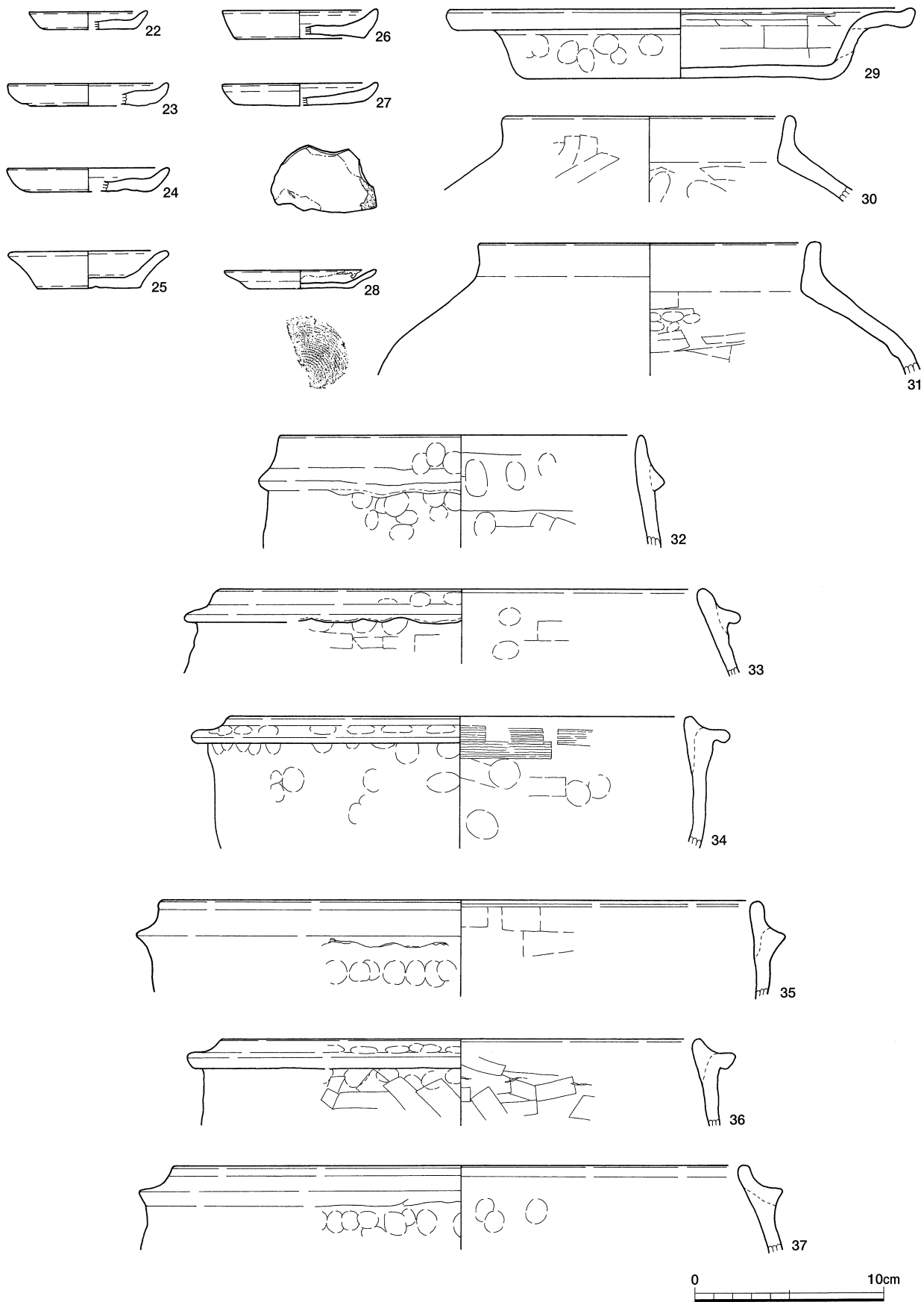
1号埋葬施設（第39図）

1号塚の南西側に位置する。検出グリッドはP-14グリッドである。塚の範囲の中でも比較的平坦な部分に占地しており、一度地山を削り褐色を呈する砂質土を浅く盛り土したのち10~30cm大を測る岩盤礫（結晶片岩）を積み上げ、一部が途切れるもののほぼ円形に礫を配して囲みをつくり出している。石積みは角礫を密に積み上げるのではなく、間に土を併用することにより積み上げている。使用している礫は北側の一辺には比較的大きな礫を用い、南にいくほど小さくなる。遺構の規模は長軸0.78m、短軸0.67m、高さ0.38mを測る。礫の中には石英礫を1点使用している。

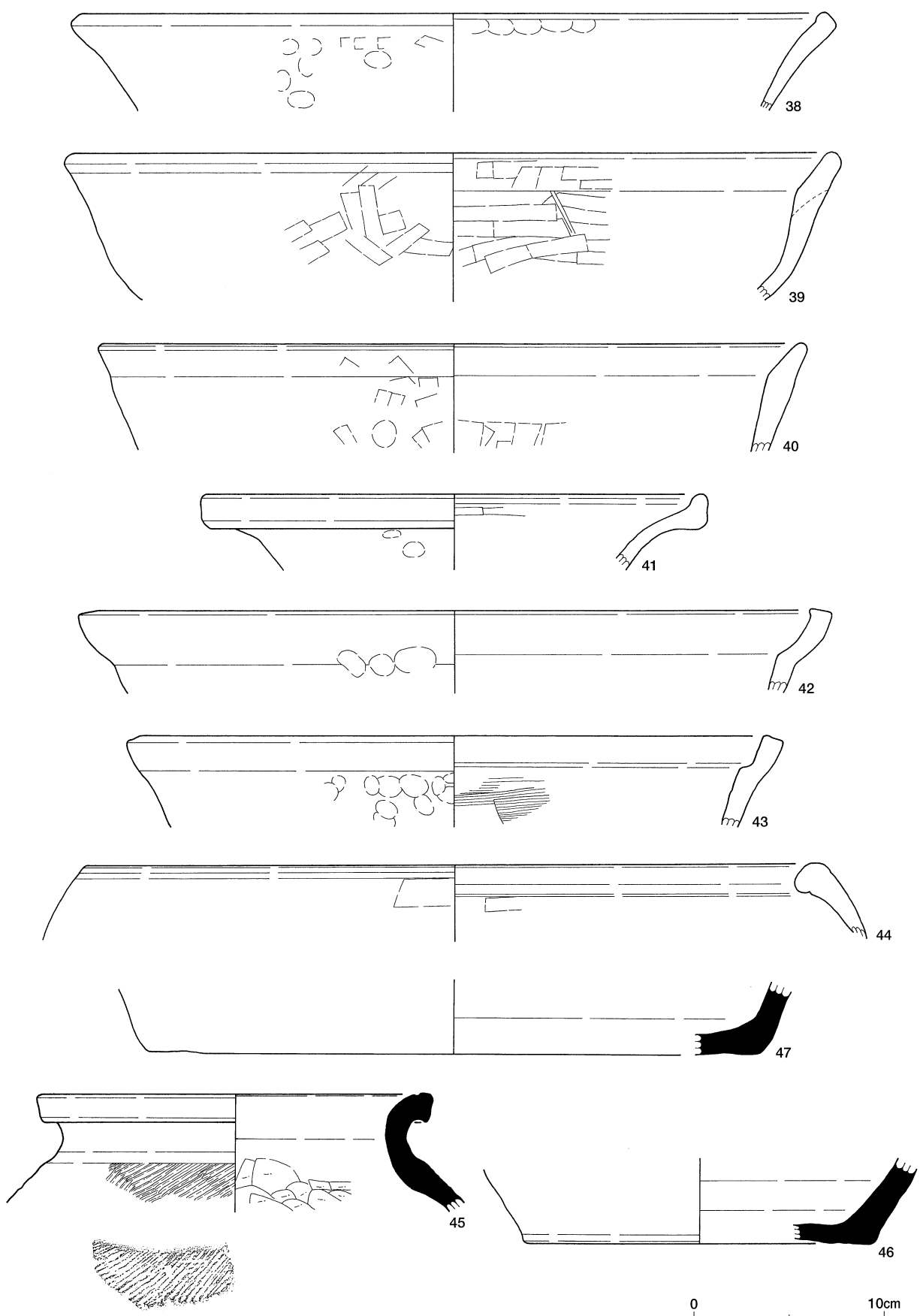
図化することはできなかったが、土師器の羽釜の脚部が出土している。

2号埋葬施設（第40図）

1号塚の西側に位置する。検出グリッドはP-14グリッドである。北側に向かって傾斜する部分に占地しており、1号埋葬施設よりも一回り大きな20~40cm大

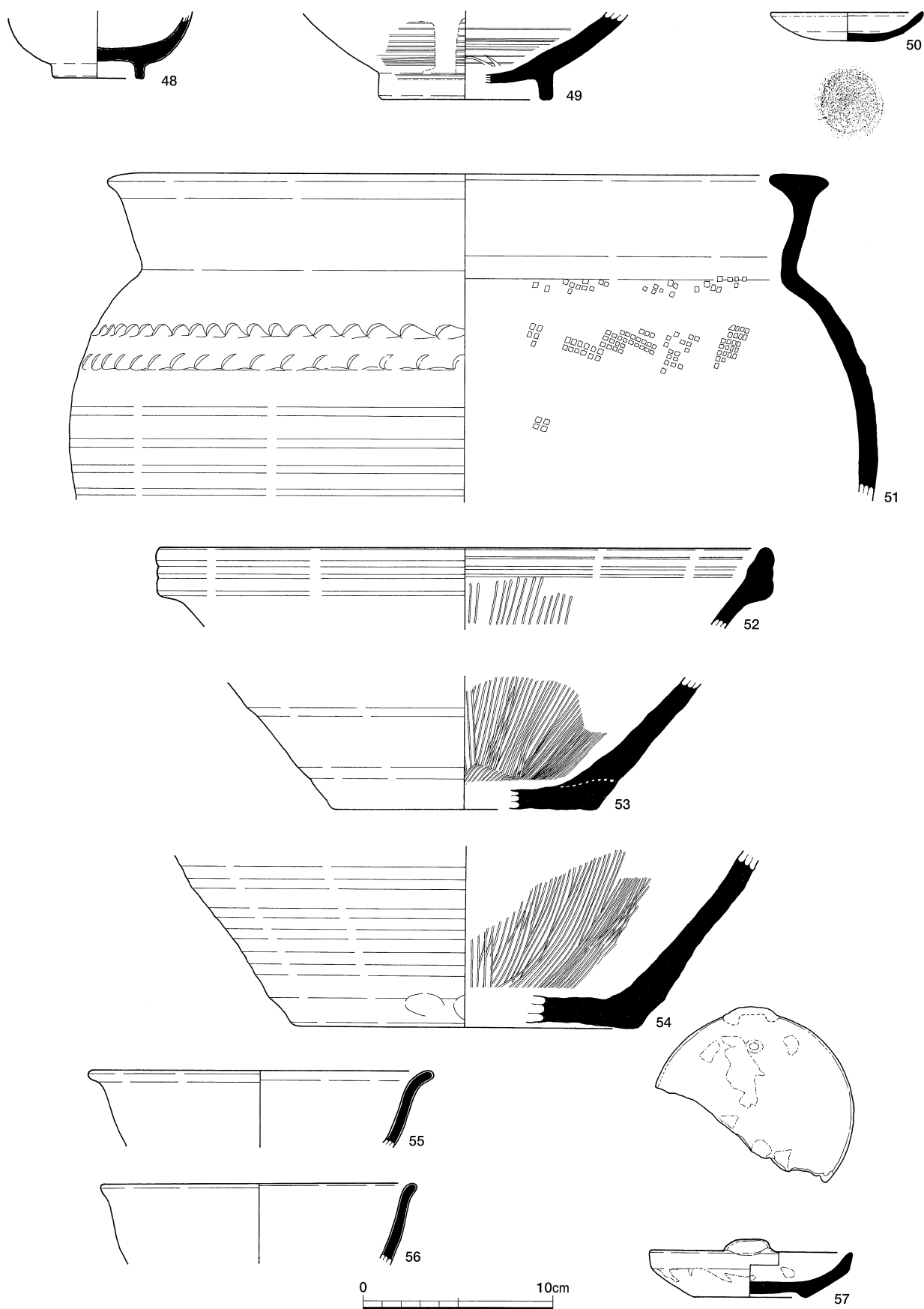


第42图 E区ST1001出土土器 (1)

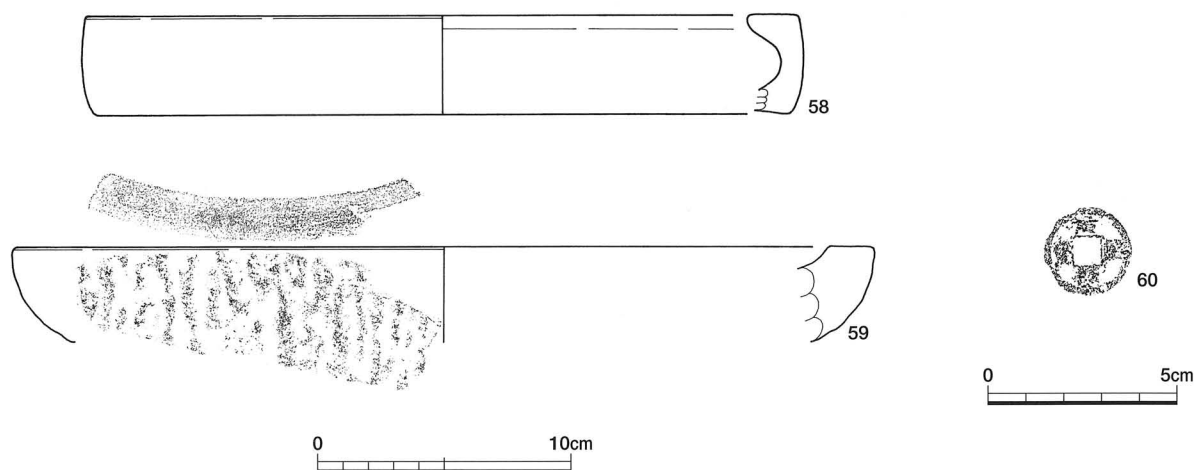


第43图 E区ST1001出土土器 (2)

0 10cm



第44图 E区ST1001出土土器 (3)



第45図 E区ST1001出土遺物(4)

を測る岩盤礫の角礫を用い、水平を保ちながら楕円形に配して囲みをつくり出している。その際に地山を削平することにより整地されたかどうかまでは判断できない。使用している礫は北側には比較的大きな礫を用い、南にいくほど小ぶりになる。遺構規模は長軸0.97m、短軸0.62m、高さ0.4mを測る。

当該遺構に伴う遺物の出土はなかった。

3号埋葬施設(第41図)

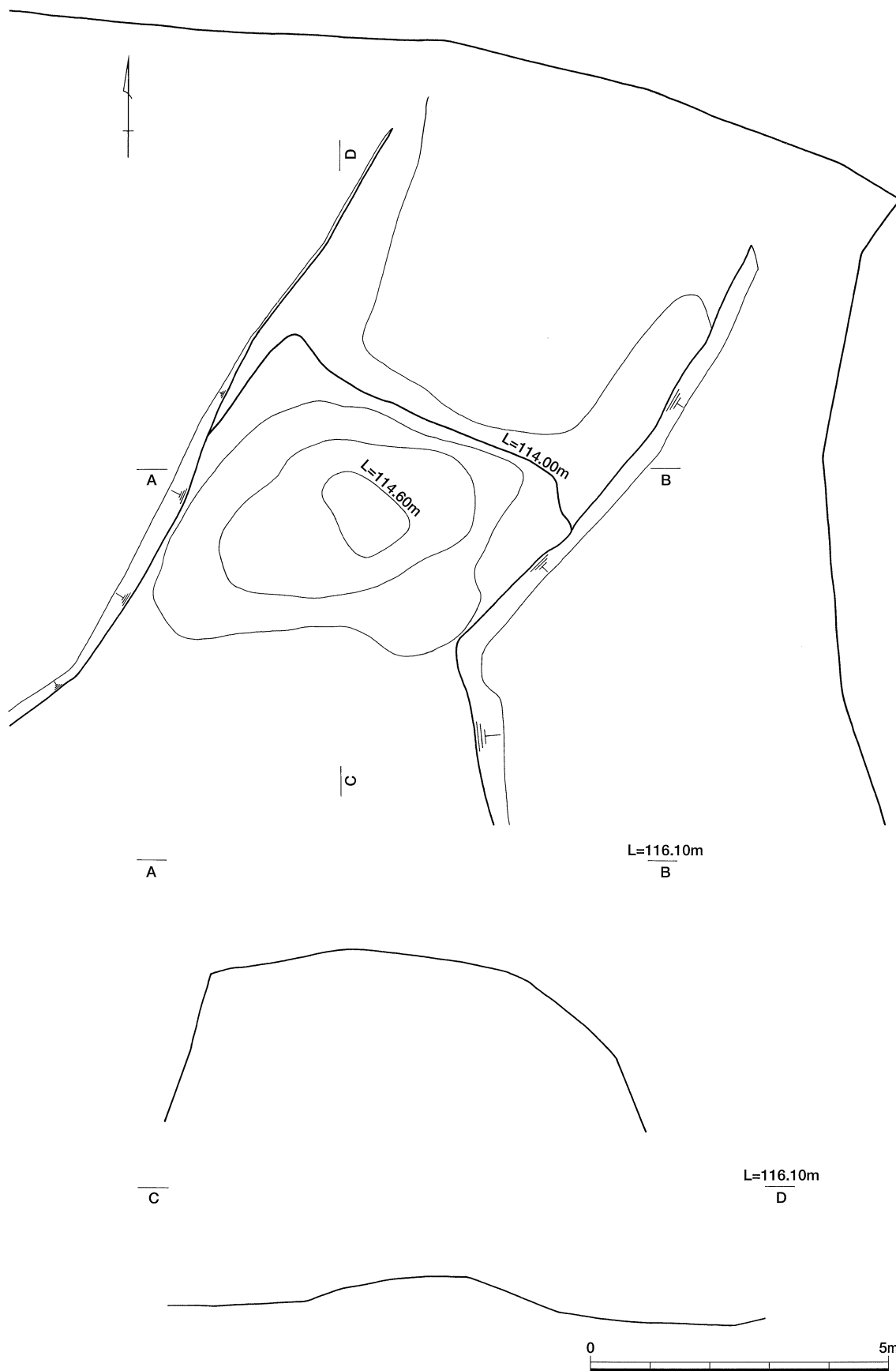
1号塚の北側に位置する。検出グリッドはP-14グリッドである。南側に向かって傾斜する部分に占地しており、1号埋葬施設よりも一回り小振りな10~20cm前後を測る岩盤礫の角礫を用い、水平を保ちながら楕円形に配して囲みをつくり出している。その際に地山を削平することにより整地されたかどうかまでは判断できない。また、これら囲みに配された石はとくに面をそろえることがないうえに各礫の間には隙間があり、積み上げている部分もなかった。遺構規模は長軸0.95m、短軸0.6mを測る。

当該遺構に伴う遺物の出土はなかった。

22~28は土師器の小皿である。29は土師器の皿である。30、31は土師器の茶釜である。32~37は土師器の羽釜である。38~44は土師器の鍋である。45~47は須恵器の甕である。48、49は陶器の碗である。50は陶器の小皿である。51は陶器の甕である。52~54は陶器の播り鉢である。55、56は青磁の碗である。57は磁器の小皿である。58は瓦質の焙烙である。59は砂岩製の石皿である。60は北宋銭である。

2号中世墓(ST1002)(第46~50図)

F区の東側に位置する。検出グリッドはV・W-21~23グリッドである。1号塚とともに地元の住民から「お塚さん」とよび慣わされ信仰の対象となってきた2基の塚のうちの1基である。遺構は標高113.5m~114.1mを測る緩やかな傾斜地に築造されており、直径7m、比高差は約1mほどである。1号塚と同様、塚の上面は小礫を中心として大小様々な大きさの礫を積み上げることなく無造作に盛り上げられ、被覆されていた。そのため裾の特定は困難であったが、礫が散布する範囲を遺構の範囲として捉えることにした。よって塚の径は8.35mを測る。また、当該遺構は、遺構直下に結晶片岩の岩盤が露出しており、塚を築造するために地山を整地することはできない。よって、岩盤のわずかな窪みを利用



第46图 F区ST1002平·断面图